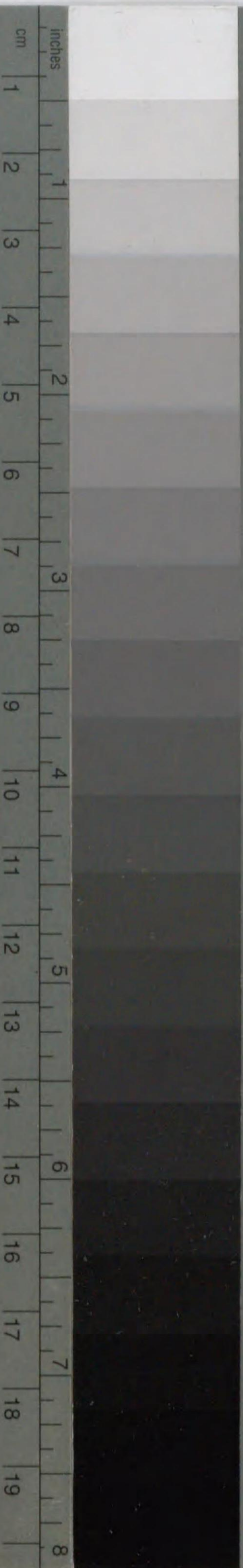


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

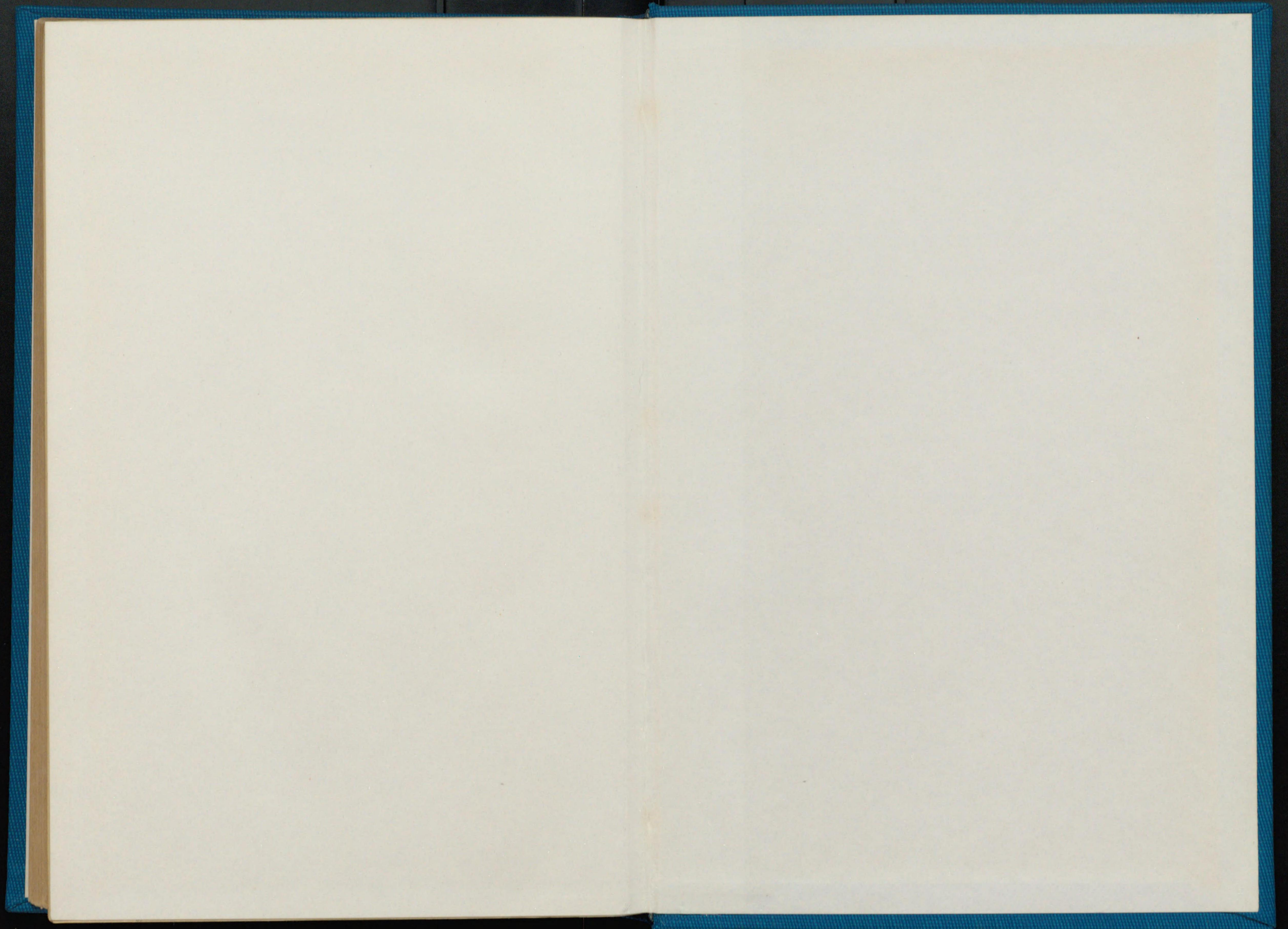
© Kodak, 2007 TM: Kodak

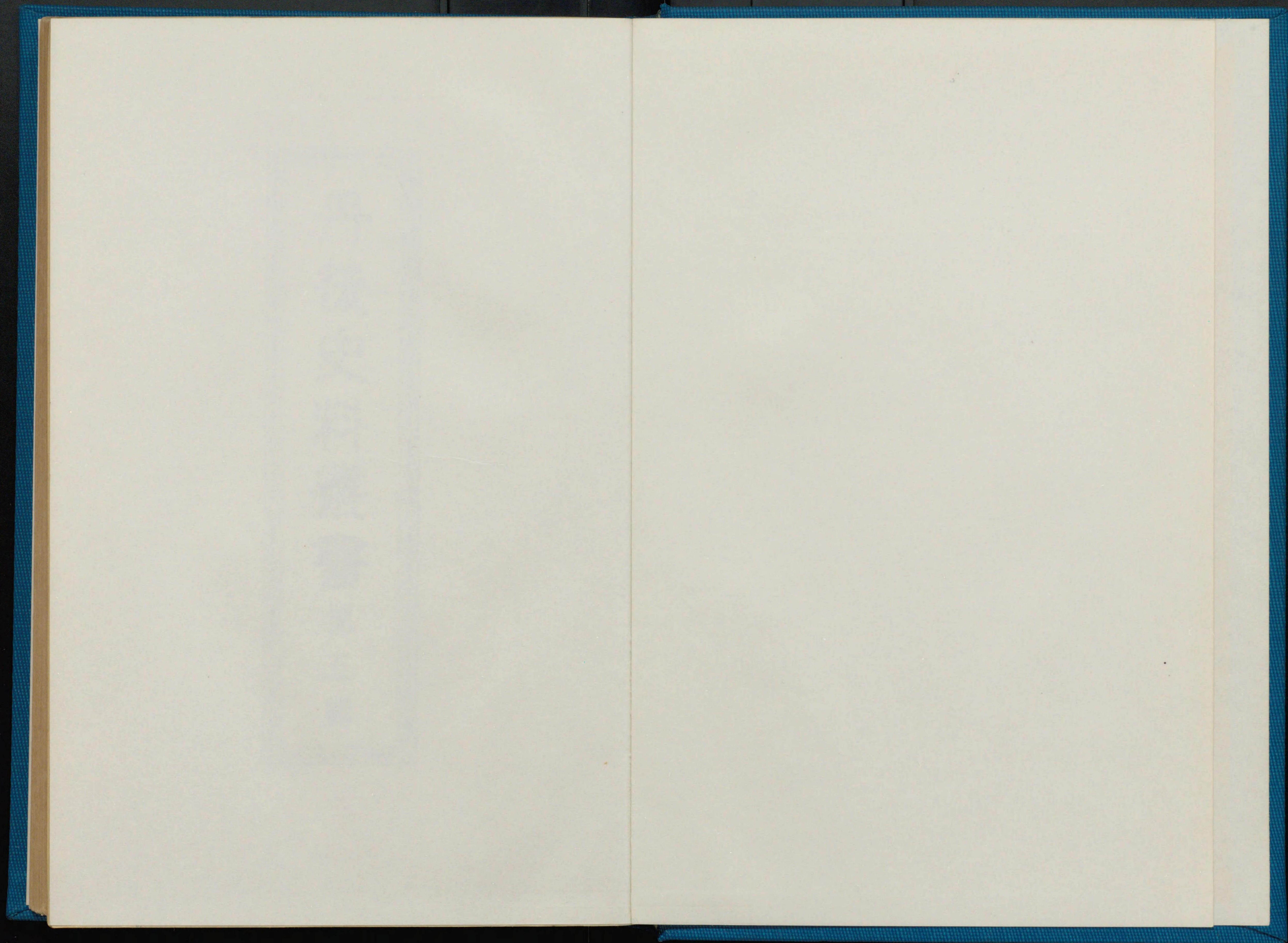


554
157

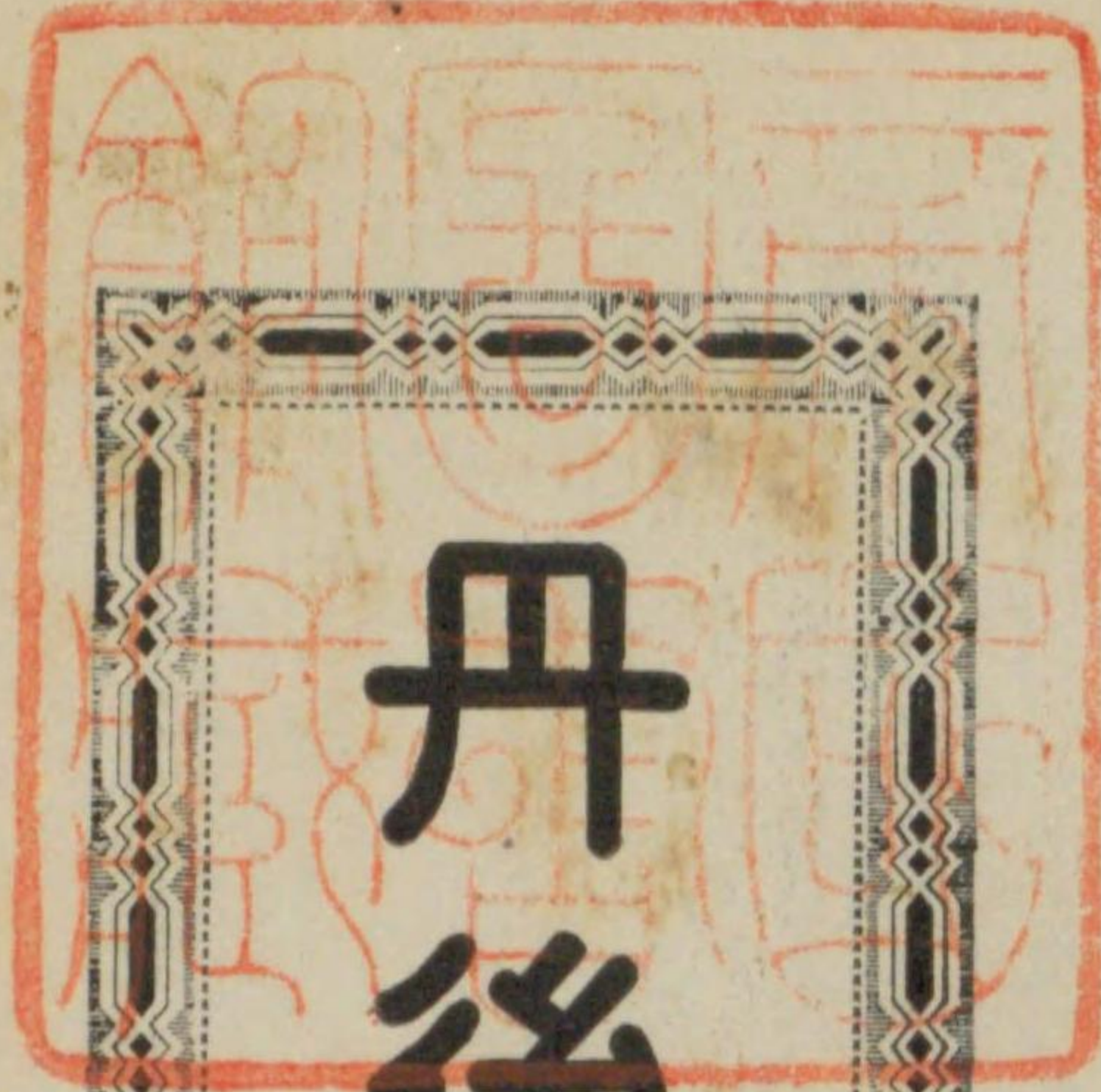
〇 複写

554-157
1200501509868





IT Y26



丹後史料叢書
第五輯





江戸の幕府城
中平筆

才五輯

丹後國式内神社取調書	宮津事跡記	田邊孝子傳
全一冊	全五冊	全五冊

丹後史料叢書全五輯の終刊に際して

橋 本 信 治 郎

本叢書は昭和二年三月、四百有餘名の賛助員各位の熱烈なる同情に倚籍して其の第一輯を刊行しました。創刊前後において江湖から寄與せられた激勵の辭は、我が刊行會をして何等顧慮するところなく、一意専念本事業の遂行に猛進せしめました。月を閲することまさに九、叢書全五、花爛漫の春に生れて紅葉花を欺く秋に長じました。この短かき一春秋の間にも、天は三月七日の大震火災において痛烈極まる大試練を丹後に下して、わが丹後史の上に久遠不滅の烙印を焼きつけました。數十名の賛助員と幾多の貴重な史料とは焦熱地獄の底に灰燼と歸しました。わが丹後史料叢書はこの大試練中にあつて、燃えほこる猛火の中を突進しつゝ辛ふじて安全地帯に避難したのであります。灰燼に歸した幾多の貴重なる史料の爲めにも亦天の大試練の犠牲となつた數十名の賛助員の靈の爲めにも、本叢書の完成は眞に無上の香華なりと信じます。

本叢書は當初五輯約千二百頁と豫告し、ついで約千三四百頁と豫告しましたが、事實において千五百頁を突破しました。この點においては聊か江湖の同情に酬ふところありと存じますが、尙蒐集史料の總てを網羅することのできなかつたことを極めて遺憾に存じます。他日機を得て續刊の計を爲し、重ねて江湖

の共鳴に訴へたいとも存じますが、一先づこれを以て第一期事業の完成と見做し、たゞこゝに棄つるに棄て得られざる丹後史料の權威たる「丹後府志」のみを本叢書の別冊として單行的に發刊したき希望を有し、不日案を具して江湖に見えたいと存じてゐます。

北丹大震災火災の焦熱地獄を脱し來つて、安全地帯に立つて徐ろに過ぎ去つた一春秋を回顧するとき、重ねて贊助員各位の深厚なる同情を感謝せざるを得ません。僻陬丹後の地において、殊に局限せる地方史料の刊行に關して、兎も角も五輯一千五百頁を完成し得たことは聊か以て我が丹後の誇りとするに足ると存じます。この誇りはやはり丹後人によつて築かれたのであります。四百有餘の贊助員が、北は樺太から、南は臺灣から、それ〴〵一石づゝを持ち寄せられたのであります。本叢書の刊行部数は第一輯が五百部、第二輯以下は震災の影響を考慮して四百四十部に減じました。かゝる少数部の印刷を以てして尙且本事業の遂行を得ましたのは偏に各位の聲援の賜物に外なりません。叢書四百四十部、少きが故に貴いやうな感もいたします。終刊に際して謹んで各位に甚深なる敬意を表します。

(昭和二年十月二十七日)

嘉永四年秋八月

田邊 廣瀬 宗 榮 編

田邊孝子傳

全五卷
集輯

大正十二年六月十日寫了

田邊孝子傳序

天地之性人為貴。人之行莫大於孝。吾藩
先老治國以仁政教民以孝弟。

先君松樹公敏子好學。建學校。迎師於浪華。
使一藩士庶致之。從事於斯。其餘沃及於下民。
今公承統。繼業。弦誦隆於上。禮飲醇於下。世
濟之美。何足盛也。予少時在家庭也。以父兄

預_二改_一。屬_二同_一郡中賞孝之舉。後在_二本師
部。友務_二賊_一。欲_二報_一。當時_二所聞_一孝子數令_二仍
實。以_二遺_一之_二予_一之_二子孫_一者。乃_二年_一于_二以_一矣。採_二採_一既及
數_二丈_一。夫_二賤_一民皆_二生長_一於_二草野_一。每_二走_一於_二衣食_一。未
曾_二夢_一少_二仁人_一君子_二之道_一。而_二能_一然_二者_一。蓋_二根_一於_二天性
也。嗟_二乎_一。孝_二弟_一之心_二人皆有_一之_二矣_一。行_二之_一則是_二爲
耳_一。不_二待_一求_二德_一矣_二。域_一也。不_二待_一求_二諸_一顯_二宦_一也。在

求_二之_一吾_二鄉_一。乃_二有_一餘_二矣_一。予_二慨_一其_二美_一之_二隱_一滅_二而
不_一彰_二。在_二竊_一按_二記_一載_二於_一後_二吏_一。實_二事_一實_二於_一鄉
人_二雖_一其_二行_一亦_二不_一尤_二。賜_二賞_一。覃_二之_一者_二。悉_二舉_一而
不_二敢_一畧_二之_一。其_二言_一之_二鄙_一俚_二。與_一織_二之_一淺_二陋_一。且_二不
暇_二觀_一志_二。縱_一爲_二五_一卷_二。名_一曰_二田_一色_二孝_一子_二傳_一。上
梓_二公_一之_二。欲_一授_二孝_一子_二之_一爲_二子_一孫_二者_一。來_二者_一見_二此_一書_二。
有_二所_一感_二於_一乃_二祖_一乃_二父_一之_二孝_一。而_二能_一悟_二其_一美_二。則

此書也。不遷、往時之志蹟。而實將為
 吾藩教化之一助。是區々之志也。文政乙酉
 秋九月源廣瀨宗榮識



男 宗弘書



回邊孝子傳卷之一

凡例

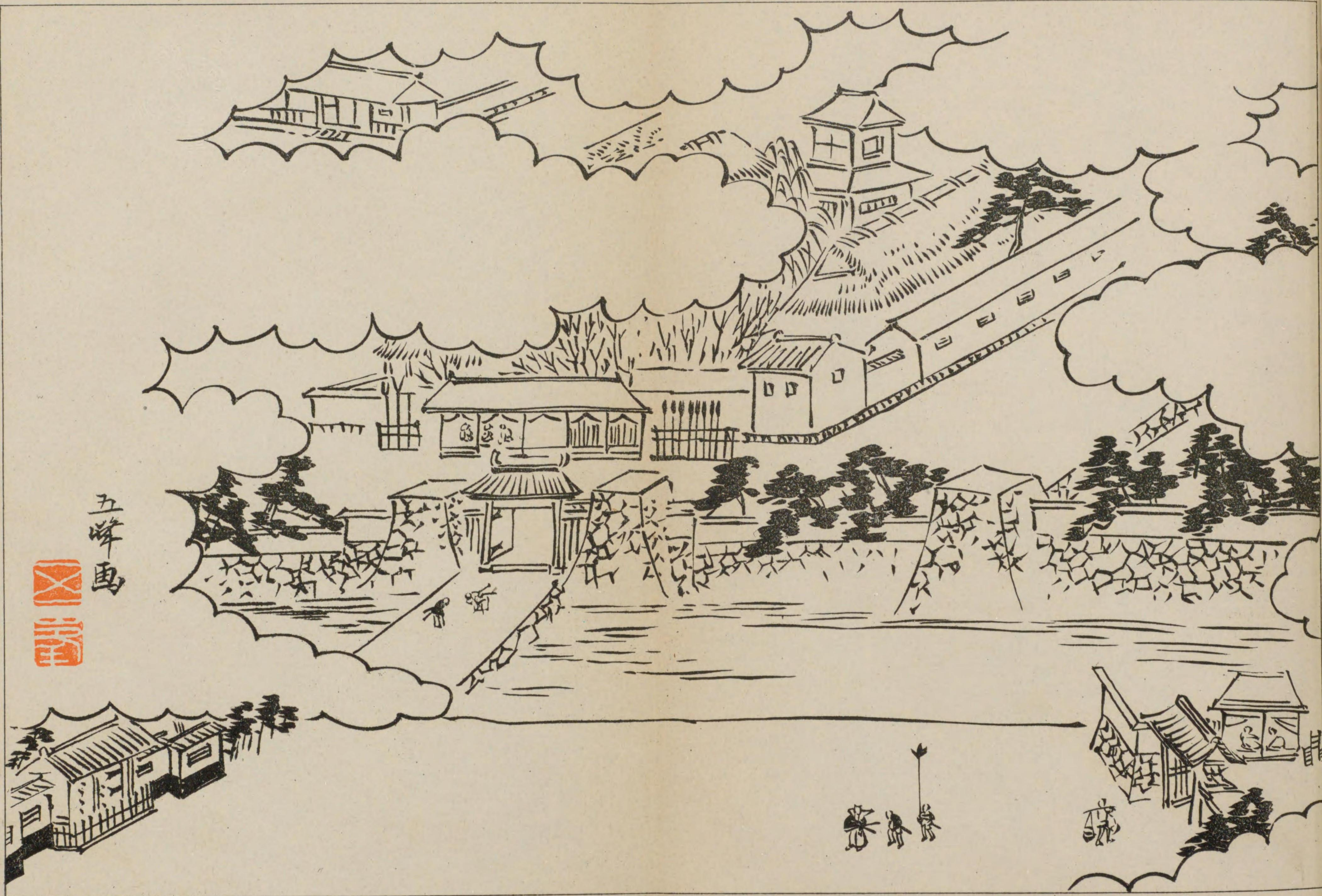
- 一 此書他邦乃人の為に作らざり。其國民に傳へんとする故に書中惣に其邦の字を加ふ。津城下津原員の事
- 一 年月日時順に記せらる。職氏記録の助とするなり
- 一 孝の優劣を分せず。貴乃年次をとつくるなり。いづれに在町の次中を分てり。されども常津村

糸を清く巻軸に載す。巻の首尾を結ぶ
糸のなまり

一書中戯画を後へ。思女子のんふ便す。あえ。
墨風の遠い。あま

一正字ふ。敬もを忘す。下民は。無。あ。あ。
あま

以上



五峰園



の上

とらふなり

書乃る拙き筆の人のあ
議の息をうへた人のあはれ
親を尊ぶ事ありきちよ
あつちの徳をうへたあはれ

554-157

田邊孝子傳 全五卷 總目錄

- (一) 溝尻村喜右衛門女
- (二) 岡田由里村武右左衛門夫婦
- (三) 由良村權右衛門夫婦
- (四) 富室村德三郎女
- (五) 多門院村忠右衛門女
- (六) 公文名村伊左右衛門子源太郎
- (七) 朝代町長兵衛女
- (八) 南有路村兵助源五郎兄弟
- (九) 上湊原村定治郎妻
- (二) 引土村利兵衛
- (二) 堀上町善右衛門
- (三) 池內下村重次郎夫婦
- (三) 女布村六右衛門妻

- (四) 伊佐津村庄七妻
- (五) 園田由里村吉左右衛門妻
- (六) 大俣村與想右衛門友吉兄弟
- (七) 桑飼下村安四郎妻
- (六) 中山村與兵衛妻
- (元) 石浦村福松
- (三) 八田村惣右衛門夫婦
- (三) 東吉原町甚六
- (三) 森村西右衛門女
- (三) 眞倉村藤助夫婦
- (四) 富室村辰五郎
- (五) 志高村和七妻
- (六) 河原村平助妻

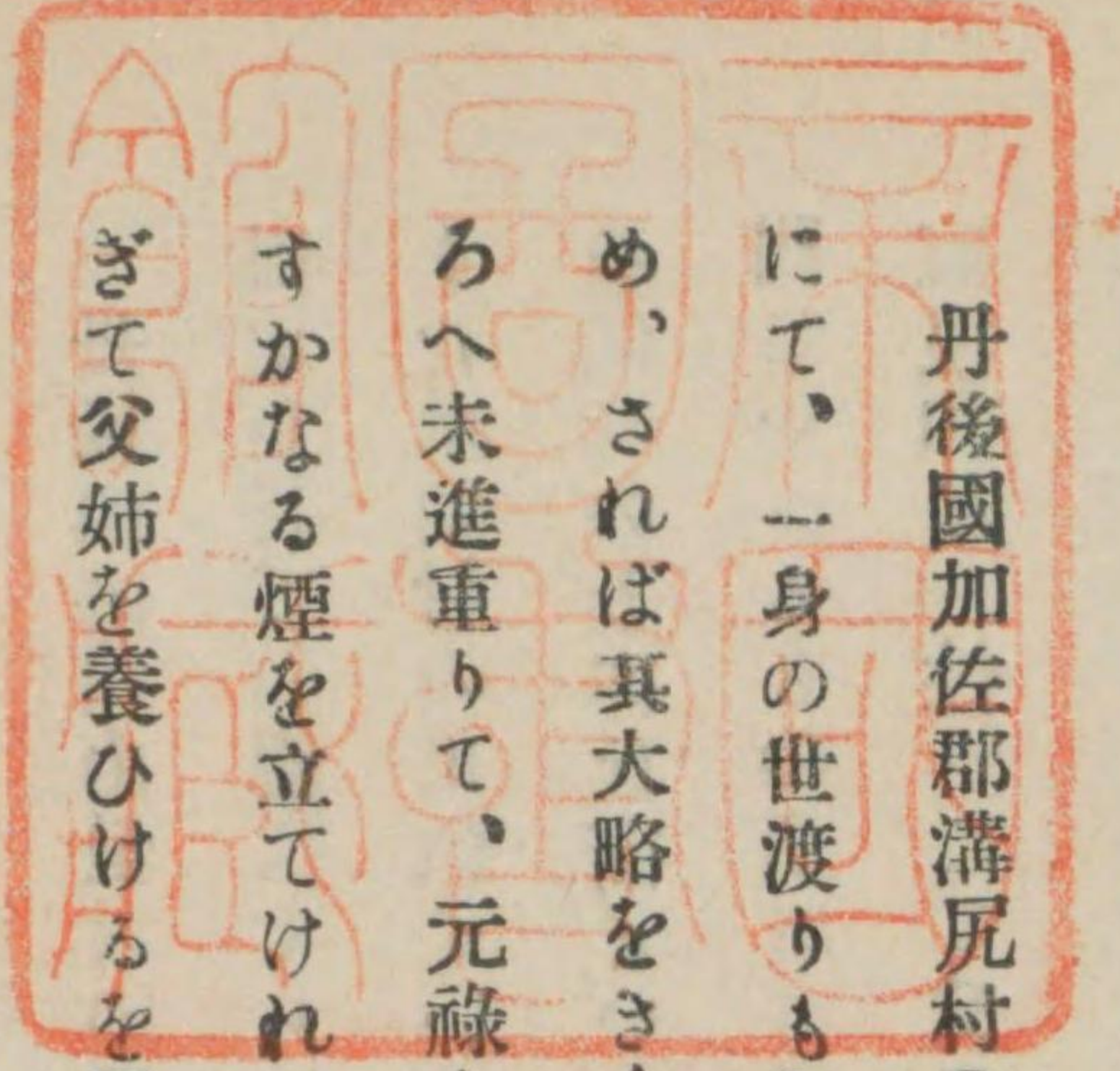
- (七) 貳箇村武助夫婦
- (六) 萬願寺村兵七
- (元) 東吉原町利兵衛
- (三) 同町九郎右門衛
- (三) 大内町嘉七女
- (三) 堀村與惣兵衛
- (三) 與保呂上村藤吉
- (四) 朝來中村清八
- (五) 福井村佐兵衛妻
- (六) 紺屋町嘉吉
- (七) 地頭村幸七
- (元) 下漆原村與右衛門妻
- (元) 久田美村太三郎
- (四) 大川村清七妻
- (四) 女布村久左右衛門妻
- (四) 丸田村定右衛門
- (四) 富室村幾五郎
- (四) 河原村彌助
- (四) 同村傳次
- (四) 同村傳七
- (四) 上安久村五左右衛門夫婦
- (四) 魚屋町清左右衛門女
- (四) 平野屋町重太郎
- (五) 魚屋町儀左右衛門妻
- (五) 紺屋町喜太郎
- (五) 西吉原町長七
- (五) 布敷村清三郎
- (五) 桑飼上村善五郎妻
- (五) 常津村彌左右衛門

總目錄了

田邊孝子傳

卷之壹

(一) 溝尻村喜右衛門女



丹後國加佐郡溝尻村の民に、喜右衛門といへる者、二人の子あり、姉をさつといひて、身不具なる生質にて、一身の世渡りもなり兼ね、妹のなあとといふもの、父姉につかへて孝友の道を盡せし行狀多かるならめ、されば其大略をさくに、父喜右衛門、前方は田地二十石餘も持し百姓なりける所にいつとなく家おとろへ未進重りて、元祿十三年のころ終に田地を賣拂ひ六右衛門といへる百姓の地のものと成て親子三人かすかなる煙を立てけれども、父次第に年老い姉は右のごとく働ささへもならざれば、なあ一人にて晝夜稼ぎて父姉を養ひけるを里人あはれみ、なあに縁組せん事を勧むるといへどもなあは父姉の難儀を見すがたしとて肯ずして、其身四十歳過ぐるを、一身のはたらきを以て、齡七十餘の父と不具なる姉に孝弟を盡しける事夫々の事跡を村長等郷長とはかつて、元文元年辰十二月其孝狀を訴へ出ければ、委一に御上に達し奉れば其孝を御賞美あり、且此のち孝養の怠りなからん事を示したまひ御藏米若干下し賜ひ、なほ村長を始め、同村の者へ仰せられ孝女なあが諸事に心をつけつかはせよと令し給ひける。孝女はかの賜の米を

村長へ預けおき、その元利をもつて父姉につかへて怠らざりけるとかや、其餘りの行狀は世遠く隔りて探るに據なし。

(二) 岡田由里村武左右衛門夫婦

丹後國岡田由里村の民武左右衛門夫婦の者共父母に事へて孝なり、父を安左右衛門といひて高五石餘の田地を持て相應にくらしける、百姓なりけり。母は武左右衛門が九歳の時身まかりぬ。其翌年秋のころ父また水間村の民森といへるもの、妹を娶て二男庄五郎を生む、武左右衛門妻は名をたあとよびて、實は上桑飼村の太郎兵衛といへる民の女なり。幼にして父母に後れ孤となりしを同桑飼村に住ける叔父清左右衛門といへるもの引取て長となし則養女として此武左右衛門方へ嫁せしむ、のち女子を産む、夫婦ともに正直溫和なる性質にて父母に事へ兄弟仲むつまじく暮しける。扱貧富をいはず賤民のならひにして年老ぬれば子に家をゆづり己は隠居家を構え別家に住むことおしなべて皆しかり、安左右衛門も年老ければ此十年前を持高五石餘りの中三石五斗八升餘の田地を付て武左右衛門に家をゆづり、のこり一石五斗餘の田地をもつて其身夫婦と次男庄五郎を連て別宅にうつり隠居の身となりける。さて武左右衛門夫婦世に聞えたる孝行を盡せし、その一ツ二ツを擧げていはば、父安左右衛門藁草履を造り親類へ賜物となし、又武左右衛門へも此草履をはきて實母の墓所へ參詣いたすべしといひつかはしける事あり。此とき妻のたあ、夫に向

ひていひけるは舅御のかくいひ越し給ふ共此草履は父御の造給ふものなれば、冥加おそろしく思ふなり、必はき給ふ事勿れと止めけるとかや。其後父もいよく年老いければ、繼母と庄五郎をか隠居家に残し、父を我方へ引とり夫婦心を合せ孝養を盡しける。しかれども富貴貧賤は人力の及ぶ所にあらず、近きころは家もまづしくなりぬれども成だけ食し易きものを撰みて父に進めぬ。夫婦ともに作場へ行ときは娘を付おきけれども終日に父のさみしからんとおもひて夫婦の内交々に兩三度づゝもかへり見て安否をどひ慰めてはまた作場へゆきて農事をはげみける。二三年まへ五月雨の頃かどよ、安左右衛門齡九十餘歳になるといへどもその身には若きころにてもや牛の飼草を刈に行かんとするをたあ聞て年寄たまひて、あぶなき事なりと、しきりになぐさめ止めければ舅もころよく止りけり、程なく夫歸り來るを見るや否や妻あはて、云ひけるは先程舅御様の草刈に行かんとたまひしかども、御年よられて危き御事と止めしよしを告れば武左右衛門さゝて其方のいふ所尤もなれども、又父のさほどにのたもふものなれば却て御氣はらしにも成事もあるならん。何事も父の氣儘にまかすべしといひ付て己は作場へ行ぬ、その後にて舅また草刈に行かんといひしかば、妻は夫のこと葉にしたがひ、舅の心に任せぬれども兎角心元なく思ひて舅の目につかざる様に後より忍び行、先にては我をわすれて手傳をなして草を刈りかへりし事もありけり。月たつにしたがひて父老病にて歩行自由を得ざれば猶更大切につかへ天はるゝ時は、暖なる所へ脊負ひて氣を轉ぜしめ夜は夫婦兩脇にふしてね起の介抱に心をくばり、冬季にいたれば夫婦のもの我身を以つて蒲團をあ

たゝめて寝しめ、就中妻の孝心すぐれけると、里人とりわけ賞しけるは此夏のころより舅大小便とも取はず事度々なり。されども厭ふ色もなく其度毎に穢れたる衣類をさせかへ、敷物に至るまで人手にかゝる事なく、夜中或は未明をいはず家人の目にもかゝらざるやうに密に洗ひそゞぎて心を盡し事ゆるに舅も、此年月懇なる志を感じよろこびのあまり手を合せて嫁を拜みよろこぶ事度々なりければたあは或時夫にむかひいふやうは舅御の事なれば心のおよぶだけ介抱すべき筈なるを拜み給ふては冥加の程もおそろしく却て迷惑のよし述ける。武左右衛門此よしを具に父に告げれば、父猶々其孝を感じよろこぶ事限りなかりしとなり。武左右衛門常に上を重んじ御法令をまもる事はいふも更なり、御役所へ年貢米を納るときだも升目餘計に持行て足らざる事とは露なかりし、或時胡麻納めに出しとき例のごとく升目餘分に持行ぬ。役人升目を改め其餘分を武左右衛門へ戻しける。其時餘人の升目不足せしもの、彼武左右衛門があまり胡麻を買んど乞ふ、武左右衛門答へけるは我胡麻の餘りしこそ幸なり、持かへり親に食さしめんとおもへば、賣る事は許し給はれとことわりける。かゝる孝心なる者なりければ、繼母に事ゆるも亦よく繼母も實子庄五郎より武左右衛門を大切に思ひぬと、常に人にかたり悦びける、孝子の深愛有ものは必ず和氣ありとかや、他人に對しても睦じかりければ、里人擧つて彼が孝を賞し寛保二年戊十一月村長訴出家老へ達す。家老大に感賞したまひ、取敢ず當座の難儀救はずんばあるべからずとて御藏米炭を添へて與へおかれ後、君の御聽に達し奉れば、翌年正月夫婦が孝を厚く賞し、武左右衛門持高の年貢永く免許せしめよと仰せられ

目餘計に持行て足らざる事とは露なかりし、或時胡麻納めに出しとき例のごとく升目餘分に持行ぬ。役人升目を改め其餘分を武左右衛門へ戻しける。其時餘人の升目不足せしもの、彼武左右衛門があまり胡麻を買んと乞ふ、武左右衛門答へけるは我胡麻の餘りしこそ幸なり、持かへり親に食さしめんとおもへば、賣る事は許し給はれとことわりける。かゝる孝心なる者なりければ、繼母に事ゆるも亦よく繼母も實子庄五郎より武左右衛門を大切に思ひぬと、常に人にかたり悦びける、孝子の深愛有ものは必ず和氣ありとかや、他人に對しても睦じかりければ、里人擧つて彼が孝を賞し寛保二年戊十一月村長訴出家老へ達す。家老大に感賞したまひ、取敢ず當座の難儀救はずんばあるべからずとて御藏米炭を添へて與へおかれ後、君の御聽に達し奉れば、翌年正月夫婦が孝を厚く賞し、武左右衛門持高の年貢永く免許せしめよと仰せられ



て御家老より免許の狀を下し給ひ、白銀二枚をたまわりける。夫婦のもの思ひもよらざる君の御感賞をかふむり速に家に歸り父母に告ぐ。父母また君恩の身にあまりぬるとてよろこぶ事限なく、夫より父夜ごとく云出し歡の餘り終夜眠る事を得ざれば、孝子夫婦また咄相手となり、共に歡び夜を明す事多し、此のち武左右衛門朝毎に垢離を取りし故近隣の者其故を問ふ。答へて曰く、此度結構なる御褒美を頂き難有こと冥加至極といひつべし。其君恩何を以て報奉らんや、せめては君御安泰にあらせられかしと恐多くも心願をこめ祈奉ることなん聞えける、此時父齡九十八歳、繼母八十四歳、武左右衛門五十三歳、たあ四十二歳、庄五郎三十八歳、女子十八歳になりける。

君ことに御賞翫の餘り、孝子夫婦の行狀を書せて諸人の能龜鑑にも成べしとて、御領分へ觸知されけるとかや。誠に難有御仁惠誰か仰ぎ尊ばざらんや。其餘の行狀ありといへども河村誠之の孝順記にあり、譲りて次にしるす。

農民武左右衛門夫婦孝順記事

孝子武左右衛門丹州田邊封内。岡田郷由里村之農民也。父安左右衛門。母某。蚤死。弟庄五郎、後母之所生也。妻名、太安。桑飼村農民太郎兵衛ノ女也。幼、喪父叔父清左右衛門取テ養之。長リテ嫁ニ武左右衛門ノ生ニ一女ニ夫婦資性孝順。事ニ父及繼母一與、弟獲ニ其悦ニ矣。父老築ニ舍於近隣。分ニ田産一與ニ繼妻及庄五郎ニ遷居焉。親老昆季異レ、爨者凡民俗之所同也。夫妻晨昏定省、少間則行侍ニ父母之側一怡々色養焉不ニ數年。父復

還_二于武左右衛門之舍。家雖_レ貧凡便身之物。竭力供給。每_レ出_二府城。必買_二魚果甘之物。肥_レ歸進_二之父母。母及弟。常來_二于武左右衛門之舍。終日談笑情意忻々。晝視如所生焉。夏則就_二清涼。冬則設_二火坑。臥_レ之。夜則夫婦寢_二其左右。以身溫之。每_レ洩便。扶從之。夫從焉。婦則在_二臥席。以身溫_レ被。婦從焉。夫亦如_レ之。父及_二耄期。起居不_レ衰牙齒完固。好食_二剛物。婦常熬_二菽麥之類。爲_レ茶果以進_レ之。至_レ秋穫。菽曝_二于穀架。而未_レ納_二于公府。則使_レ妻拾_二架下脫落者。爲_二熬果。以食_レ父。村民納_二胡麻於公府。多以所_レ納_レ之。餘交_二易酒果器用於市廛。而歸。獨武左右衛門不_レ賣歸和_二醬蔬。食_レ父之所嗜也。其雖_レ欲_レ食親_レ之切。而未納_二于公府。則不_レ敢用_レ焉。凡納租給役也。先_レ公而後_レ私也。皆如_レ之。其於隣里相親愛。無_レ一問言雖。嘗有_レ販_二銅器之商。日暮乞_二宿武左右衛門。以家貧無具有難色。妻竊告_レ夫曰。日暮途究其情可憫。且見非_二奸詐之徒。雖無_レ雞黍之設。妾能待_レ之。請_レ許_二其乞。夫曰諾。其遇_レ客也情意欸厚無_レ少厭倦之色。少間則入_レ室。候_二親之安否。至_レ明客感謝而出語_レ人云。疇昔主人之婦。我不_レ知_二其如何人。矣。我廟郡國也雖多。其和順貞淑未_レ見_二若人。矣。草蔬之薄。厚意勝於膏粱也遠矣。嗟乎我不_レ知_二其如何人。矣。蓋孝順之德施及_二乎他人。也如此矣。壬戌之秋安左右衛門患淋閉。浪數其苦羸憊無能與。婦則衣物巾襪之屬藉之。以承屎溺每利即取浣濯易以_二乾淨者。未_レ嘗使_二濕汚者藉_レ焉。夫慮_二其力之不_レ給。謂妻曰。一二次而易焉可也。妻曰諾。余夜間或無人之時。竊澀濯晒乾而不_レ復使_二夫知_レ也。翁之血膿汚_二染臂上。生瘡疹。恐_レ翁見_レ之而愛侍翁之側。必袖_二其手。里人或以爲翁之疾。蓋因_二廣東瘡之餘毒。婦之瘡疹觸_二其汚染之所。致也。婦聞_レ之恐_二醫或誤聞而用藥之不_レ應。症告醫云。翁元無_二瘡疾。吾臂上瘡疹者暑濕之所。致翁之病爲也明矣。請_レ思_二諸。醫云然婦亦不_レ以語_レ人。其用_レ心之密也如此矣。翁慰_二其勞。而屢拜_二謝之。婦告_レ夫云。妾所_レ爲者子婦之常耳。唯恐不_レ能_レ盡矣。且尊之拜_レ卑也。冠履倒置妾其恐焉。子告_レ父人使莫爲意焉。翁喜垂涕。翁時九十八。病亦繼愈。都農正南部彌左右衛門。以聞于城府。時城主牧野公。朝覲在干東都聞之。感賞命除_二其田租。賜_二婦白金廿兩。聞_レ之者無_レ不_レ悅服。善者勸焉。不肖者懼焉。勸懲之典道人化俗也亦如此矣。亦足_二以見_二乘彝好德之良心。人々之所同而非有強焉擴而充_レ之。則國可治天下可平焉。聖人以爲_二至德要道。者。豈不_レ信哉。

右所述一該事實。不_レ加_二假飾。以備_二于世之撰_二孝子傳。者之參考。然衍文之拙恐_二模倣之間辭義之與事相乖_レ也。庶後之君子刪定使_レ茲夫婦之行實不_レ泯乎萬世焉。

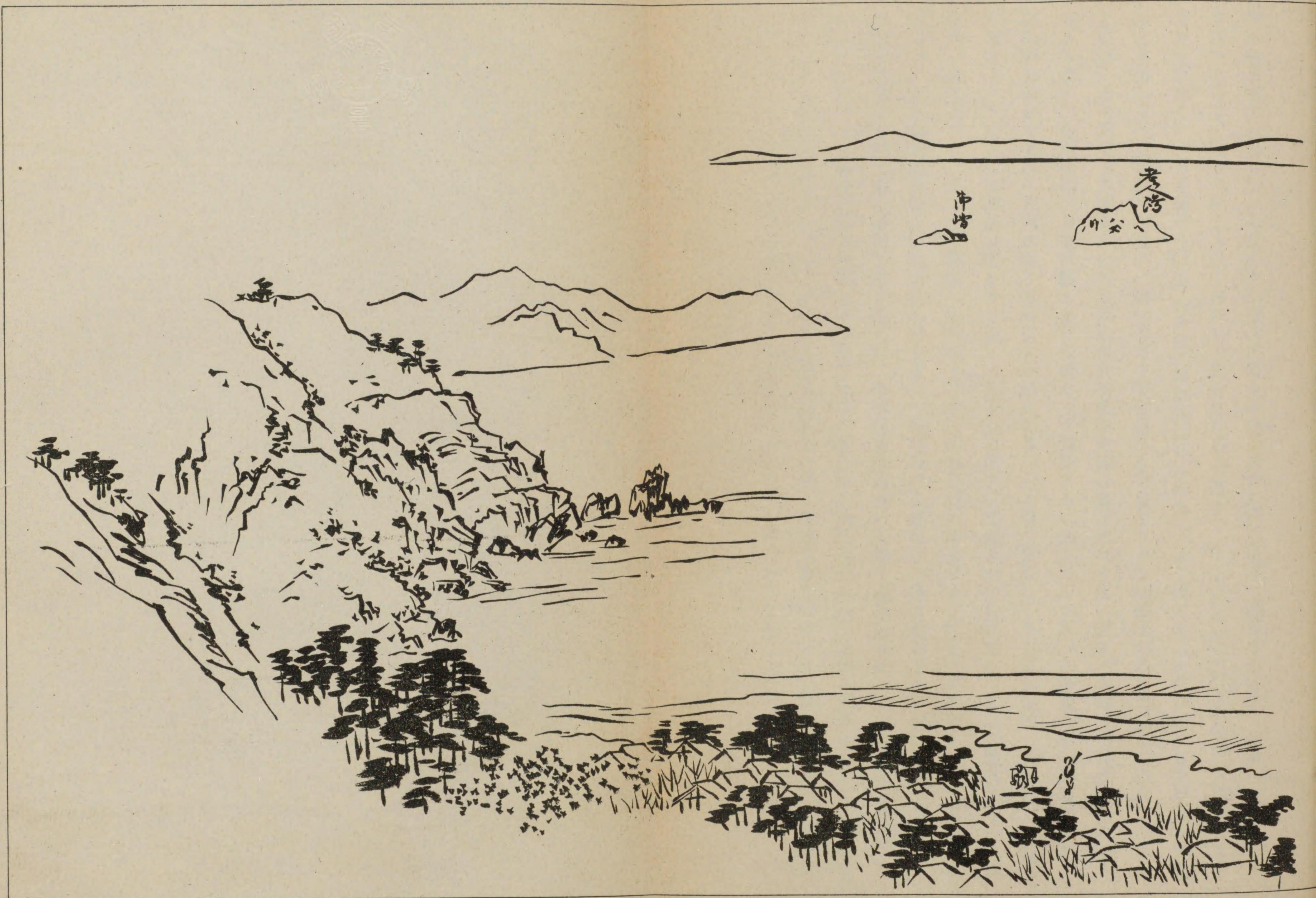
寛保癸亥之春二月朔旦

南京 河村 誠 之 撰

(三) 由良村權右衛門夫婦

丹後の國由良村といへる所は、曾根の好忠の歌に、由良の戸を渡る舟人と詠みしは紀州田邊の事也とも云ふ、左にはあらず、此處をよみし歌なり。紀州の田邊は梶をたへる海にはあらず、賀茂季鷹もいひしとかや、この湊北海の餘波打よせ白砂數町に横ざりたる濱にして、春の頃よりは里の男女うち交り、女浪

男浪の潮を汲み取り運ぶ願勢鹽屋の煙は濱松に棚引ひなびたる風情いふ斗りなし、夫より左の方を願れば由良ヶ岳そびえ頂に虚空藏を安置す。弓手に長尾峠見えて天の橋立へ三里餘の道法を隔てり、麓には岩石重りて松ヶ枝浪に洗ふ、前は渺たる萬里の滄海白帆風に連り、獵船の行還は秋の木の葉の空にひるがへるごとし、心天外にとび眼力及ばざるその中に二ツの島あり、各々めぐり一里ありとかや、これ若狹宮津田邊より八里の沖にして田邊に屬す。其一島は老人島と呼びまた冠島ともいへり、其かたちの似たる名なるべし。中央に老人島明神の祠ありて往古より獵船のもの米鍋釜を持行きて祠に納む、これ風波の難に逢しとき豫めのはかりごとなり。島桐島桑を産す、竹あり亦諸鳥多くすめる中に浦人さば鳥と呼んで鶉の類にして羽節二ツあり、常に穴に巢ひ卵を産む他國に見馴れざる鳥なり、俵岩といへる處を過ぎて北面へまはれば數十丈の岸壁の七八合許りに鷹の巢しところは見るも恐ろしきばかりなり。此島を北へ一丁ばかり離れて屏風を疊み建たるごとく高さ十四五尋ほどの岩海上に突立ちたり。冠の巾子のごとく立神とも八丈岩ともいへり。又北へ渉る事一里にして今一島を沖の島ともくつ島ともいへり、是もまた形によりて名付けたるならめ、それより丑寅に眼を振れば加賀岬越前岬より若狹とつらなり、我國大浦といへるは浦々の惣名にして、丹後鰯を漁るほとりは、すべて岩石そびえ風景唐繪のごとく、時としては海鹿となんいへる海獸岩上にねむる事あり。此浦邊より天氣はれ明なる時は、稀に朝鮮國見ゆると浦人いひつたふ、されども朝鮮は西に當るべし。いぶかし疑ふらくは女真滿洲の國か、又は隱岐の島ならんか、さて巽にあたり博奕



して羽節二ツあり、常に穴に巢の卵を産む他國に見馴れざる鳥なり、倭若といへた處を過ぎて北面へまはれば數十丈の岸壁の七八合許りに鷹の巢しどころは見るも恐ろしきばかりなり。此島を北へ一丁ばかり離れて屏風を疊み建たるごとく高さ十四五尋ほどの岩海上に突立ちたり。冠の巾子のごとく立神とも八丈岩ともいへり。又北へ渉る事一里にして今一島を沖の島ともくつ島ともいへり、是もまた形によりて名付けたるならめ、それより丑寅に眼を振れば加賀岬越前岬より若狭とつらなり、我國大浦といへるは浦々の惣名にして、丹後鯨を漁るほとりは、すべて岩石とびえ風景唐繪のごとく、時としては海鹿となんいへる海獸岩上にねむる事あり。此浦邊より天氣はれ明なる時は、稀に朝鮮國見ゆると浦人いひつたふ、されども朝鮮は西に當るべし。いぶかし疑ふらくは女真滿洲の國か、又は隱岐の島ならんか、さて巽にあたり博奕

岬金崎見ゆ、筥岩とよべるは高さ七丈八尺幅五丈餘り四角に突立頂平に盤面のごとく、其廣さ疊八疊もしくばかりにて、厚さ八尺ぐらひの岩にして色合他に異り、箱のごとく上に六尺ばかり蓋の如く覗き出たり。浦島が筥岩といへるも理なり、山の八合位に根の顯れたる松あり、太さ五尺まはり高さ四丈五尺程ありて箱岩より抽んで生出たる其粧ひ、繪にも寫す事を得ざる奇景なり。これ神崎村のうちにして亦由良に等しく鹽焼ことを業とす大雲川といへる大河由良神崎の兩村の間を流れて海に至る。其源は山城愛宕山のふもとより出て、丹波半國の水流れ落るといふ説あり。其詳なるは知らず。されども丹波の國和知谷より山家綾部福知山をながれて我邦に集る大河なり。船に棹さし上る事二里餘にして大川大明神の社あり。此川淵の南なり。下東村に安壽姫の塚ありと聞く。川下由良近き所三庄太夫の舊跡多し、凡べて絶景にして由良ヶ嶽を遠く望めば、富士山の眺望に彷彿たり。さて此由良村に孝子あり、父を十右衛門といひて廿四五年前身まかりし後は九斗餘の田地を耕し母を養ふ。權右衛門夫婦なり、母は前方より別家に住けり、權右衛門元來家貧しければ常に舟乗を業となしぬ。此所往古は諸國の大船も錨を止め所にも大船數艘つなぎける者多くして、世に由良の湊千軒長者と呼ばやす程の繁昌の土地なりけるに、星移り年替りいつとなく船着もすくなく富有の民も稀になりけり。され共其餘風今に残りて二三艘の船持ける、中にも源右衛門といひけるものあり、權右衛門彼が船乗となりて諸國をのり廻り、年に三四度ならでは在所にかへる事なし。たましくその歸るときはいつとて己が住家には入らずして、直に母の許へ行安否を問ひ、未だ母の食せざ

る時は其食し終るを見届け、或は髪に虱などあつまりもやせんとて懇に櫛り側を離れず、終夜介抱なし翌日に至り漸く己が家に歸りぬ。近年母も齡たけ猶更夫婦の者大切に事へける中にも、里人のことに賞しけるは寒中は常に母の寢處を己が身をもつて温めてねさしめ、猶も寒さつよくして母の温り兼ると見る時は夜の深更ともいはず己が好める體にもてなし、粥を焚き母にすゝむ、是母の心支へに思はん事を恐れてなり。或時は母の足を己が懷に入れて寒氣を防ぎて夜をあかす事常なり。權右衛門外にある時は妻また斯のごとくなす。去年は母の心持も悪かりければ、其日稼の貧民なれ共商賣をやめ、家に在りて看病を専とし事へければ、此春は心持もよき故船商賣に出べしと母の勸むるといへ共、極老の母をのこし置き他國に出ん事心許なしとて肯ざりければ、妻夫に向ひいひけるやうは姑の仰にしたがひ船に出られよかし、御留守のうち姑御の事は心にかけて給ふ事なかれ、妾心の及ぶ丈は決して如才には事へ奉るまじ、去ながら大船にのり給ふ時は年に三四度ならでは歸り給ふ事あたふまじ、小舟にのり組度々歸りて姑御の安否を問ひ給へと勸めけるにより、權右衛門も尤なりとそれより小船にて商賣にこそ出にけり。其行狀擧て數へざれども親子夫婦ともに常に實義なる性質にてほめざるものなかりしが、寛保二の冬權右衛門夫婦の孝狀をかきて郡吏へ聞えたりしかば、村長を始めとし近隣並に親類の者迄御役所へよび出され實否を糺し給ふにつゆたがはざりければ、其次第具に重臣へ達す。其年君江戸におはしまし御聞に達する日數經る事なりければ、かゝる貧民極老の孝養扶けずんばあるべからずとて、御家老より下司へ下知して先取敢ず御藏米若干を與へ其後君江戸より嚴重の御沙汰なしたまふて夫婦の孝を賞し、權右衛門へ白銀五枚妻へ御藏米若干を下し給りける。これ寛保三癸亥年十月十六日の事にして母の齡九十七歳、權右衛門五十七歳、妻四十九歳の時なりけり。諺に船頭馬方お乳の人とて心も直ならず賤しき様にいひふられども性は善なるもの權右衛門にて知るべし。

(四) 富室村徳三郎女

富室村の民孫兵衛といふもの、他の者子方となりて、下作をなし世を渡る貧民徳三郎といふもの、女に小女郎と名をよべる女父に事へて孝也、母に後れ父は年老い家極めて貧しければ此小女郎近在へ洗濯もの又は繭のいと引に雇はれ稼ぎける。其働きに出る日は終日父のさみしからん時の慰みにとて茶の子晝飯をいとなみおき出行ぬる故、少しは手間どり人より遅く雇れ先へ行事なれ共、並より賃錢を減じ漸く三分五分の手間錢をもらひ、夜は家にかへり父をなぐさめぬ。もし雇先にて旨き食物を貰ふ時は、己食はずして持歸り父のみやげとなしぬ。凡て心を父にゆだね事へける。さて人並よりも眉目秀れたる生れ付なりければ縁組を求むる者多くして、親方孫兵衛方へ云入る者あり、孫兵衛小女郎をよびよせ嫁入せん事をすゝむ。小女郎肯すしていふやう、且那の仰そむくにはあらざれども御存じの如く弟六助は至つて貧にして、今日さへ送りかねるものなり。頼みとするに足らず、父は妾が引うけいか様共なし見送りし上は思召にし

たがふべし、それ迄のうちは縁談のことは御免したまはるべしと詫ける故孫兵衛もその孝心に感じ、賤しきものに似合はざるあつばれの娘と賞し、此上は随分と父を大切になし事ゆべし。萬一其方の力にも及ばざる事あらば我等扶け得さすべしと懇に聞ければ、小女郎も大いによろこびいよく孝行を勵みける。そのうち小女郎四十歳のころ、近村富有なる民妻に離れしものありて、小女郎を後妻分世話人かた／＼貰ひ度よし彼の孫兵衛へ頼みければ、孫兵衛も是幸の事也。又々小女郎を呼よせ申しけるは今度はさる方より貰はれる。其方が身分には餘りぬる家柄なり、忝けなく思ひて是非共承知いたすべしと勧めけるを、小女郎つく／＼聞きて答へけるは、是迄とても行届かざる事へかたのみながら今更左やうなる儀は思ひもよらず、是非々々今度も免し給はるべしとしきりに詫るにより、孫兵衛も今度はよもや承知も爲べしと思ひ勧めけるところ案に相違し此上は詮方なく尤にも思ひて其中に先方へいひ断りける處、然らば老人もともに引取べし、是非に申受けんも亦々頼み越しける故、孫兵衛ももだしがたく此言をもつて又小女郎にしば／＼勸むと雖小女郎仲々聞入れざれば、其時孫兵衛もことの外いかりぬる體なるを小女郎見てとり、御怒御尤千萬なれども畢竟妾をよかれかしと思召しだん／＼御勧め下されしを度々仰に背くは悲しく候得共、この處をよく／＼聞分てたべ、人の家へ父をつれ行ときはたとひ衣食のことは結構にくらすにもせよ、此度の縁は申さば下女同様なるものなり、殊に老人の見ぐるしき者をつれ行き、表向こそよき様に見ゆれ共内心の所になりては親も難儀に思ひ侍らん、左ある時は他人の家へ行て結構にくらすんよりは、むしろ破家にありて雑食なり共心おきなくたべさしむる事こそ妾が一ばいの心なれば、何分仰にそむくべしと納得せざるける。此事所々に聞え渡り孝女の名高く、既に官聽に達し延享三丙寅年五月八日小女郎が孝を御賞美の上鳥目若干を給ひ、父徳三郎へも鳥目一貫目をたまひけり。小女郎父の志を養ひ且つ人の妾となりて父を恥しめざるは義なり、孝なり、壯男も及ばざる所にて感賞するに餘りあり。

卷之貳

(五) 多門院村忠右衛門女

多門院村といへる所に僅か四石八斗程の田地を持ちし小百姓あり。二男一女子をもてり。次男勘兵衛といへるは伯父の養子となり三女をさんと呼ぶ。勘兵衛養子に行きて後長子早世なしける後は、さん女一人にて兩親を養ふと雖家貧しくやう／＼彼田地を耕し、兄勘兵衛の下作をなして作得を貰ひ、暇ある時は紡績をなし賃錢得て兩親を養ひける。さん女十九歳の頃兄勘兵衛いひけるは、兩親の事は我能にまゐらせん汝は他へ縁づくべしと勸むるにより、よぎなく同國田中村儀八といへる者へ嫁しぬれ共、兎角に兩親の上心許なく思ひて終に親里へ逃げ歸りける。其後も誰彼となくまた／＼縁付を勸むといへどもさんは只父母の事を案じ得心せず。然れば聲を入れんと勸む、さん答へけるは他人を入る時は萬一兩親の障りにもなる事ありては宜しからず、兎にも角にも兩親在す中は何方へも決して嫁せじとて許さざりけり。又或時兩親を勘兵衛方へ引取り養はんと云ふ。さん女ひそかに思ふに兄勘兵衛は親の事故疎略にもあるまじ、嫂はもと他人なり、萬一粗末の事へ方もあらばいかせんやと末のすゑまで思ひはかり、是も許さざりけり。是比賣鑑といへる書に出たる播磨國宍粟郡三方町といふ所にさいといふ女あり。父に仕へて孝なり、人聲

を入ん事をすゝむ、さい答へて女たるもの一度夫に見れば我身は其人に任せずや。既に身を其人の心まかせにして、又わが親の心にしたがひ仕へらるべき物にや。夫は思ひもよらぬ事ぞやといひけるに同じ心ならんか。さて此さん平生貧なる中にもさて／＼と心をもちひ一椀の中にても少しも和かき食を兩親にすゝめ荒きものは己食して飢を凌ぎ親のね起に心を配り仕へける、兩親も彼が仕へ方を入々にも語りて喜びけるこれ等の事御上へ聞え明和五年戊子年卯月さん女が孝を御賞美の上御倉米を若干たまはりける。此時父齡八十四歳、母は八十歳、さんは四十六歳になりける。

(六) 公文名村伊左右衛門子源太郎

公文名村の民伊左右衛門が子源太郎父母に事へて孝なり。父伊左右衛門家貧しければ日雇あるひは駄賃持をなして渡世とす。源太郎七歳の頃より母病の床に臥して次第に重り手足自由を得ず、たゞ仰向にねて年を過しける。家にありて介抱なす時は露命をつなぐ手使あらざれば詮方なく病人を捨て置き、日々稼ぎに出て家にある事まれなり。源太郎幼き事なれば近所へ遊びに出るといへども子供心に母の難病を悲しみ折々家にかへり母の望み事なきやと問ひ、あれば望みを達しぬ。良々成長したがひ山へ樵に行きける時なごも友の子供は休み歸らんといへるを源太郎一人は先へかへり、まづ母に見え安否を問ひ食をすゝめ、のち己も食し兩便の世話はいふに及ばず、或時は沐浴をさせ、長病の事なれば髪に虱生じて母のなんぎを見

かね日々にとり終に取絶しけるとかや。其節母源太郎に向ひていひけるは、かく虱迄生じて其方へ苦勞を
かけんより密に死するに如かじ、此後は食をたべさせくれまじといへるを孝子ことの外悲しみて、如何な
ることあるとても御命さへ存らへ給はば、如何ばかり嬉しからん。必らずく左様なる事のたまふべから
ずといさめ且なだめける事もありけり。近所の者病氣見舞に行く。定めて長病にて難儀なるべしと問へ
ば、いやとよ源太郎奇特に介抱なしくる、故に少しも不自由なる事なし。只源太郎は我子にてはあらじ、
恐らくは氏神なるべしとありし事共物語り歡びけるを聞人哀を催さざる者なし。此源太郎の行狀明和五
年子四月上聽に達し奉りければ、君にも其幼くしてかゝる孝狀を感歎したまひ、且歡び給ひて同月廿五
日厚く賞しその上御藏米を若干賜ふ、此時源太郎十四歳になりける。其幼ふしてためし小き志なりと聞く
者賞せざるはなし。家貧にして素より教もあらず、善師友なくして其孝志の厚き事天性の善質なるべし。
猶生立如何ありしや、後の行狀つたへざる事の恨みすくなからず。

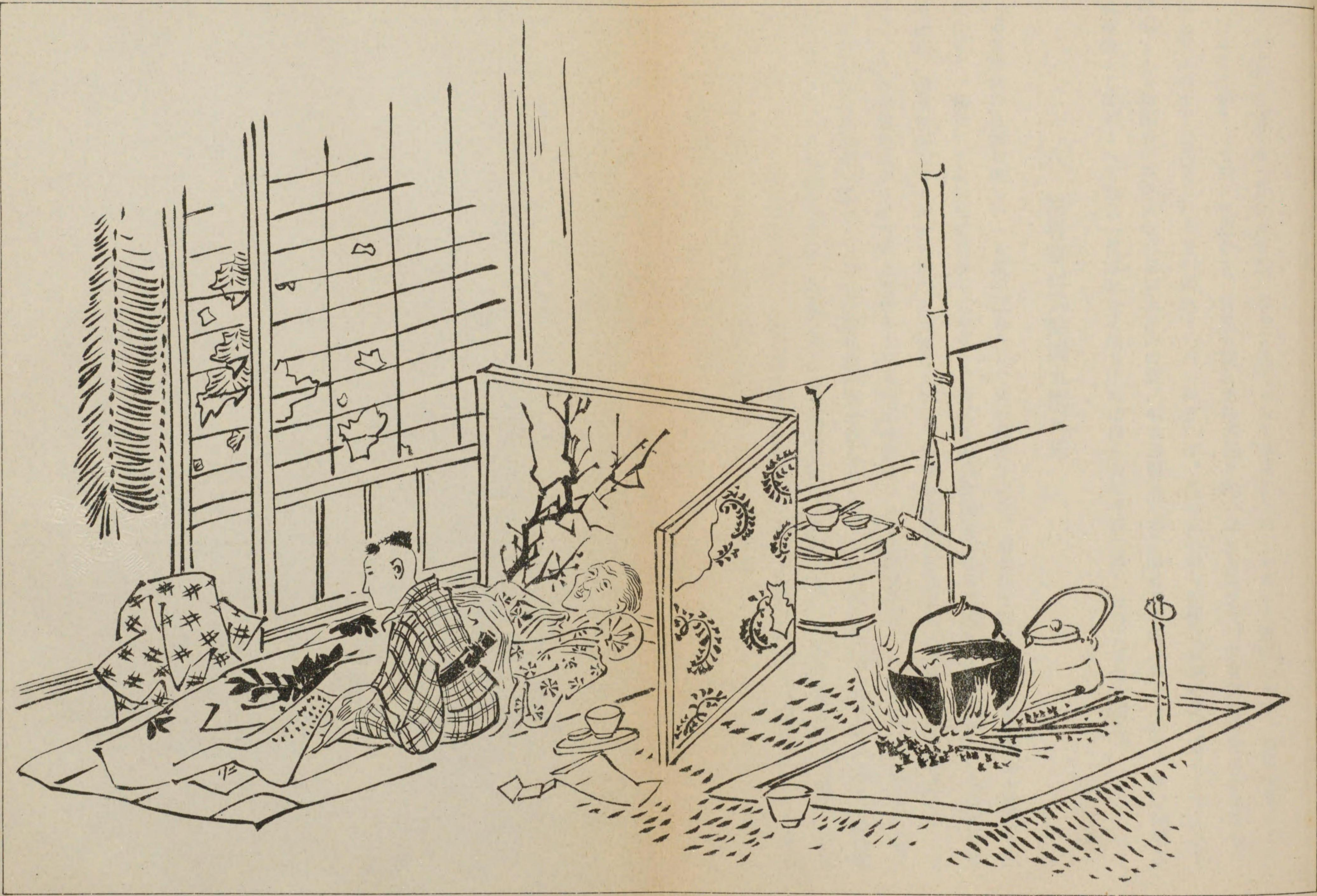
(七) 朝代町長兵衛女

御城内をはじめ市中の鎮守と仰ぎける朝代大明神は日の若宮にして日本紀の伊弉諾尊と稱し奉る。天神
の第七代なりとかや云へり。此山の麓に立並ぶ町家を朝代町といふ、此所に住ける長兵衛といへる商人の
娘いよは父に後れ獨母を養ふ。家至つて貧にして朝夕の煙さへ立兼あまつさへ母は多病なれば針仕事をな

日厚く賞しその上御藏米を若干賜ふ。此時源太郎十四歳になりける。其幼くしてためし小き志なりと聞く者賞せざるはなし。家貧にして素より教もあらず、善師友なくして其孝志の厚き事天性の善質なるべし。猶生立如何ありしや、後の行状つたへざる事の恨みすくなからず。

(七) 朝代町長兵衛女

御城内をはじめ市中の鎮守と仰ぎける朝代大明神は日の若宮にして日本紀の伊弉諾尊と稱し奉る。天神の第七代なりとかや云へり。此山の麓に立並ぶ町家を朝代町といふ、此所に住ける長兵衛といへる商人の娘いよは父に後れ獨母を養ふ。家至つて貧にして朝夕の煙さへ立兼あまつさへ母は多病なれば針仕事をな



してかすかに價を取り夜は人の門に立ちて袖乞をなしやうく母を渴命にも至らしめず。殊に大切につかへけるとばかりにて別に書置かず、行状は聞えざれ共若き女の身をも壊さず、乞食同様の仕はざをなして母を養ふの志奇特に聞しけるを町役人うつたへ出ければ、高聽に入奉り折柄君の御年賀に當らせたまひて御祝として御領分の高年八十八歳以上長壽の者、七十歳獨身の者を尋ねさせ給ふ折からにて、幸ひ御賀の御祝儀としていよへも鳥目一貫匁をたまはりけるは安永六年丁酉二月二日のことなりける。

(八) 南有路村兵助源五郎兄弟

南有路村の民源兵衛といへる者子三人あり、兄を兵助といひ、弟を源五郎といふ。女子は他へ嫁して家にあらず、兄弟二人共に父母に事へて孝なり。祖父も源兵衛亦等美なる者故父の後をつぎ終に大庄屋役に撰ばれ、諸人歸伏しけるが願に依つて退役なしける。享保年中迄は田畑二十八石餘も持つて相應にくらしける、され共村の長をつとめ其上年柄もよからず不仕合打つゝきて家おとろへしかば、住家のみ残しおき家財田地も賣代なし貧しくらしぬれ共聊か惜む心もなく只明くれ諸作を専らとして妻子を育み上へ對し訴訟は勿論ねがひ筋申立事など毛頭もなさず、既に天明年中村方難澁にて出願の事ありし時だにも與せざりしが、却つて御褒美ありけり。近き頃は年老い働もなり兼ね、兵助、源五郎兄弟の者に養はれ安穩にくらしける。却説この兵助兄弟共に幼きより奉公をなし、兩親を養ふといへども親次第に老ける故、兵

助は五ヶ年前より奉公をやめ、家に歸りて朝夕に仕へ、諸業をつとめ夜はかへると直に親の安否をとひ食事をするめてのち己も粗食し終り、母の手助けをなし、或は草履わらじなどを造り賣代なして孝養の助とす。冬季至れば服紗物をあたゝめて親の兩足をつゝみ、熱灰を裂布につゝみ足の下に布きて寒氣を防ぎ、夏の日は涼しからしめ其時に随ひ心を用ひ事へける。隣家へ行くにも兩親につげ許しを受ざれば行事をせず、其行とても元より長居する事をせず用事果れば速に歸りて兩親に安緒させん事のみ心に忘れず。常に親の心に逆ふ事なかりし故に、或時父兵助に向ひ汝に妻を娶り遣はさんと思ふといへば、兵助きゝて其儀はまづおそからぬ事と答へければ父聞きて親の心に背く氣儘なる儀と甚だ怒りぬれば、兵助大に驚きかつ恐れ入りて頓て父の懇意なる方へ行只今父のしかく云ひしをかく答へぬれば、父甚怒りぬ、決して親の意にそむくにはあらざれ共、貧なる中へ他人をよび入れては母の心つかひもあるべく、其上娶る者萬一不實なる時はいかにせんや。たゞ願はくば妻の事今暫くさし延したまはる様に父に諭し給はれと頼みける事もありけり。弟源五郎も年を重ね奉公を勤めぬれども、其給金一錢も己が用につかふ事なくため置きて年々兄へ渡し、孝養の助となす。己奉公先にて少しの物貰ふ事ある時は主人に預けおき、その上奉公の暇を得れば私作をなし彼是もつて年中の小づかひ錢となし、尙あまりある時は母へ送り忙しき奉公の間にも折々兩親の安否を問ひ歸りて怠らざりけり。如斯兄弟とも實意なる性質にて他人へ對し言葉あらそひなせし事なく幸ひ兩親共無病なるゆる其孝心世間へは顯れざれ共、天の言はしむる處なるや、村役人は是を知りて

恐れ入りて頓て父の懇意なる方へ行只今父のしかく云ひしをかく答へぬは、父甚怒りぬ。決して親の意にそむくにはあらざれ共、貧なる中へ他人をよび入れては母の心つかひもあるべく、其上娶る者萬一不實なる時はいかにせんや。たゞ願はくば妻の事今暫くさし延したまはる様に父に諭し給はれと頼みける事もありけり。弟源五郎も年を重ね奉公を勤めぬれども、其給金一錢も己が用につかふ事なくため置きて年々兄へ渡し、孝養の助となす。己奉公先にて少しの物貰ふ事ある時は主人に預けおき、その上奉公の暇を得れば私作をなし彼是もつて年中の小づかひ錢となし、尙あまりある時は母へ送り忙しき奉公の間にも折々兩親の安否を問ひ歸りて怠らざりけり。如斯兄弟とも實意なる性質にて他人へ對し言葉あらそひなせし事なく幸ひ兩親共無病なるゆゑ其孝心世間へは顯れざれ共、天の言はしむる處なるや、村役人は是を知りて



天明五年乙巳六月官府へ訴へ出れば、同じく八月廿八日兄弟が孝を賞し、父母とも一生涯一人扶持づゝ養老米を賜りける。時に父源兵衛齡七十二歳、母六十四歳、兵助卅二歳、源五郎廿二歳の時也。文化六年巳四月十八日君鬼ヶ城へ御登山の時兵助は老人を連れて拜見に出けり。其時豫て孝子兵助なる事を聞き召し金子を下されける。同年君東府へ旅立給ふ時國中の孝子等を追手御門前へ竝居らせ御目通り仕らせて、白銀を賜ひける時も此兄弟孝子の列なりけり。同十一年戌六月重臣内海某巡在の時も鳥目を賜ひけると也。

(九) 上湊原村定治郎妻

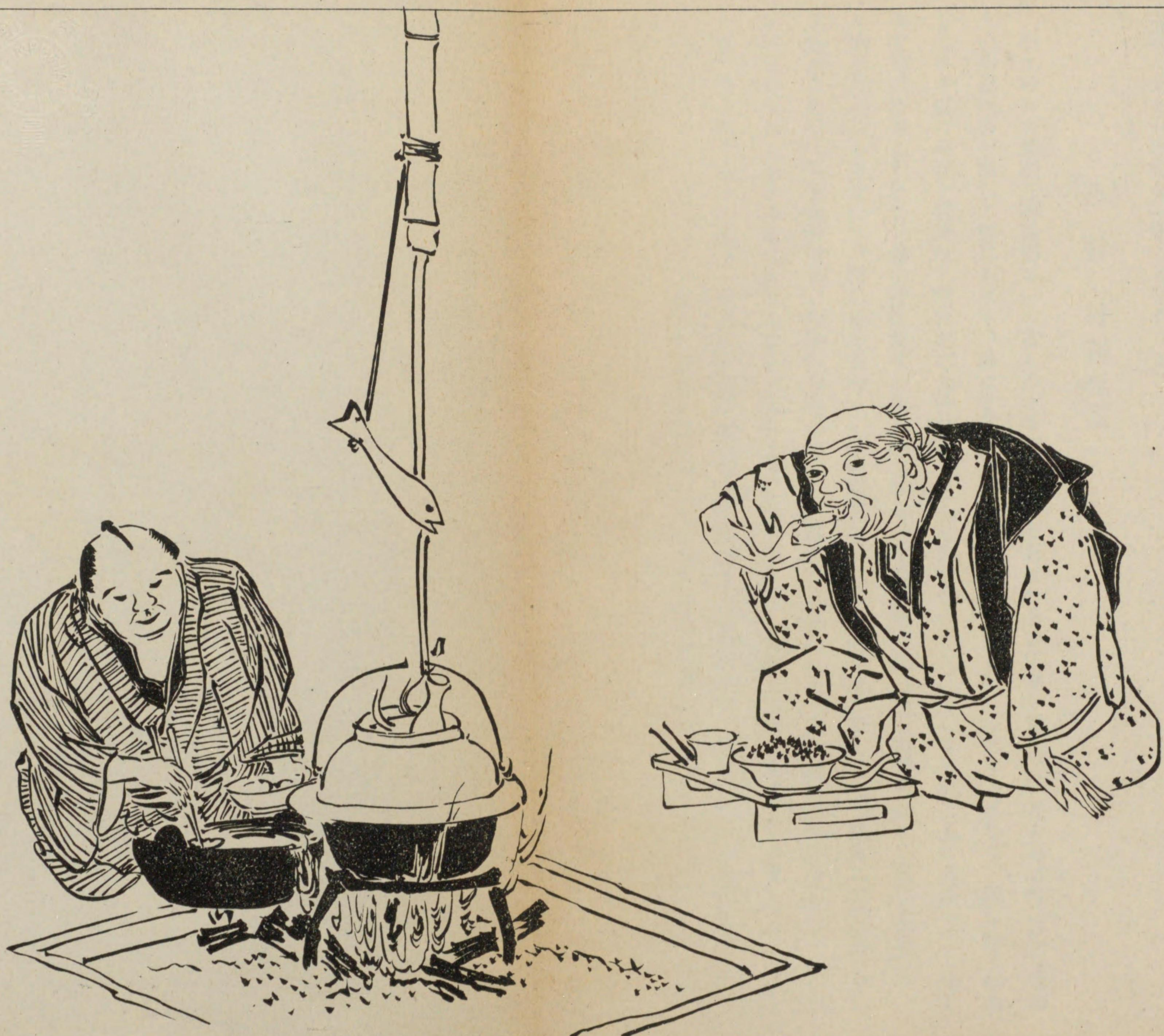
上湊原村に清左右衛門といへる貧民あり、一子定治郎といへる者ありといへども年幼くして家相續なりがたし、依て利助といへる者を養子となし家をゆづりける。定治郎成長して後わすか一石三斗程の地面をもつて別家に住むといへども後には父母を引とり養ひける。妻をつぎと呼て大俣村の民喜平次といふものゝ女なり。此つぎ性質至つて篤實にして、常に舅姑の心にしたがひ事へける所廿年以前を姑病に臥し殊に貧窮の上三人の子を育てつゝ介抱なしける。去春を姑の病重り手足自由ならずるざりとなりければ兩便の世話は更なりまして衣類も乏しく、去冬よりは寒夜たり共稼れし衣服を洗ひすぎ炙り出して終夜ねもやらず看病なし事ふ。前かたより母を大切にさせるよしは聞ゆるといへ共、猶今後の看病一通りならず。奇特なりと同村近郷等囃し賞しけるを村長聞付定治郎組合のものを呼びよせ、かのすぎ女が様子を聞くに

風聞に違はざれ共、猶も實の行ひを見んため定治郎方へ病人見舞の體にもてなし行き、病婦に逢ひ長病にてなんぎならんとへば、病婦答へて成程長々の病ひにてなんぎいふばかりなし。されども嫁萬事に心を配りよく世話なしくるゝ故さまでなん儀とも思はざるとよろこび告げる。其のち村人寄合の折ふし百姓どもの内から發言して定治郎が女房事、姑へ孝行の次第奇特なりと思ふなり定めてなんぎの事多かるべし。せめては合力の爲に米なりとも亦衣類なりともいひ合せて贈らばやと誰となく言出せば、一統最もなりと早くも相談極りける所に流石村長をつとむる程ありて、庄屋云ひけるは各々親切の志尤なり。然し何によらず合力として贈る時は只なんぎを救ふのみなり。逆も贈るならば矢張孝順稱美として贈らばいかゞあらんといへば、皆々これに同心して則庄屋より樽代をつかはし、村中より銀札を贈り其孝順を賞美しけるとなり、拵定治郎こと父母を我方へ引とり養子のみにして左せるよき行ひも聞えざるに、妻の孝心を感動なしてや、近頃は日の中は外をはたらくといへども山へゆき他村へ行時は母のね間へ行きて出入共安否をこひける様になりけるとかや、利助は定治郎幼き時養子となりぬれ共、棟を隔て、住みける程に常に疎遠にありつれ共自ら世間に恥ぢて近頃は度々まゝ母の病をとひ、折々は介抱をもなしたりける。誠に孝婦人をして感動せしむるなるべし。其行狀村長言上して。

封君に聽え奉り、天明七年丁未の春夫婦を賞しことにつき女が貞を賞したまひ、舅姑一生涯一人扶持づつの養老米をたまふ、其時舅七十八歳、姑七十歳、定治郎卅歳、つぎ女廿九歳なり。九歳の男子五歳三歳の女子二人あり、定治郎が賞せらるゝも全く妻の陰徳ならん、然れ共後定治郎利助感化し遷善の徳少な

なり、扱定治郎こと父母を我方へ引とり養子のみにして左せるよき行ひも聞えざるに、妻の孝心を感動なしてや、近頃は日の中は外をはたらくといへども山へゆき他村へ行時は母のね間へ行きて出入共安否をこひける様になりけるとかや、利助は定治郎幼き時養子となりぬれ共、棟を隔て、住みける程に常に疎遠にありつれ共自ら世間に恥ぢて近頃は度々まゝ母の病をとひ、折々は介抱をもなしたりける。誠に孝婦人をして感動せしむるなるべし。其行狀村長言上して。

封君に聽え奉り、天明七年丁未の春夫婦を賞しことにつぎ女が貞を賞したまひ、舅姑一生涯一人扶持づつの養老米をたまふ、其時舅七十八歳、姑七十歳、定治郎卅歳、つぎ女廿九歳なり。九歳の男子五歳三歳の女子二人あり、定治郎が賞せらるゝも全く妻の陰徳ならん、然れ共後定治郎利助感化し遷善の徳少なし



とせず、文化六年巳とし夫婦のもの御發駕の節追手前へ召出され、役所にて孝子等と共に賞し白銀を賜ひけり。彼村長を始め里人より孝貞を賞し贈り物をなしける事其善を好み孝を賞するの志を君聽しめし、又其村人等を御稱譽なし給ふと聞えけり。

(一) 引土村利兵衛

引土村の百姓利左右衛門といへるもの、子利兵衛は五石ばかりの田地を耕し、いとまある時は父の仕來りの鍋釜の商を成して賣にあるく、時により遠く行てありとも決して他に一宿する事なく、家に歸り休息もなさず直に兩親を按摩なし常に親の食物には専ら心を用ひ事へける。父いまだ健にして作場へ出る事あるを利兵衛見るや否や、必ず骨折業なし給ふ事勿れと留め勞り助けぬ。過し頃父大病にて既に本服心許なき體と見えける時だにも、利兵衛心をつくし晝夜看病なせしにや終に恢復なしけり。父村人に逢ふては利兵衛が看病の次第を物がたり、此度の大病も全く悴が看病届し故により、此の如く全快せしとよろこび告ければ餘人もさこそと思ひけるとなり。其後冬季に至れば冬瓜を調和してあま酒をつくり父にすゝむる所に殊の外温まりぬるとかや、其事ども村長訴へ出んと評議する折から遮つて郡官よりたづねあれば、則村長が見聞をよぶ所を言上す。依つて其孝を賞し鳥目若干たまひけるは寛政元年酉十一月の事にして、利兵衛年卅三歳と聞えけり。

(二) 堀上町善右衛門

堀上町善右衛門とて飴商賣をなして父を養ふものあり。其渡世筋よりすべて父の心にまかせざる事なく商賣に出て歸るや否や其日の飴代ことごとく父の前へ出して算用なさしめ、或は畠作りを成すにも此所には何を蒔んや彼所には何を植付んやと一々父のさしづを受けて背くことなく、萬むつまじく暮しける。素より性質美にして他人へ對して謙退ふかく、町内の寄合にも餘人を先立いつとても己は後に並居ければ、自ら町内にて悪まるゝ事なし。是等の事町役人より聞えに達し奉れば寛政元年酉九月その奇特を賞し給ふて鳥目若干をたまひける。

(三) 池内下村重次郎夫婦

此村に重次郎夫婦の者あり、父母につかへて孝なり父を文四郎といふて僅四斗餘の田地を持し小百姓なりけり、重次郎妻の名を六と呼びて今田村半四郎が娘なり。重次郎家貧しくして日雇を稼ぎて常に父母をやしなふ程の民にして道の教を聞くこともなかりしに、隣家へ行くにも父母に告げざる事なく、父五ヶ年前中症を病ひ手足かなはざれば別して夫婦とも父の氣に逆ふ事なく、よく看病せり。隣村へ雇れ亦是山作場などへ行くにも夫婦のうち一人は父の側を離れず、付添ゐるといへども仕事の間には必らず兩度は歸り

(三) 池内下村重次郎夫婦

此村に重次郎夫婦の者あり、父母につかへて孝なり父を文四郎といふて僅四斗餘の田地を持し小百姓なりけり、重次郎妻の名を六と呼びて今田村半四郎が娘なり。重次郎家貧しくして日雇を稼ぎて常に父母をやしなふ程の民にして道の教を聞くこともなかりしに、隣家へ行くにも父母に告げざる事なく、父五ヶ年前中症を病ひ手足かなはざれば別して夫婦とも父の氣に逆ふ事なく、よく看病せり。隣村へ雇れ亦是山作場などへ行くにも夫婦のうち一人は父の側を離れず、付添るるといへども仕事の間には必らず兩度は歸り



て安否を問ひ、寒き夜には身をもつて襖を暖め、極寒に至れば圍ろりに火をたき夫婦のもの後先に假ねし
て終夜寒氣を防ぎ、夏の日は扇にて涼しからしめ、常にね所のわらを敷更へて親の身のいたまざらん手當
をなし、若又あたる所なきやを問ひあれば速に直し折々藁を和らげなると心をつくし、貧なれば食物に
米ばかり進むる事能はざれ共、雜穀の中にも食し易き様に調和し、其食する毎に夫婦にてかげんを試みな
ほ好める所を問ひ親の氣に入る様におのゝ心を用ひ、兩親食し終らざれば其身夫婦はいふに及ばず。幼
き子供たり共食さしむる事なし。或は町家へ行く時は餅菓子豆腐の類を求めかへりて兩親に土産とす。其
孝養を感じ庄屋年寄訴へ出ける所に早くも君に達し奉り、寛政二年戌とし夫婦の孝を厚く賞し、烏目若干
を下し給ふ。然るに父は同三亥とし齡七十三にて病死す。母も同十二申年八十歳にて死しける後も、孝
子夫婦暫くも親を忘れざる様子にて有合品を佛前へそなへ出入食事も必らず亡靈へ告てのち食す。重次郎
子を作右衛門といへり。これも幼き時を兩親の孝道を見習ひしにや、又は性質の美にや出入食事必らず佛
壇へ告げ兩親に仕ふる所も亦よし。固より兩親食せざる間は又食する事なき故作場の忙しきか、又は時と
しては先に食せん事を重次郎夫婦命といへども、親より先へ食しては甘からずとて決して先だつ事なか
りし。御城下の町へ出し時はこれも何によらずとゝのへ歸りて佛壇へ供へたまはれと父母の前へさし出し
けり。凡そこれ家風となりけるとなり、此事ども高聽に達し奉り寛政二戌年其孝を賞したまふて烏目若
干を賜ひ、文政六巳とし御發駕の節追手前へ召出され、役所にて御藏米數俵をたまふ、此時重次郎五十九

歳、妻六四十七歳、同未年五月廿四日女房六女へ鳥目あまた賜り。文化十一年戊五月家老内海某巡在の時再び白銀を給ひけり。

(三) 女布村六右衛門妻

女布村の農民六右衛門妻の福女は城屋村喜左右衛門といへるものゝ娘にして、母は同村清兵衛といへる者の娘なりしが、故ありて福十二歳のころ離別して父喜左衛門やもめとなりぬ。前方は相應の田畠を持ち百姓なりけるに、久しく煩ひて既に其身不具になるばかりの大病にて追々田地も賣拂ひ、居屋敷ばかり残し上福井村の百姓の下作或は箕に作る木を奥丹後の國境より伐出し、様々稼ぎて世渡る便となしける。福女孝心にして常に父につきしたがひ、畠作物などへ行時は必ずしたがひ行きて父の合力をなし彼箕の木を採に行く時だも山にては荷ごしらへをなして、父も一荷己も一荷持て歸る道すがら、己が荷を父より一町も先へ運び置き、立戻りて父が荷を介抱して己が荷の所にいたれば、又先へ運びおき立もどり父をたすけ連かへりぬ。又箕の木を町方へ賣代に出る時とても、父には氣儘にあてがひ己は一人前の荷を持て態と父の先に立つて静かにゆきぬ、諸事時に従ひ心を配り、父を慰めて逆ふ事つゆばかりもなく、近頃父耳遠くなりしゆる、家にあつてはいろ／＼の話しを聲高になして慰むるを外より聞く時は、二三人も寄り合ひ話しぬる様に騒々と聞えけるを、初の程は誰人か毎夜々々行ぬるやらんと近所のもの怪しみたるばかりな



福女孝心にして常に父につきしたがひ、畠作物などへ行時は必ずしたがひ行きて父の合力をなし彼箕の木を採に行く時だも山にては荷ごしらへをなして、父も一荷己も一荷持て歸る道すがら、己が荷を父より一町も先へ運び置き、立戻りて父が荷を介抱して己が荷の所にいたれば、又先へ運びおき立もどり父をたすけ連かへりぬ。又箕の木を町方へ賣代に出る時とて、父には氣儘にあてがひ己は一人前の荷を持て態と父の先に立つて静かにゆきぬ、諸事時に従ひ心を配り、父を慰めて逆ふ事つゆばかりもなく、近頃父耳遠くなりしゆゑ、家にあつてはいろいろの話しを聲高になして慰むるを外より聞く時は、二三人も寄り合ひ話しぬる様に騒々と聞えけるを、初の程は誰人か毎夜々々行ぬるやらんと近所のもの怪しみたるばかりな

り。其貧しき中にも外の働きもなさず、家にありては父に付添ひ、隙あれば紡績織縫の業をなして、其價を得て父を養ひけり、性質愛憐ふかくして畜類に至る迄憐みけり。其孝心里人稱嘆し村長より訴へ出ければ君の御聽に達し奉り寛政二戌年其孝を厚く賞し、烏目あまた給はりける。其頃福女を娶らんと所々より婚を求むれ共父を養ふものあらざれば親のみす中は決して縁付心なきよしを以つて斷りけり。年を経て寛政十年父齡七十九歳にして身まかりける。後四ヶ年過て福四十七歳の時里人のすゝめにより、且は女の一人住もならざれば屋敷地は父の名跡立つる迄親類へ預け、先祖父母の年忌等は彼親類よりまかのふ約束になし置、此六右衛門方へ嫁しけるとなり。その時にしたがひ或は先立ち或は後れつ、父の名跡立つる迄屋敷を親類へ預け、先祖父母の訪ひ弔ひ迄の計をなし、仁愛の餘り畜類に及ぶ其心ばへやさしともいふべし。文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され役所にて孝子等共に白銀を賜ふ。

(四) 伊佐津村庄七妻

伊佐津村に住む甚助といへる者は四斗餘の田地をもち且紙を漉くを業とす。同村作左右衛門といふ者の女さよといへるを三四歳のころより養女となしける。又同村伊左右衛門といふものゝ孫庄七といへるを當歳を賞ひそだつる。兩人共成長の後夫婦となす。子三人を産む、庄七早世してさよもめとなつても三人の子を育てつゝ、養父母へ孝養を怠らず。親切につかへける中にも平生親の氣に逆ふ事なく、養父甚助酒

を好むといへども、家至つて貧しく酒に代る錢あらざれば、紙くすを買求めちり紙を漉かへし是を賣て聊かの利分を得て酒にあつる。其酒を求むるにも暫時も親の傍らを離るゝ事を厭ひ、池内村といふ所の者町方へ出るを心がけて待受け、其通るを見れば頼み求む。若其便を得ざれば是非なく己走り行て買と、のへ養父にすゝむ。養父その貧なる中にて日々のむことを氣の毒に思ふよしをいへば、孝婦答へて曰く、少しも心づかひなし給ふ事なかれ、と心よく勧めけり、養父のちには老耄して田畑へ行きて作物のたすけをなさんとて却つて譯もなき事のみなして妨をなす。され共孝婦少しも逆ふ事なくして御合力下されて御かげにて作物よく成長申べく杯云ひて悦べる體して氣嫌をとりて連かへりぬ。養父外へ出る時は己か又はむすめの中何れか一人付添はざる事なし、養母去秋より半年ばかりの間病ひぬる時だも、不淨の物は夜中にいたり川へ持ゆき洗ひて少しも人目にかくる事なく、親類近隣の輩も其始めの頃は知る者なかりしとかや、其萬に行届看病なしけるを餘人見るに定めて難儀なる事の多かるべしと問へば、孝婦いやとよ兩親共に正直なる故に、世話も一入致しよく悦びぬると答へてつゆばかりもなんぎの色目をも見せず、又かゝる困窮なれば夜更る迄も女業をなしぬるを養父哀れみ、夜も更けぬらんに疾く休めかしといふ、實は夜も更け父の言葉に背かじと思へ共、己稼がざれば明日より養父母を養ふ方便あらざればわざと答へて、それは御休みなされし故長き様におぼすため、未だ日くれしより間もあらずなどいひなぐさめ、氣に逆はで稼に精だしぬるといへども、もとより貧なる上に去秋よりの物入り多く次第になん儀の體を親類近隣のもの見

兼ねて救はんと内より、相談して頼母子取立やらんとあるをさよほのかに聞きて御志はありがたけれ共人様の御世話に預からん事又氣の毒さいはん方なしとて斷りける。されども人々見兼ねて申合せ小頼母子を取くみて救ひけり。女の身一ツにて子を育てつゝ、孝養の行届ける事を里人感賞やまざる者なし。終に封君の御聽に入り寛政五年丑の春あつく其孝を賞したまひ、烏目若干を賜ふ養母は同年七十二歳にて死す。養父も同じく七卯年齢八十四歳にて身まかりぬ。同十年孝婦さよも四十四歳にて死せりとかや哀むべし、孝婦終に子なからしむる事を。

(一五) 園田由里村吉左右衛門妻

此園田由里村といへる所の彌次右衛門といふ百姓の子友五郎妻のかんといへるもの、實は地頭村長左右衛門が娘にして三歳の時母に離れて、後は彌次右衛門養女として育てける處かん八歳の時又養母に離れて後は彌次右衛門の養育にて成人しぬ、この彌次右衛門氣質むつかしき者にて、村中にて何ぞ六ヶ敷事といへば、彼彌次右衛門なるべしと今以つて言ひ傳ふる程の者なり、然るにかん養父の氣質に逆ふ事つゆはかりもなく、好くつかへ又家極めて貧しければ、奉公をなして稼ぎけるも給金多しといへども遠き所にては養父の見舞の自在ならざるを厭ひ、近き所をゑらび奉公をなし、朝は人より早く起きて父を見舞かまごを焚つけ水をくみ置きて養父を起して主家へ歸る事常なり。尤主家のつとめことに如才なく働き何にても食

物を貰ふ時は己食せずして必らず持かへりて養父に勸む、全體幼きより男の手に育てぬれば女業の縫針もならひ得ざれば己が衣類とても不自由なりけるに、一枚の着物脱ぎても養父には時節の衣服を着せざる事なく、己は着ず食せずといふばかりの艱難なしぬれども、養父の養ひは届きけり。寛政五年養父村人をたのみて同村作右衛門といふ者の子友五郎といへるを賀養子としてかんにみあはせむつまじくらしける。扱其養父によく仕へる志を尋ぬるに己三歳の時實母に離れ、八歳にして亦養母に後れ、夫よりは養父の教育に預り成人し我身なりければ、養父の恩のありがたきを海をも深く山よりも高し。如何なるかんなんすすども報じ盡さん者といひける。思ひ込けるゆゑにや彼人竝に勝れて六ヶ敷養父に事れば、養父も後には心もやはらぎ直なりけるとかや。其孝状の厚き事を里人訴へ出て御聽に入れ奉りぬれば、寛政五年丑三月其孝を賞し鳥目多く賜はりける。此時かん二十歳なり、其後文化六年御發駕の節追手前に召出され役所において白銀を下され、同八丑年其孝の厚きを賞し給ふて鳥目三貫匁を賜ふ、同十二申とし彌次右衛門齡八十七歳にて死しける。夫友五郎後に名を吉左右衛門と改めけるとかや、其養父の恩の深き事を報ぜん心緒なりければ此餘の行状推して知るべし。

(六) 大俣村與想右衛門友吉兄弟

大俣村の民與想右衛門弟友吉とて兄弟あり、母に事へて孝なり、父を武助といひて當文化六巳年より五

十餘年以前に身まかりぬ、兄與想右衛門至つて篤實の性質なり。然れ共前方二階より落ちてちんばとなりそは一人竝の働きも出來ざりける。其妻生れつき愚にして物事に行届かず、一女子岩といへるを生みたる後はいよく姑への事へといかざれば止む事を得ずして岩の五歳の時熟談の上にて離別なしける。故に後妻を娶らん事を勸むる者ありといへども、與想右衛門思ふに後妻を呼ぶ共また老母へ事のさまたげとならん事を恐れ、無妻にして家内四人むつまじく暮しける。弟友吉も同じく篤實なる生れつきなり、他家へ養子を勸むるといへ共我他へ出る時は兄は病身、姪は幼少にして母の介抱なすものなし。せめては兄弟一緒に居て母へ事へなば兄一人にて事ゆるにはまさるべく、少しは手助ともなりぬべしといひて、兄弟同居無妻にして母と兄に事ふ。さて何事に依らず兄弟斗りにて決断することなく、毎とても母の指圖を受けて背く事なかりけり。娘岩も同じく實體なる生れつきにて、最早嫁入りすべき年頃も過ぬれば婿養子にてもなさばやと村長等すゝむるといへ共何分老人あり、且つ與想右衛門病身に於て僅かの田地も賣代なし、極貧の中三人にて漸く母をやしなひ、何事も思ふに任せぬ事をのみなりと斷りけり。與想右衛門は第一年貢收納の儀に就いても、村役人へ世話も受けず、何程雨天打續き不作なる年柄にても、己が收納割の俵數をろはずとて村長へ斷りし事三十年來一度もなく、其上納米よく村役の者も稱美する程なり、年頭五節句は猶更なり、上の御吉事又は宗門野於見分肥草刈田植などすむ時は村役人へ禮挨拶にまはりける事迄逐一村長訴へ出ければ、速に上聞に達し寛政十二年申五月兄弟のもの召出され、御賞美ありて鳥目あまた賜は

り、猶孝の怠なからん事を示し給ふ。同年母齡八十五歳にて天命を以つて終る。與想右衛門六十三歳、友吉五十九歳、岩三十歳の時なりけり。文化四年與想右衛門七十歳にて死す。後同六年友吉孝子等と共に御發駕の節追手前へ召出され、役所にて白銀を賜ひしとぞ。

田邊孝子傳 卷之貳 畢

卷 之 參

(一七) 桑飼下村安四郎妻

桑飼下村の仁右衛門といふもの子二人あり、兄を傳治郎といひ弟を安四郎と呼ぶ。家極めて貧なり。父仁右衛門家を傳治郎に譲り其身夫婦二男安四郎を連れ二斗程の屋敷高なる所に隱居家をかまへ、同國郡西方寺村の善右衛門といふ民の女かるといへるを安四郎妻に娶り、のちに又小部屋を營みて仁右衛門夫婦住ける、安四郎は京都邊へ稼ぎに出ける。跡には妻のかる女舅姑をあづかり、薪水の勞はいふに及ばず、舅姑に事へける所に夫安四郎十年前「かさ」を病ひ、働きも成がたく殊にこの五六年の間は歩行も叶はず、姑も安四郎が難病を苦にして其身も病ひ付て、これも歩行叶はざれば難病人二人の上家産もなし、貧窮にて舅は年より幼少のむすめ兩人を育て乍らの介抱、一日もだしがたかるべきにかるは村方へ白挽或は唐臼挽きなどに雇れ、又は草履草鞋を賣り歩き、時に依つては山に入りて獨活わらびを採りて賣代なしなど粉骨して稼ぎ、孝養をなす事女の身一つにて五人を養ふさへもあだ疎ならざるに、剩へ姑夫の看病にて一旦は煙りも立かね袖乞せざるばかりの艱難にて、年始初午などには惠比壽を板行に押しとくばり、又附木を二三把づゝ持廻り、少しの助力を受けて漸く其日を送りける。されども孝養怠らざりけり。其頃

親許にてかるえ云ふ様は其方も知る通りにて、我家も貧窮の事故其方が難儀見つぎ度思へ共力に及ばずせめては安四郎と縁を切りて歸りなば又いか様とも致し方あるべし、左程かんなん辛苦なせども末々何一つ頼みとするあてもなき事なれば、今の中に歸れかしと勧めければ、かるいふやう、妾今歸りなば老人竝に難病の夫忽ち瀕命に及ぶ事眼前なり。よつて何程困窮かんななすども、決して歸る事は得もなさじ。畢竟かやうの世話なすべき筈に生れつきたる身と思へばつゆいさゝか難儀とも思はざれば、命のあらん限りは何かいとひ侍らんと更に納得せざりける。斯誠實にて介抱なせし驗にや姑夫も大いに悦び、満足に思ひ居けり。然れ共姑は寛政十年年に死す。夫安四郎も享和元酉年に病死す。其みぎり舅仁右衛門悲歎のあまり、かゝるべき子を先立てぬると甚だ愁傷せし時かる慰めていひけるは、及ばず乍ら此上如何様共成して妾息の通ふ中は御難儀はさせまじと宥め猶孝養おこたらざりける。此年舅齡九十歳になりて極老の年なれば、諸事氣任せになしぬれども何分貧にして日々の食物心にまかせざりければ、山へ行きては時の初物採採りかへりて進め舅常に酒を好めどもかゝる貧なればせん方なく、兩人の娘七八歳の頃より子守奉公に出し、其外様々と稼ぎ其身は寒夜といへども薄き夜具一枚だも着る事なく、丸ねせし程の中にも舅には毎日酒を進めぬ。斯貧しく既に袖乞せざるばかりの困窮なすといへども、いさゝか曲りし心なくたへば藁一筋にても道に落たる物を拾はず、菜の葉大根一本たり共餘儀なき時は、畠主へ斷りて貰ひけるとかや、其正直なる誠心を天も憐れみ給ふにや、自ら人々の憐みも深く相應に助力をなすものありといへど

まり、かゝるべき子を先立てぬると甚だ愁傷せし時かる慰めていひけるは、及ばず乍ら此上如何様共成
して妾息の通ふ中は御難儀はさせまじと宥め猶孝養おこたらざりける。此年舅齡九十歳になりて極老の年
なれば、諸事氣任せになしぬれども何分貧にして日々の食物心にまかせざりければ、山へ行きては時の初
物採探りかへりて進め舅常に酒を好めどもかゝる貧なればせん方なく、兩人の娘七八歳の頃より子守奉公
に出し、其外様々と稼ぎ其身は寒夜といへども薄き夜具一枚だも着る事なく、丸ねせし程の中にも舅に
は毎日酒を進めぬ。斯貧しく既に袖乞せざるばかりの困窮なすといへども、いさゝか曲りし心なくたとへ
ば藁一筋にても道に落たる物を拾はず、菜の葉大根一本たり共餘儀なき時は、畠主へ断りて貰ひけるとか
や、其正直なる誠心を天も憐れみ給ふにや、自ら人々の憐みも深く相應に助力をなすものありといへど



もさるにてもよくも取繼ぬると里人感賞のあまり村長を以つて、訴出高聴に達し享和二戌年十月その孝貞を稱譽したまひ、文化二丑年孝子と、もに御發駕の節追手前へ召出され、役所にて白銀を賜ふときは父齡九十歳、かる四十五歳なり、同年訴出し事は疎くはしからざりしに文化二年再び郡司より尙糺し給ふに前文にのせたる如し。其時又庄屋訴出る様はかの眞仁右衛門會ていひけるは、われ老年に及び子に離れぬれ共嫁困窮の中にも女手にて行届たる介抱なしくれ、餘り氣の毒に思ふ由をいへば、夫の代りにも大切になさで叶はずとて親身の介抱をなし外々へ行き食べよきもの有時は其身食せし體にもてなし、ひそかに持歸りわれに與へ朝暮の働きより子供の世話なし乍ら我ね起に迄心を付何ぞ用は無哉寢たくはなきやと絶えず心を我に委ね、あるひは按摩をなし何によらず、一々われにとひ指圖受けざればなさず、假初に外へ出るにも必らず我に告ざる事なく吾酒をこのめば極貧の中にも種々に才覺して絶えずたべさせくれ、孫娘兩人共幼少より奉公致させ、少しの給銀も難澁の手當になすべしといへ共、必心づかへなし給ふまじといひて残らず酒にかへ今日迄好物の酒も一日も絶えずのみ、貧窮ゆる美食はなさずといへ共、何不足と思ひし事なく彼が様なる者は日本國中に二人とはあるまじと存じくらし、嫁の事ゆるまさか手を合せて拜みこそなさいれ共心の中にては常に拜み居たり。彼が心よりかやうになす事や恐らくは神佛ののり移り給ふてかかせよと御指圖なし給ふならめ、何れ人間業にてはよもあるまじと思ひける。われ當年九十歳に及びぬれば最早生る程の命は生ぬるといへば、如何様にしても御介抱はなさん迎もの事に丁百につまり給へといひ

て、甲斐々々しく世話をなす呉れる故、悴安四郎存命にてもか程には得もいたしくれまじと里人に語り悦びける。又兄傳治郎いひけるは、弟安四郎相果る上は親共は我方へ引取り世話なすべき筈なるに、われ家内五人餘の口にて殊に貧窮なり中年を疝しやく強く人竝の働きも出来かねよつて親々のみつきもせざるに、弟嫁かる引受世話なしくれけるとて歡びけるとなり。其後村長申しけるは齡九十七歳になる老人今日迄一日に兩度づゝの酒を進め、何心支もなき故にや、近年は仁右衛門却つて若やぎし體にて七十歳餘に見え、兩人の孫も成人しければ奉公に出し一人の給金は舅の酒の料にあて、一人の給銀は屋しき年貢の宛となしぬ。亦或時兩人の娘母に向ひ、餘り家も見ぐるしければ、我等取所の給金のあまりを以つて家の普請なし給へといひければ母聞いて御老人に御不自由のありてはいかせんや、舅御存生の間はふしんなどに手の及ぶ所にあらずと肯ぜざりけると里人もがたりけり。其孝狀猶御聽に入り文化八末年五月猶御賞し其上御藏米十五俵をたまひ文化十一戊年内海某家老職にて巡在の時又鳥目を賜ふと聞き及びぬ。此かるが行ひ彼比賣鑑にのする女宗が類ならんか又宋の國民の娘に蔡の國なにかしの妻となれるありその男あしき病をうけたり。妻の母淺間しく悲しく思ひければちぎりかへて美人にあはせんとす。娘の曰く夫の不幸は則ち我不幸なり。などやのがる、道あらん。女一度人にまみへては身終る迄に改めず、かの人不幸にして病はあれど異なる故もなし、又我をさらるる事もなきに何ぞこなたより捨てるべきとて、終に母のすゝめにしたがはざりしなり。此人夫婦は一體の身なれば男のすてる事なきに女のうとましく思ふ心は有まじ

きことわりをよくわきまへ知ればこそ男のあしき病をも我病と思ひなしけんいとありがたき心ばせかな。

(六) 中山村與兵衛妻

中山村といふ所の與兵衛といふものは高七斗六升餘の田地を耕す小百姓にて、妻は同村治兵衛といふ民の女にしてそよといへり。父は廿六年まへ天明四辰年死す。母きわといへるは性質いとほげしく情け薄く萬事六ヶしき者にて、村中にも譽のざる者なりけり。此そよ與兵衛へいひなづけのありし頃里人等聞て與兵衛母の氣前にては嫁を取るとも半月とは無事にあるまじ、十日と置ならば仕合ならんと嘲笑ふて居ける程に、そよを娶てのちは案外の様子にて居馴染にしたがひ家内むつまじく、半年たち一年たちいよく和合して姑も他人に對して彼が様なる嫁は又他にあるまじくなど自慢し、のちには他人に對ひても當りもよくおとなしくなりしとかや、姑老病にて五六ヶ月病ひし時だもそよが介抱行届けり。夫は魚をとり或は荒物を商ひける故、夜は家に在りて事ふといへども、晝のくたぶれにて看病も届かざりける故に、専らそよ引受けてよく事ふ、姑またそよが心を盡すを不便に思ひ、せめては夜中なり共安く眠せんものと思ひ忍んで手水に行くに、そよ目を覺し姑の先に立ち介抱なして一度も怠る事なし、寒夜には姑の裾へ廻り足を懷に入れて温め、或時は手足を洗ひなどして残る所なく心を盡し事ける故に、姑大に喜び實子にも勝る看病せしを近隣の人來るごとに語り喜びけるを見聞人毎に感じける。姑末期に及び夫婦の者を呼び、これ迄行届

きし事の禮をのべ亨和二年戊辰八月齡八十一歳にて天命をもつて終る。さばかり姦なる母もかく情深くなりぬるも全くそよ女が誠實に感じ善に移らしむるなるべし。其後君へ達し奉り同年十月孝貞を御代官所にて御褒美ありける。時は與兵衛五十五歳、そよ四十一歳なり、子數多あり。皆奉公をつとめけるに母に似しや正直なる生れつきにて、主人の氣に入り勤めけるとぞ。文化六巳年孝子等とよもにそよへ白銀を給ふ。同八年またそよへ御藏米數俵をたまひ、同年五月八日そよ病死す。同十一年戊辰海某巡在のときそよが孝を賞し且つあわれみより孝婦そよが石碑を建下されけり。實に君恩稀なる孝婦と謂つべし、其門に旌表するたぐひか、是もろこし晋の趙伯嵩が妻に彷彿たり、晋の趙崇が妻は張氏の娘なり。趙崇が母はいとほげしく情なき者にて常によめを苦しむる事いふばかりなし、され共よめは色にだもつゆうらめし氣なし。里へ歸る時父母悲しみて兎角とよのひなぐさむれ共たゞ其とがを身にひきてやみぬ。さて孝養の心深く怠りなかりしかば、姑終にめで随ひていつくしむる事淺からず成にけり。よつて其國の里人迄も嫁たらば趙伯嵩が妻の如くならん。あしける姑も心をひるがへしけり。女の師とこそいはめなど、たがひにあがめていさめあへり。伯嵩とは趙崇が字也。其姑病に臥しけるを娘のきて付添ひあつかひにけれど母の心に叶はずして我は只新嫁の手にこそは死ぬべけれといひけるとなん。世にめでたしと見る、姑だにも娘にまさりていとおしまるゝ嫁はいと稀成べき事なるをさしもにうかりける姑をやわらげて娘に思ひかへられし事、其心ざし如何ばかりにふかゝりつる、と返すくもたふとくしたはしきたためしなり。これ漢中士女志に出たりと比賣鑑にのせたり。

(元) 石浦村福松

石浦村彌右衛門といふ者は水呑百姓にて甚貧也、常に日雇と成て稼ぎける。父母は弟の福松をつれて別家に住り、父寛政九巳年に死して後は福松獨母とくらしける。この福松性質無口にして愚なるがごとし。母六年前病に臥し手足自由ならず。福松よく介抱なすといへ共田地もあらざれば食物乏しく是も漸く村中の日雇稼ぎて母を養ひける故、母病むといへ其他を稼がざれば養ふ事能はず。母の食事より兩便の介抱なしては又雇はれ先へ行少の休息の暇には又歸りて安否をとふて怠らず。何ぞ食物を貰ふ時は己れ食せずして持歸り母に進む。終夜ろくろくねる事を得ずして看病なすといへども、苦勞の體も見えず愚鈍に見ゆれども日雇にては如才なくよく働きける人々又あはれみ訴へ出ければ、上聽に達し奉り亨和二戌年その孝を賞し鳥目若干を賜ひける。同年母七十四歳にて病死す。福松廿四歳の時なり。其後福松は名を利平と改めける。いつの頃にや郡官かの利平が愚なる體にして母によく事へける意の中を聞かまほしくて利平にむかひ汝母を大切にせしは何故ぞやとなじり問へば、親あればこそこのからだもあるなれば親なき時は此身もなき者ならん。親は大切になさで叶はざる儀なり。親は神様の様なる者と答へける。又問、永き月日には親に叱られたる事もあらんか、其節の心持如何ありしや、こたへていへるは、親の儀故躰いたされ

し事と存じぬしと許りいひて其時の様子理非の貪着もなく落つき居る體に見えたり。又母無理なる事をいひし時は口答へなせし事も稀にはありしや無哉、と尋ぬれど利平は何としてと許り云ひ居ける。様子外より見る時は夫は勿體なき事と思ふ顔色に見えけるとかや。すべて表面は人竝の取廻しも出来かね無口愚鈍に見ゆれども母の孝養行きとゞき事へけるは愚にあらず。聖人教を垂れたまはば卓越の才を發するならん。文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され役所にて孝子等と共に白銀を下され同八未年の夏その孝を再び賞して鳥目一貫文を賜ふ。

(三) 八田村惣右衛門夫婦

八田村の中に八戸地といへる枝村あり、此所にすみける惣右衛門夫婦母に事へて孝なり。五石九斗の田地を耕すといへ共家貧し、父伊左右衛門なる者は寛政十二申年齡八十一歳にて身まかりぬ。子六人を殘せり。兄は家を繼ぎて是も伊左右衛門とよぶ。其餘の兄弟は別家奉公に行しや知らず。その中にも惣右衛門は殊に愛子なりければ母と共に隱居家に住けり、惣右衛門妻をさよといひて正直なる生れなり。母十五年前より病み盲人と成けるを夫婦のものよく孝養を盡しけり。中にも里人の賞せる箇條をあげていはば、惣右衛門農業を専らはたらき家にある事少し、然共家に居る時は母の兩便毎に背負行き、或は居風呂などへも抱き入れける。母常に豆腐を好みて進むれ共夏の季に至れば邊びの事故辨せざりけるを、御城下の町ま

八田村の中に八戸地といへる枝村あり、此所にすみける惣右衛門夫婦母に事へて孝なり。五石九斗の田地を耕すといへ共家貧し、父伊左右衛門なる者は寛政十二申年齡八十一歳にて身まかりぬ。子六人を殘せり。兄は家を繼ぎて是も伊左右衛門とよぶ。其餘の兄弟は別家奉公に行しや知らず。その中にも惣右衛門は殊に愛子なりければ母と共に隠居家に住けり、惣右衛門妻をさよといひて正直なる生れなり。母十五年前より病み盲人と成けるを夫婦のものよく孝養を盡しけり。中にも里人の賞せる箇條をあげていはば、惣右衛門農業を専らはたらき家にある事少し、然共家に居る時は母の兩便毎に背負行き、或は居風呂などへも抱き入れける。母常に豆腐を好みて進むれ共夏の季に至れば邊びの事故辨せざりけるを、御城下の町ま



で凡二里餘りの道のりをもいとはず行買とゝのへて進めり。妻のさよは稚き子供を養育なしつゝ殊に姑の介抱行き届き事へけり。姑至つて蚊をきらひ、近き頃は病によつて總身かゆがりぬれ共、盲の事故蚊が刺とのみ心得自身に拂ひける故、白晝にても蚊帳をつりて内へ入らしむれば、姑は是にてよしとて快眠りぬ。又己が目の見えざるを忘れくらしとて晝にてもあん燈をともせといへる時はさよやがてあんどを側に差おきぬれば姑なで廻し見て是にてよしといひて眠りける。すべて何によらず姑の氣に逆ふ事なく心よく事ふ。寒中たり共今日は暑き迎行水せんといへば、さよ屏風を立廻し風をよける手當をなして沐浴させまた茶をのむといへば餘事をすて置き汲てすゝむ。たま／＼茶のぬるき時は今は添乳せし故少しの中まちたまはれ追付参らすべしといひさま乳をのみ居る兒をすて置き急ぎ沸して進む。又母病にて近を洗ふ事いく度となくいたつて綺麗を好みける故、さよ先立つて湯をつかはせ、衣類の洗濯せしを好め共忙しき中なれば氣兼して堪忍なし給ふならんと察して、姑の氣の付ざる様にせんだくし態と糊をも付す素あらひになし置て姑の沐浴の時心付ざる様に着せかへ又目の見えざる上に耳遠しといへ共せめては耳より外に慰み給ふ事なしと察し、退屈と見るや否や、如何なる忙しき時にても聲高に昔今の咄しをなして氣をなだめ、夜の更くるともいとはず高々と嘯する事度々なり。近隣の者も聞度毎に歎賞しけり。かゝる誠實の事へ方にて餘は推して知るべし。惣右衛門兄弟六人共睦じくして皆實意なる者なり。中にも兄伊左右衛門は毎々母を迎に來り背負かへり、風呂へ入などなくさめける。夜に入れば弟惣右衛門むかひに行きて又背負て歸

る事常なり、享和二年母の齡八十四歳、惣右衛門卅九歳、さよ卅五歳の時庄屋訴出御聽に達し、同年冬其孝を御褒美ありて夫婦のものへ烏目若干下し賜りける。其後母八十六歳にて死しける。文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され役所にて白銀をたまふ。同八未年五月又さよへ烏目六貫文を賜ひけり。

(三) 東吉原町甚六

御城下東吉原町に孫六といふ者の弟甚六といふ者あり。繼母に事へて孝なり。父を甚兵衛といふ實母は甚六幼少の時死す。父後妻を娶る。是今の繼母なり。父その後廿七年前天明三卯年死せり。兄孫兵衛家を繼といへ共定れる産業もあらず、貧しければ漁或は日稼をなして母子三人の産業をなしくらしける所、繼母氣儘なる者にて孫兵衛と同居を嫌ひ、終に孫兵衛を別宅させ、弟甚六は孝行届きぬるとて家に残し母子むつまじくくらしける。甚六性質虚弱にして言語も分り兼、殊に手足不具なる者なり。されどもこれも漁を業となし、又米麥つきなど時に應じて日雇となり、賃錢を得る時は繼母へ土産の料を残し其餘はのこらず繼母へ渡しける。繼母常に酒を好めば貧しき中にも絶えず酒を進む。就中事なき時は繼母の側を離れず、若遠く行くときは同町の商人の方へ行き、我外に出れば留守中母の望の物ありて調に來る事もあるべし。其時は何に依らず與へ給へよ、代は我歸りて拂ふべしと懇に頼み廻りて後出行けり。繼母のきびしく叱る事あれば己理ある連も言分するにもあらず、己過し如くに詫けり。只常に兄孫兵衛の別宅に住みける

事を難儀に思ひ、度々繼母になげくといへ共許ざりければ止事を得ず日を送りける。され共兎角心に忍びざるにや、宗旨あらため節々は町役人の方へ行きて兄孫兵衛を同居せん事を母へなげくといへ共母許さず。然れ共孫兵衛は家主にちがひあらざれば此事豫て聞せおき給はれと頼みけるとかや。其實意孝心なる故にや其身不具にして働き鈍しといへども里人なほ憐み、日雇をやとふ時はまづ甚六を雇ひ、町内の夫役年分の町入用の割合錢杯は町役人の取計ひにて彼が出錢を先年より除くといへ共、誰とがむる者なしかや、其行狀御聽に達しければ其孝を賞し烏目若干をたまひける。これ享和二戌年の冬の事なりけり。文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され役所にて孝子等と共に白銀を賜ひぬ。其年繼母齡八十七歳、甚六四十二歳と聞えし、其後孫兵衛は同町某方へ養子に行けれ共其始末詳に聞かず。同八未年夏五月廿四日に又烏目六貫文を賜りけり。

(三) 森村西右衛門女

森村に住める西右衛門とて田地をも持ざる水呑百姓あり。女のごは父母に事へて孝なり。兩親共に年趣耳遠く殊に母は過しころ火傷にて手の自由かなはず、其上とは九歳の年より母また眼病にて此七八年この方終に盲となり、彌々貧乏にて家産もあらざれば、とは同村の民の田畠耕すなどに雇れ、冬春の外働も少き時は家において苧繼糸紡など稼て僅かの賃を得て兩親を養ひけり。其雇れさきにて別に食物を貰へば己

食せずして必持歸り兩親に進む、父常に大に酒を嗜むといへども貧にして多く吞ましむる事能はざれども又進めざる日もなし。たゞ兩親の氣に逆ふ事あらず、然れ共母至つて氣早き質にて度々叱る事あり共いさゝか言葉返す事なかりしとかや。里人彼が孝を賞しけるよしをとは聞きて、われ孝行になせしとは更に思はざれども、一錢二錢と稼ぎ出し、毎日の様に父に酒をたべさせぬる事は他よりは孝行などのたまふならめといひて誇る色もなし。里人その孝心の上に年丈け夫なきをあはれみ婚を入れん事をすゝむ。とは答へてかゝる困窮の中へ他人を入れる、時は却つて兩親の心支へなりといひて肯ずして、一筋に心を盡し事へけるが、母終に丑年六十三歳にして身まかりぬれば是非なく野邊の送りにいたる迄懇に執行ひけり。後は老父にいよく心を盡しける。里人賞して普く孝子の名聞えければ富有家柄にて善を好ものより婚を求むといへども家に老父あるの故を以てまた斷りければ、いよく孝女の聞え高ふしてしきりに縁を求め、老人の上を案する事専らなり。此上は老人共に引とり生涯不自由なからしめんと餘儀なく媒介を以ていひ入るものあり。とは思ふ様は、たとひ衣食において不自由なく其他人の家へ行ときは父の氣苦勞いか許りならん。むしろ貧しくくらす共父の氣を易くくらすせんにかじと獨決して嫁せざる由を誓ひ又肯ざりけり。其事實文化二丑年封君へ聽え奉りければ、其孝操を稱せられ孝子等と共に御發駕の節追手前へ召出され役所にて白銀を下され、同六巳年父齡八十四歳にて天命を以て終る。此時とは卅八歳なり。同八未年五月再び白銀を賜ひける。此女富貴にまよはず貧賤に能こたへ且父母の心ざしを養ふならめ、里人の

孝女と稱するも宜なり、これも比賣鑑といふ双紙に出たる、備前國兒島郡小串村に住ける、七郎兵衛といふいと貧しき民あり。娘を持てり。父いたく老ひたり後の母これもや、衰へぬ。兩親のたのめる所はたゞ此女ばかりなるに依つてしたしきもの相謀りてむこを取り、父母を養はせんとす。娘否みていへるは人の心知りがたし、我が夫ならん者若し父母に悪しくばわれ如何ばかり親を思へるとも心にまかせざる事多かるべし。其時悔ゆとも甲斐あらんや。おぼつかなき計はせざるにはしかじ。我女にこそあれ、たゞ二人ある親なれば兎も角も養ひみざらめやとて、自ら田畠の事に心を盡し、力の限りつとめ、父も繼母も萬負しからずして常によろこび居けるとぞ、此とは女も同じ心ばへならんか。

(三) 眞倉村藤助夫婦

眞倉村に藤助とて漸く三斗餘りの田地をもちける貧民あり。父を三助といひ、母は藤助三歳の時身まかりて後は藤助父の養育にて成人なりぬ。丹波國何鹿郡黒谷村の民俵兵衛といふ者の女きはいへるを藤助妻となす。この夫婦共に父によく事へ、すべて父の意に逆はず萬の事命を請ざれば夫婦の了簡にて行ふ事なく、常に父の飲食には格別丁寧にとゝのへことに父酒を好めば、貧窮も厭はず日毎に進め、父田畠へ行時は嫁茶を煎じ茶の子ともなるべきものを携へ行きて舅の勞をなくさむ、舅家にかへらん頃を考へ湯を沸し、かへるや否湯を汲み足を洗ふまで至らずといふことなし。況て子多しといへ共夫婦共に萬の

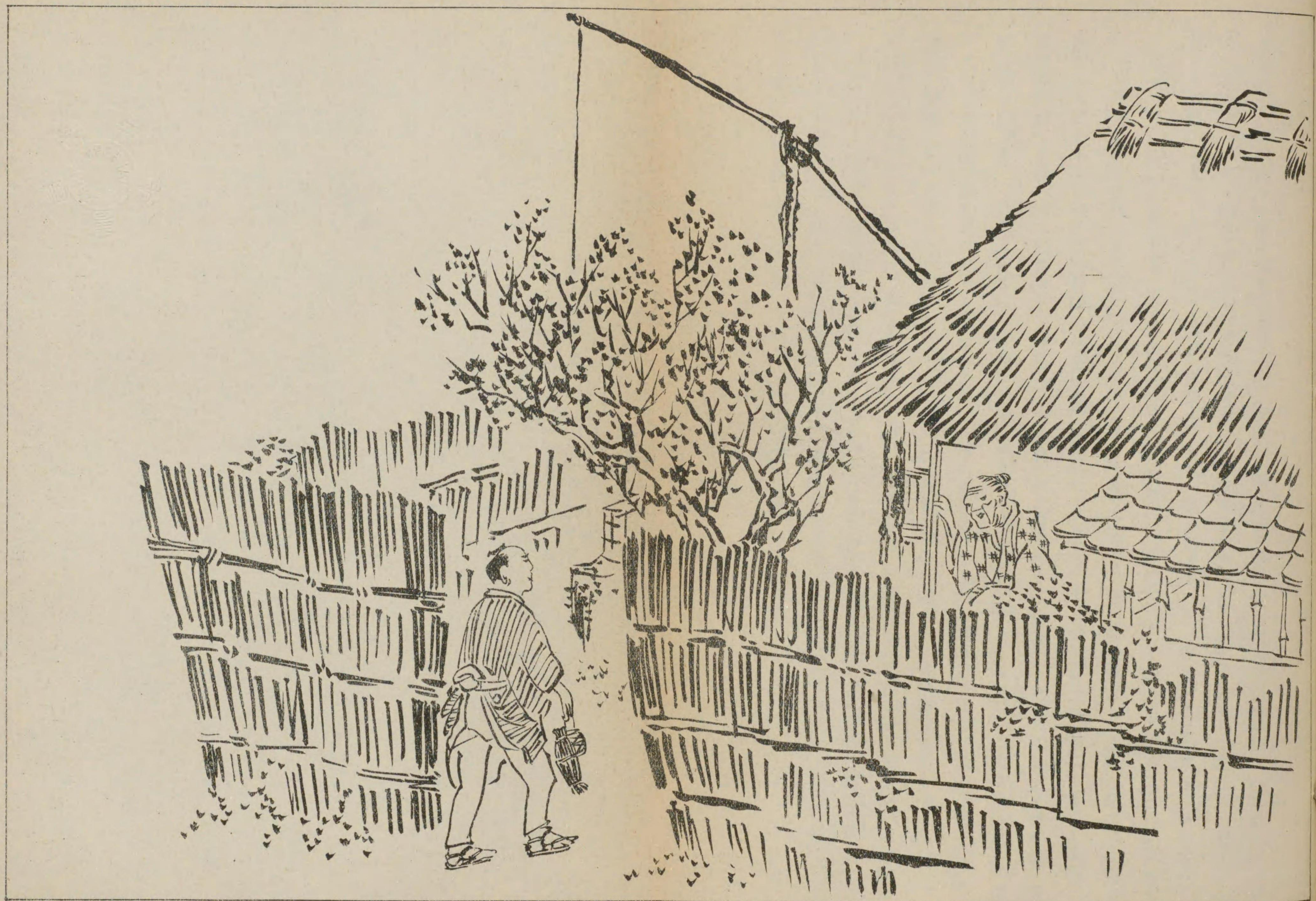
事親へ〜と爲す故家彌々貧し。然れ共父には何不足と思ふ様子更になし。この行狀書を以て村長訴へいできる頃、郡吏の人藤助を呼び出し何故かく父を大切にすやとわざと問尋ねければ、私幼年より父一人にて育てられ世話になりし事共少しの間も忘れてはならざる事と思ふ旨を答へけり。其孝志の厚きを以て文化二丑年御發駕の節追手前へ召出され、役所において孝子等と共に白銀をたまひ後同六巳年かの夫婦の行狀なほ糺されける所いよ〜孝養おこたらず、其頃は藤助長子廿五歳に成けるを始めとして五人の子あり。藤助をしへの然らしむる哉皆孝心にして家内むつまじくらしける。父の齡九十七歳、藤助五十五歳、女房きは五十二歳と聞えし。文化八年未の夏鳥目若干を夫婦にたまはりけり。この藤助が子供又父母の名を顯はす者あるべし、探ぐるに暇あらず。

(二四) 富室村辰五郎

富室村の辰五郎が父利右衛門といひしが、廿年前身まかりぬ。辰五郎母に事へて孝なり漸く一斗九升餘の地面を持つといへ共、母を養ふにも足らざれば他國を稼ぐ時は、給金も多くして助けとも成べかりけれ共、母の側を離るゝ事を厭ひ居村に奉公を爲ばやと思ひ同村何某方へ行き母の故を以て奉公を望めば何某も心ある者にて辰五郎が志を奇特に思ひよく聞入れ則ち抱へけるが、朋輩の者晝休みをなす時は辰五郎我家へ歸り水を汲み薪を母の手近き所へ取よせおき、又は掃除をなし母の勞なからん様になしおき、又

(二) 富室村辰五郎

富室村の辰五郎が父利右衛門といひしが、廿年前身まかりぬ。辰五郎母に事へて孝なり漸く一斗九升餘の地面を持つといへ共、母を養ふにも足らざれば他國を稼ぐ時は、給金も多くして助けとも成べかりけれ共、母の側を離るゝ事を厭ひ居村に奉公を爲ばやと思ひ同村何某方へ行き母の故を以て奉公を望めば何某も心ある者にて辰五郎が志を奇特に思ひよく聞入れ則ち抱へけるが、朋輩の者晝休みをなす時は辰五郎我家へ歸り水を汲み薪を母の手近き所へ取よせおき、又は掃除をなし母の勞なからん様になしおき、又



主家へ行き朋輩目さむると等しく勤め、夜は主人に告げて己が家にかへり母の側にあつて四方山の咄しをなして心をなぐさめ朝は疾起きて又主家に歸り、己がつとむべき業怠らざれば時としては主人の間欠に成事あり、然れ共主人も彼が孝心を感じどがむる事もなく勞り召使ひけり。母は幼きより富有の中に成長せし者なりければ、少しは奢もありて雜食を厭ひければ貧窮にては猶事へがたき筈なるべきに、己れは食せずしても母の不自由なき様にと心をくだき事ゆるといへ共、計らずも母の氣に應せざる事ある時は猶孝養を盡しけるよしを村長訴へければ主人辰五郎を呼よせ假にその孝養の志を尋ねけるに、親のお蔭にて成長なしたる我身なりければ大切になさで叶はざる事と存すれ共貧窮の中ゆゑ心にまかせぬ事共多く母の氣に背きし事も御座候、これはまことにすまぬ事と存じ斷り申すに御座候、たゞ明くれ母の不自由を思はるべきやとなんぎに御座候と答へけり。其孝心を君の御聽に達し文化二丑年五月其孝を賞し、諸孝子等と共に御發駕の節追手前へ召出され役所において白銀を賜ふ。其のち母病にふしければ看病のならざるをうれひ、奉公を引き家にかへりぬれば、五ヶ年已來は猶更貧窮に及びぬれ共、怠らずよく事へ同國同郡高津江村の仲右衛門といふ民の娘を娶り子を設ける。それから妻子におとろふるもの多し。彼は猶孝養を盡しけり。妻も正直なるものにして夫にしたがひともによく事へけるとなり。同六巳年母七十一歳辰五郎四十三歳と聞えし。同八年夏の頃猶賞して鳥目五貫文を賜ひける。

(五) 志高村和七妻

志高村喜四郎といへる民二人の子あり。兄を喜兵衛弟を和七といへり。父家を喜兵衛に譲り一石餘の田地を持ちて二男和七をつれ別家に住けり。妻は先達て死し喜四郎やもめとなる。和七年頃にも及びしかば久田美村の勘兵衛といふ民の娘しちといへるを和七妻に娶りくらしける。享和二戌年和七早世す、これしち廿九歳の時なり。しちは幼子供を育つゝ八十歳に近き舅を大切になし仕へける。中にも舅他へ出て少しにても歸りの遅き時は心ならず思ひ迎ひに行き手をとり介抱なして連れ歸りぬ。又舅齡重るにしたがひ眼力うすく歩行自由を得ざれば、猶更心を配り親切に事ふといへども家極めて貧しく夜具なども薄く、寒夜はしち身をもつて床を暖めねさしめ、晝夜兩便の世話も夜中五六度に及べ共其度々に汚れし衣類を取り替へ着せ、又はあぶり出し假にも冷き物を着する事なく己は安くねる事なく孝養し、小兒を育つる片手には布木綿を織て活代なし家のたすけとなす。舅常に酒を嗜めば孝婦酒徳利をふどころにして求めてすゝめけるを初めの程は里人も知らざりしが、度重なりて後には他人も心づき女の身にて稼ぎ出し舅を養ひあまつさへ日々酒をのましめ、子を育つる事よと皆人ほめざる者もなし。舅もその孝養の行届きぬるを里人に告げて喜びけり。文化二丑年上聽に入奉り同年御發駕の節追手前へ召出され孝子等と共に白銀をたまふ。其年喜四郎齡八十二歳にて死しける迄四ヶ年の間孝養艱難を盡しける。行狀猶又官へ聽え同八未年五月廿四日

これを賞し銀二枚たまはりけり。

(六) 河原村平助妻

河原村の枝村下見谷といふ所にわづか二斗七升ばかりの地面を頼みて世をわたる、善四郎といへる者かあとといへる娘あり。このかあ父母に事へて孝也。素より家貧しく山へ行ては時節々々のわらび、うごのるい時としては箕につくる藤なんぞ採り來りて活代なし、常に雇れ人となりて唐臼にて米麥を搗色々々稼て兩親を養ふ事甚殊勝なり、雇れ先などにて食物を得る時は己食せず急ぎもち歸りまづ父母に進む。かあ四十一歳の時寛政四年父九十歳にして天命をもつて終る。夫より後は母に事へて怠らざりけり。或時老母かあに聳どりやらんといひて度々勸めける。かあ常には親の意に背事つゆばかりもあらざれ共、かゝる貧なる上に他人を入るる時は母の心づかひことに子供生れば難儀重るのみにて母の養ひ支ん事をおもんばかり其由をのべて斷りける。母又跡目のなき事をうれひ歎きければかあ聞ていふ。親類兄弟もあり、跡目の事は如何様共成べし、必案じ給ふ事勿れとなだめて過しける處次第に母の年老腰かゝみ歩行自由ならず、戸口へ出る事も能はずとれへければ、かあ答へて暖かにもなりなば又出給ふ様にも成得べしと和らかに慰め時としては背負出して氣を晴さしめ慈母の子を育つる如くになして孝を盡しける事御役所へ聽え、文化二丑年御發駕の節追手前へ召出され、御役所にて孝子等と共に白銀をたまふて孝を勵し給ふ。同卯年母

齡八十九にて終ける此時かあ五十六歳なり。翌年親類より集りてかあに婿をとり家を立さしめんとばかり、今の平助を入婿となしてよりむつまじくらしける。いつの頃にや御役人孝婦かあにその背負出などして孝養せし言の内を探り問へばかあ答へて何も譯はしり侍らざれども、只親大切に思ふ許りなり。稼ぎ先にて食物を貰ふ時は早く持かへり母に與へその悦びを見るこそ樂しみなりとこたへけるとかや。全體かあ他人へ對し柔和なる者にて、村中誰かほめざる者なし。同八末年五月再び鳥目五貫文をたまひけるとぞ、却説其譯はしられ共只親を大切に思ひ母の歡びを見るこそ樂しみなりと答へける、心根導びかすして聖教にも叶ひぬる一言なるかな。

(三七) 貳箇村武助夫婦

貳ヶ村の民吉左右衛門といへる者は正直なる性質にて是非も辨へ村中にもほめられける者なり。男女の子四人あり、これまた正直なる風にて能他人の世話などもなしける。嫡子定右衛門に家を譲り、姉妹は他へ嫁せしなるべし。吉左右衛門夫婦は二男武助を連れて隠居の身となり、五石許りの田地を持ちて別宅に住み同村武左右衛門といへる者の女たつといへるを武助妻となし、家内四人むつまじくらしけり。武助夫婦共に父母に孝なり。母年老し上に寛政六子ごしより中風の病にて手足叶はず、其頃か父も老屈し歩行かなはざれば武助夫婦晝夜かたはらを離れず看病なしける。父母とも病の上に次第に老耄して稚きものゝ

(二七) 貳箇村武助夫婦

貳ヶ村の民吉左右衛門といへる者は正直なる性質にて是非も辨へ村中にもほめられける者なり。男女の子四人あり、これまた正直なる風にて能他人の世話などもなしける。嫡子定右衛門に家を譲り、姉妹は他へ嫁せしなるべし。吉左右衛門夫婦は二男武助を連れて隠居の身となり、五石許りの田地を持ちて別宅に住み同村武左右衛門といへる者の女たつといへるを武助妻となし、家内四人むつまじくくらしけり。武助夫婦共に父母に孝なり。母年老し上に寛政六子どしより中風の病にて手足叶はず、其頃父も老屈し歩行かなはざれば武助夫婦晝夜かたはらを離れず看病なしける。父母とも病の上に次第に老耄して稚きもの、



如くになり、父母仲悪しく終に一家に住む事をさらへば孝子等詮方なく裏に又小部屋を營みて母を引分け介抱なせども父母共に病ひがみて父の介抱なせば裏なる部屋より母小言をいふ。又母看病なす時は父よび付くるといふ様にて殆んど六ヶしかりしを孝子夫婦手分をなして彼方此方と心をくばりはせ廻りて、晝夜帯をもとかすして看病なし事へけり。且武助農業をばげむこと餘人に勝れり。晨は人々よりも早く作場へ行き暮には星を頂き歸る。歸りては直に兩親につかへて怠らざりけるを里人隣家の者評して云ふ。武助夫婦ともに夜も臥す事あらじ。いかにとなれば臥してはかくのごとく看病もなるまじ。其上晝のくたぶれもあるべし。いかゞして勤めぬる哉永き年月の間骨折退屈の體も猶更人目にも見せず恆も變らで事へ其上女房は幼少の子供を育て乍らの看病苦勞の體色にも顯はさすいつにても笑顔にて介抱なせしむいふかすと村中おしなべて感賞なせども其身にては只孝行の届かざる事のみ常に憂ひけり。母七ヶ年の病ひにて享和九酉年齡八十歳にて終る。其のちは夫婦の者いよく父を大切になし、兄弟仲もむつまじく取分け農業を勵みける事文化二丑年高聽に達し、厚く賞したまひ則御發駕の節追手前へ被召出御役所にて孝子等と共に白銀を賜ひける。其翌寅年父吉左右衛門八ヶ年の病ひにて齡八十九歳にて終る。其頃は武助五十一歳、妻たつ四十三歳なり。武助兄弟みな律儀者にて、就中武助は正直無口にして愚なるやうに見ゆれども、如何成難儀にも窮する體なくいか成悦びも歡ぶ色なく怒り罵る事は元よりあらず、すでに田畑境目の杭うつ時だも餘人より己が田畑の内へ打入るゝ共構はず、己打つ時は己が田畑のうちへ引入れてうち、或は境目溝さらへし

て泥砂は己が持分へあげてすべて他人作方の障りにならざる様になし検見まへ村長田面を見廻る時だも諸民われ一にと各々が作のいたみぬるよしを訴へるもの多くして甚だやかまし。しかるに武助獨りは一言も出す事なく、武助が作毛皆無のやうに見ゆる故庄屋武助にむかひ其方の田面皆無にはあらざるやと問へば、武助は却つて肯わずしていへるは、外より皆無と見ゆれ共刈とれば左もなきものなりと答へて自若たり。又年貢收納の時に至れば人に先ち一番に皆納して村長も恥るばかりなり。夫故にや作毛も人にまさり實入よしと賞しあへり。斯正直にして農業を精出しけるゆへに兄と別家なせし頃は五石許の田地高も今は餘程の事になり。又餘人より頼母子等を頼む時は相應に加入し小づかひ錢はいつにても人の用を達しける程の身分となり、人を雇ふといへども並よりは賃錢餘計につかはし、又人々へ用立し銀錢先より返さざる間は催促する事なく、日雇の者へ取かへおくととも雇賃拂ふ時差引なさず、其度々の賃錢残らず渡しぬ。もし向より差引くれよといへば其意に任せし事もありて重ねて入用の時は又用立ん事を約す。凡べて廉直に爲す故に不足もあまりもなく一ばいに暮しける。所謂仁を爲せば不富富を爲せば仁ならずとは武助がごときなるべし。彼が行狀近村近郷までも聞え渡り善人と稱しけるが終に官聽に達し、文化八末年五月二十四日其孝狀の怠らず廉直なるを賞して再び御藏米七俵をたまひ女房たつへ白銀二枚をたまひ、同一戊年重臣内海某巡在の時鳥目一貫文を賜ひけり。

田邊孝子傳 卷之參 畢

卷 之 四

(三) 萬願寺村兵七

萬願寺村の農民兵七は、わづか五斗の田地持ちし貧民なり。父を又兵衛といひ實母は兵七三歳の時身まかり父後妻を娶る。これ兵七繼母なり。父は短氣なる者にして其上近頃は腰痛にて歩行不自由になり、折節は兵助を打擲なす事ありといへども兵七不平の色もなく、常に父の氣に逆ふ事なく萬事父の指圖を受けていか成難題難儀なる事にてもあい／＼と二ツづゝ諾をなして更に鈍き聲音もなさで快く肯ひぬ。己作場へ行く時は父の案じて跡より膝行出るをうれひ種々なため、又は留守にて退屈なき様にと慰みともなる物をこしらへおき或は同村なる不動院といへる寺へ負行父の氣を慰めたまはれと寺僧へ頼み預けおきて作場へ行ぬ。暮に及べば例の短氣にて膝行かへらん事を恐れ作場より早く歸り取る物も取敢ず迎に行て脊負かへりけり。寒夜には火を焚きて暖かならしむ。元來極貧にして、火燵など調る事も能はざれば不束なる手細工にこしらへて、唯父の寒氣を防ぐ手便とす。其日稼の中にも親病ぬるときは醫藥はいふに及ばず、種々祈禱をなし己は寢食を忘れて看病なすといへども、年來の病にてや文化三寅年父六十七歳にて病死す。全體兵七柔和なる生れ質にして、繼母にもよく事へ他人にまじはりよく其志の切なるを村長うつたへ出る

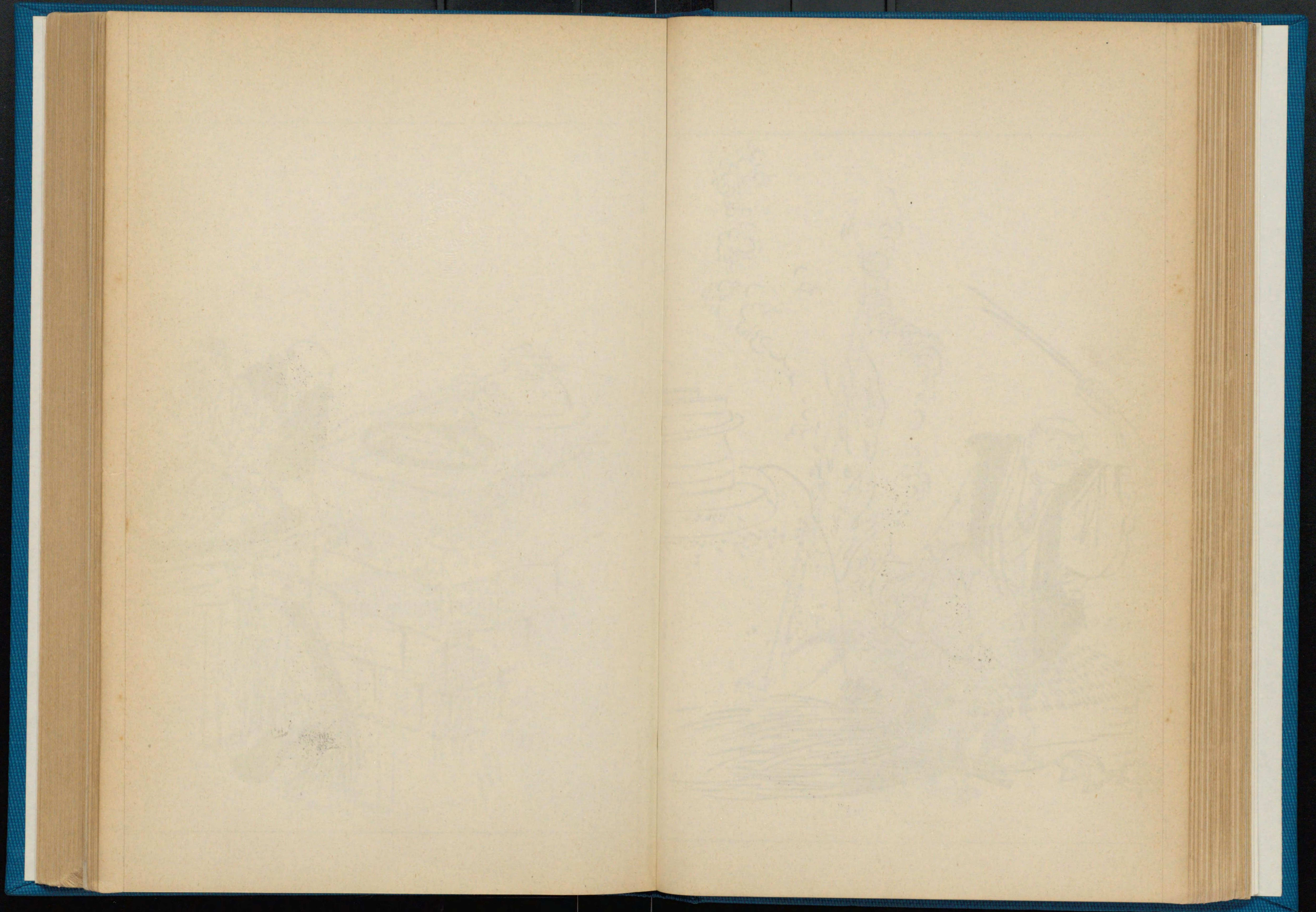
にまかせ、文化二丑とし御發駕の節孝子等と共に白銀をたまふ。頃は兵七三十四歳なりける。文化八未年の夏また鳥目二貫文をたまひける。

(元) 東吉原町利兵衛

東吉原町に太右衛門といふ者あり。其子利兵衛は若き頃より兩親の言葉に叛く事なし。父は寛政元酉とし身まかり家いよく貧し、利兵衛年たけけるにしたがひよく母に仕ふ。常に他へ出る時は母に告げて歸ればつげ、夜に入り歸る時は母のね入りたりといふ共其ね間に入り今歸りしよしを告ぐ振舞事ありて行時だも今宵は何どきには歸るべしとつげて行くにたとへ酒に酔ひ伏すとも母に約せし時刻に至れば、亭主に其故をことほりて歸るに時を移さず其時母寢入たりとも必告て母の安緒するを見ざれば己寢ることなし。次第に子出生して六人に至り家内九人と成りて、いよく貧にくらすといへども、更に孝養は怠らずむつまじくくらし近隣の交りもよしと、町役人の訴ふるにまかせ、御發駕の節追手前へ召れ、孝子等と共に白銀を賜ひけるは文化二丑年の事なり。同六巳年母齡九十二歳、利兵衛六十歳と聞えけり。後同八未年夏又鳥目若干をたまひけり。

ればつげ、夜に入り歸る時は母のね入りたりといふ共其ね間に入り今歸りしよしを告ぐ振舞事ありて行時
だも今宵は何ぞきには歸るべしとつげて行くにたとへ酒に酔ひ伏すとも母に約せし時刻に至れば、亭主
に其故をことばりて歸るに時を移さず其時母寝入たりとも必告て母の安緒するを見ざれば己寝ることな
し。次第に子出生して六人に至り家内九人と成りて、いよく貧にくらすといへども、更に孝養は怠らず
むつまじくくらし近隣の交りもよしと、町役人の訴ふるにまかせ、御發駕の節追手前へ召れ、孝子等と
共に白銀を賜ひけるは文化二丑年の事なり。同六巳年母齡九十二歳、利兵衛六十歳と聞えけり。後同八未
年夏又鳥目若干をたまひけり。







(三) 東吉原町九郎右衛門

東吉原町に住て漁を業となしける、八郎左右衛門といへる者の子九郎右衛門といへる者の母は天明四辰年死す。家貧しく素より賤業にて取分け父母の教もなく、智闇くして父母の恩さへも辨へざれば、己獨り育ちし様に思ひ何事も父母に逆ひ假初にも順ふ心なく、父も亦子とも思はざりし形勢なりとかや。其頃君専ら仁政を施し、庶民を導き給ふ御餘澤にや當時手島門人のうち中澤道二といへるは七十餘の老人にて、京都に名高き心勞の講師なりしが、享和元辛酉年卯月の頃町役人共いひ合せこの老翁を招き來り、瑞光寺に於て毎夜かの道話をはしめける。固より席料もいらざる事なれば、此九郎右衛門も淨瑠璃、落しばなしなど聞心もちにて或夜其席に入て聽所に其夜の話しは天地父母の恩のありがたきより、孝道の筋にも及べるなるべし。講席了りて五郎右衛門家に歸るや否父に向ひ、年來の不孝の罪をわびけるは不思議といふべし。父は却て其黄昏迄もわれを足げにせざるばかりなりしにいつになく改りし言葉手の裏を返すことくなりければ、若や狂氣もやせしならんと、只顔をながめて言葉なかりしも理なり。さて何故斯いふやと問へば今宵心學の話しを聞に行しにかやうくと答ふ。父更に實とも思はざれ共其の夜は過ぬ翌晩またかの話を聞に行んと父に乞ふ。父も悪しきことにも思はざれば免してやりぬ。九郎右衛門道話を聞くにしたがひ彌々後悔なしけるは誠に人心靈妙の本心發見して、平日の不孝を改め子たるの道を勉むる心に成けるは、秉彝の

良心止に止まざる所難有かりける事、心學の大功道二が徳化といふべし。其後享和戊年二月より父八郎左右衛門病を發し妹も同じく三月より病ひぬれ共二人ともさせる症にもあらざりしに、かの親を親とも思はざりし九郎右衛門漁をやめ家にありて父妹を介抱すること奇特ともいふべし。素より貧窮の上に家業を怠れば必死の困窮におよびぬ。病人介抱のいさまには米屋を頼みて米の賃搗をなして、少しの賃錢を得て以つて日を送る。光陰早くも冬にいたれども衣類も薄く一枚の着物も父に着せ妹に着すれば、己は極寒たり共單物一枚にて寒風を凌ぎ、近所の米搗にやとほる時だも休の間には歸りて、父の安否をとひ、又日雇さきへ行て業を勵むかくの如く艱難辛苦し看病するといへども、翌亥年の春妹病死す。同卯月に父も同じく病死しなければ昔時の不孝に引かへて今は又孝子九郎右衛門心の中思ひやられて猶哀れなり。斯てもあらざれば野邊に送りけり。其後は前のごとく漁をなして、稼ぎ出し食物の餘錢を集めおきてさて金方へ返すすましける迄の行狀文化二年高聽に達し奉りければ、君深く感歎まし／＼其孝友を賞し御發駕の節追手前へ召出され御役所にて白銀をたまひける。これ九郎右衛門三十五歳の時なりけり。又里人の物語りを聞くに九郎右衛門父死後漁獵に出るに彼がのる所の船には必らず漁多しといひて擧つて九郎右衛門と同船を望む者多かりしとかや。これ全孝感のいたす所か、上學を好んで下を仁ざれば善教をきく事あたはず。善教の力によらざれば何を以つてか感發興起の端をひらかん。性本善なりといへどもこれ又教の然らしむる所ならんか、文化八未年五月二十四日再び寝美なし給ふて鳥目若干をたまふ。

(三) 大内町嘉七女

大内町に治右衛門といふ者ありて、女子のみ持て男子あらざれば、同御城下竹屋町に住む、壺屋幸助なるもの、弟嘉七といへる者を養ひ、後に娘鹿に嫁せ別家に住ける。子三人を設けたり。長女をかるこいひ弟を嘉市といふ。嘉七身まかりて後は母子共に家にあつて幸助に頼り萬の事をたのみくらしける。所にかる十二歳の時幸助さし圖にて縁者のものをたのみ京都へ上しけるが、寺町通佛光寺下る町なる鍵屋喜右衛門といへる町人の方へ下女奉公にありつき、七八年も勤めける所、文化二丑年九月頃より叔父幸助大病に取詰めぬるよしを國許母より文の便にて知らせける。かる其文を見て大いにおどろき親同様に思ひたのみたる叔父の事なりければ、一入安否聞かまほしく案じ居る折節神無月十日田邊町家の商人店さきを通るを見るや否呼かけて幸助が病體を聞くに甚だ大病にて諸醫者六かしくいひつるよしを答へて行過けり。後にてかる思ふ様は幼年にて父にはなれしより母弟等も無事にくらすも皆これ叔父のお蔭なり。左ほどの厚恩を受け乍ら一日片時の看病も爲さざる事残念なり。萬一叔父不慮の事ある時は母はいふに及ばず、幼年の妹弟等いかゞ成行んと切に胸塞り終夜案じわづらひて翌十一日の朝國許へ病氣見舞の文したゝめ菓子等を調へ主人に少しの暇を乞ひ、田邊日雇の宿むる東中筋五條上る町に住む竹原屋喜兵衛といふ者の方へ行きかの見舞の封物を在所へ早き便にとりけたまはれと頼み置きて歸る道すがらも、翼あらば飛行かん

思ひの遺瀨なきあまり賈卜者へ立よりて占を貰ふ。易者いへるはこは其許目上の人大病と見たり。本復は覺束なし。其許恩義もあらんには早々見舞に行かれよかしと判断して聞せけるに、かる思ふ様見舞にはるく行きたり共詮する所命なき時は何の益かあらんと心に決断し、又易者にむかひ然らば、我等命にかへて神佛を頼み祈請かけなば如何あるべしやと問ふ。易者こたへて誠心に祈り給はばなどか驗のなかるべきと力を付けり。かるは夫より心を決し直に己が主人の所書を懐中し、清水寺に詣で觀世音を拜し、此度叔父幸助なる者大病のよし、いよ／＼壽命なき事にも侍らば妾が命を代りとし叔父が死を助け給はるべしと、一心不亂に祈誓し終りて忽ち彼舞臺より飛び落しは憐れなりけり。然るに不思議なるかな心氣も違はざれば立たん／＼とすれども腰なへ立つ事能はず。是非なく其の儘うづくまりゐる所へ人々見付集る中にも寺中の役人ともおぼしき侍一人出來り、其始末を具さに聞く。皆々驚き合へり、頓て人を呼來りかるを寺へ連行き介抱し粥を與へ置きて鍵屋竹原屋へ人を走らせければ、おの／＼かけ付かるを竹原屋へ引取り醫者をむかへ療治を加ふるに十日ばかりにて歩行も成ける程に治りけり。却説かの幸助さほどの大病も日ならず平癒に及びけるは全くかるが誠心を天の感應する所なりと聞人舌を卷て感賞せざるはなし。其のち故郷へ歸り高聽に達し奉りけるに、その志の厚く天の福を得たるを賞し、鳥目若干たまひけるは、文化二丑年のことにしてかる十九歳の時なり。予が兄是を稱し幸助に謂つてかるを貰ひ、彼が舞臺より飛びし時脊骨を突上しにや脊の七の邊高く突出しせむしのごとくかゝみけるを、様々療治を加へて良癒ければ御家

中竹内某が妻になしぬ。其後文化八未年又白銀二枚をたまふ。かの清水寺の舞臺より飛びしもの昔より折々有ども、多くは色慾邪望の爲にして助る事の稀なりといへり。此かるは元來性質美うして加ふるに主人鍵屋喜右衛門心學を好み家事を脩め下部に至る迄何くれと心を付て召使ひける。其中に七ヶ年も染ける故自ら本心を發するものならんか世上に善質の者だも習俗に染み身を誤る者幾干ぞや。かるが幸を得る事全く教のなす所ならんか。

(三) 堀村與想兵衛

堀村といふ所に與想兵衛といへる者あり。二斗六升許の田地をもらし、小百姓なり、父も與想兵衛といへり。隠居して子に家を譲り名も與想兵衛と呼びけるならん。此子與想兵衛六歳の時實母死して父又後妻を娶る。これ今の與想兵衛が繼母なり。父與想兵衛は天明八申年齡八十一歳にて身まかりぬれば、與想兵衛獨り繼母とむつまじくくらしける様子は里人も知るといへども、させる行狀知る者なかりし所に繼母次第に年老過にし丑ごしの冬より中風を病ひ、手足も叶はざれば與想兵衛よく介抱なしぬ。殊に母食物を好むことあれ共、家賃しく調る方便もあらざれば止事を得ず。然れ共望みをとげざるも本意なしと村中を貰ひ歩行て漸く調へ進めける事もありけるとなり。すべて母の氣に逆ふ事なくよくつかふ。後には母殊に衰へ日の中兩三度も兩便を取はず事ありければかねて、手當をなして取かへ、又床すれいたみあらんと心

を用ひ和らげ、晝夜側を離れずして介抱おこたる事なし。餘儀なきことありて他へ出る時は其次第を母に告げ合點させ、少しの間待たまはれと言さとしおき用事を調へ急ぎ歸りける程にて一人の身にて孝養行届きぬるを村中始めてこれを知り感ずるの餘り貧を憐み雜穀薪などを各々持運びて助けるとなり。其行狀文化三寅年村役人訴出にまかせ、同四卯とし御發駕の節孝子等と共に追手前へ召出され御役所にて白銀を賜ふて賞したまひける。同六巳年繼母八十一歳にて病死す。此時與想兵衛六十二歳になりける。のち同八未年五月二十四日再び鳥目三貫文をたまふ。

(三) 與保呂上村藤吉

與保呂上村といへる村は山谷邊びにして、政教も届かぬ至つて朴訥なる土地なり。爰に住む善太郎といふ者の子に藤吉といふ者あり。父善太郎は壯年よりよく稼し者なり。され共不仕合にて妻二人に離れその上田舎に稀なる火事に逢事三度に及び至つて貧なる事云はずして知るべし。藤吉六歳の時母に後れ父又後妻を娶る。藤吉成人にしたがひ、父母に善く事へ假にも命に逆ふ事なく萬の事父のいひつけをまちて勤める。常にいふ親の心を慰むる者は多柴粉なりとて自から刻み髪月代をも己が勤めとなして、いかほど忙しい時節なり共父の髪月代をこのめば業をすて置きてかみゆひ、如何なる農事忙しき時だにも出入には必告己が在る所を知らしめ、萬事丁寧に事ふ。前に云ふが如く三度の類焼にて一旦は家の取繼も危く貧窮に

及ぶといへ共耕作の暇には人の荷持などをなして賃錢を得て孝養の助と爲す。

或年一ヶ年に銀百匁ばかりの賃錢を得て親に見す。兩親これを見て大に悦び、父云ひけるは此方づれの百姓の身分にて耕作の透に百匁の銀子を得る事稀なる事ならん。此末何時にても稼ぐ時は斯程は取れるものと思ふべからずと諭しける事もありけり。かく稼て少づの餘銀を以つて村長親類へ行我等身分にしては何時入用も圖りがたし。假令利息少したり共厭ふべからず。只入用の節間欠けなき様に取計ひ給はれといひて、彼銀子を預ける。父子共に能稼ぬれば追々田地も買求め後には一石餘の田面を持つ百姓とはなりにけり。藤吉妻はさよといひてよく舅姑に事ふ。或日忙しき時さよ子供を叱りし事あり。藤吉つくづく聞き居てのち竊かに妻にいひけるは子供を叱る時は、親の氣に逆ふ事もあるべしと戒めける事もありけり。其心を用ふる所知るべし。次第に兩親共に年老子供も出生して九人の家内となりて難儀なるべきに誰一人病ふ事なくむつまじく暮すはこれ孝行の功德ならんと近隣の民は稱しあへり。終に訴へ出上聽に達しければ文化四卯とし、夫婦が孝を賞し給ひ御發駕のせつ追手前へ召出され御役所にて孝子等と共に白銀を賜ふ。同六巳年に至り、父齡七十九歳、繼母七十二歳、藤吉四十九歳、さよ四十三歳と聞えけり。その頃は田地二石三斗餘持けるほどに稼ぎ出しけり。文化八未年五月二十四日再び鳥目若干を藤吉へ下されさよへも鳥目若干を下されけり。

(三) 朝來中村清八

朝來中村の百姓九郎右衛門子五人あり。皆むつまじくくらしけり。妻に離れ後妻を娶り、長子へ名を譲りて子も九郎右衛門と呼び、二男を清八といふ。この清八母に離れしは六歳の時なり。父九郎右衛門は天明四五年のころに身まかりし後は繼母兄に事へて孝友也、兄九郎右衛門未遂多くして家貧しければ、己は御城下の町家へ年季奉公をなす事十ヶ年餘なり。夫より又御中間奉公を勤むる事又十餘年に及べり。すべて二十餘年給金は一錢も己が身に儲る事なく残らず兄に與へて助となす。其孝友を聞傳ふる者養子になさばやと貰ふ者多しといへども、兄の身上立て直さるる中は幾年も奉公なして兄を助けんものとして肯ざりけるとかや。其孝志あつき事を村長訴出るにまかせ、文化四卯年御發駕の節追手前に召出され、孝子等と共に白銀を賜ふ。同六巳年清八四十二歳の頃は兄九郎右衛門勝手も漸く取り直し、十石六斗餘の田地も耕す身上と成にけり。これ全く清八が助くる故ならんか。文化八未年の夏又烏目若干をたまふ。

(五) 福井村佐兵衛妻

上福井村佐兵衛といへる水吞百姓あり。妻は同國引土村嘉左右衛門といへる民の女にて名をつまと呼ぶ。夫佐兵衛は家貧しければ、十六七年前より、旅稼を志し、京都邊へ行き奉公なしける。つまは稚子を

育てつゝ夫の長き留守中艱難をなして姑を養ふ。夫よりも折々銀子を越して家内をみつぎける。かたぐいにて細き煙を立てける所後には夫も老母の安否を問ふ事をも忘れ、絶えて文の便さへもなく剩へ上方にてこと妻を持けるなど風聞ありければ、親類村人の耳に入り、それにては事すまじごと、佐兵衛をよび返すといへども歸り來らず。妻が親兄弟も亦これを聞て甚いかりつまを呼ていひけるは、夫と頼む佐兵衛かゝる不實の上は其方をとり戻すべし。佐兵衛と縁を切れよといふも尤なり。世の婦女夫こと妻にあひぬると聞も定めざることをだに妬心を生じて親の進をも待たざる者多し。然るに此婦は父母兄弟の言葉を肯ずして只姑を大切になし、子を育てつゝ日を送りける。其後村長等さびしく沙汰して佐兵衛弟の庄左右衛門といへる者を、京都へ上らし強く佐兵衛を連れ歸りけるといへども、元來水吞百姓の事なりければ長き留守のうち家内のくひ込多くして爲すべき便りもなく、煙も立てかねける故里人親しい相談して小頼母子を組立遣し漸くに月日を送りける。扱庄左右衛門も又旅稼に出けるのち間もなく佐兵衛難病發し、これ迄の借金の残る上に病氣に取ませ、其日さへ送り兼ねるを諸親類見かねて色々相談のうへ弟庄左右衛門をも呼戻し、諸道具賣拂ひ借銀の譯付をなし老母を弟庄左右衛門に養せ佐兵衛夫婦子供は別に小家を求めて住はせける所、つま女は甲斐々々しくも賃仕事などを爲して、夫の看病親切を盡すといへども佐兵衛後には癩病の體にて人交りも爲しがたく苦みけるゆる、つまが親許よりは今度こそ是非々々縁を切つて歸るべしと頻りに勸むといへども、つま女また得心の色なく答へけるは、一度嫁せし上は如何様の事出來るとも親許へ歸

るの道なし。たとひ親兄弟の義絶勘當を受くるとも今更夫のなんぎを見はなしかへらん事思ひもよらざる事と、一筋に思ひ切し返答なしかれば、其上強る言葉もなく止にけり。其のち夫婦の着いひ合せ此上は神佛のお蔭を以つて萬一にも快氣なさん事もあらんかと、兩人の子供は弟庄左右衛門へ預けおき、つま女旦那寺へ行捨往來を認め貰ひ、七年前亨和三亥年の卯月の頃旅の用意をどこのへ夫を連て村を旅立といへども夫の病にては途中果々しく歩行も出来かね、殊に路銀の儲へもあらざれば道々夫を休ませおきてつま女は報謝を乞ふて四國を志し、行程に同年六月やうく讃岐の國にいたる所、夫難病の上に又、膚疾をわずらひければつまの難儀いふ許なく、乞食同様の形勢となり。看病なしける心中思ひやられて哀れなり。され共兼々志す順禮の事故たふる、迄は介抱なし、連行んと覺悟を極め行所に同國坂本村といふ所にて、夫佐兵衛終に死したりける。女の身にて旅へ出るも誰を力となすべき頼みもなく、神佛の助もあらんと思ふ許りの力も落ちて共に死んと思ふならめ。去にても事すまざれば其所に葬り、すごとく故郷をさして歸りける。心の内さぞやるせなからんと書とるさへも猶哀れなりけり。程なく國に歸りて前のごとく姑へ事へて孝順を盡しける其行狀上聽に達し奉りければ、其孝貞を厚く賞し御發駕の節追手前へ召出し孝子等と共に白銀を賜ふは文化四卯年の事にして、同六巳年姑齡八十歳、つま四十九歳とかや、今にいたり孝養怠らずとて、同八未年五月二十四日御藏米十俵孝婦つまへ賜ひ、同十一年六月重臣内海某巡在の時再び鳥目一貫文をたまふ。世に孝子貞婦數多ありといへども、此婦田舎に育ち人道の教とてはつゆばかりも聞くこと

なふして四ツの徳の備えり。高貴の婦人さへも妬の心なきは稀なるに、その夫に捨られぬれども關はずこれ一ツ、親兄弟取かへさんと計るといへども一度人に嫁して變せざる操是二ツ、子を捨て頼みなき夫につかふるに死を以つてす是三ツ、夫死しては又姑に事ふる是四ツ、其事實一ツとして聖賢の教にもる、事なし。世の婦人其一ツあるをも尊びしたふべし。いはんや四ツ乍らかぬるをや。夫若き婦に物いへるを見てさへ妬み、又は親々の問ふにもまち得ず夫をすて、舅姑に事へあしくやもめを立ざるは又一ツありても人いやしみ、惡むべきを今その二ツ三ツ合せ守れるつま女はかの比賣鑑にのする女宗が類ならんか。唐土に鮑女宗といひけるは宋の鮑蘇が妻なり。其姑につたしみてよく事へたり。鮑蘇は出て衛の國にみやづかゑし既に三年に成ければ、其所にも妻をとりて住けり。女宗さは聞しかどつゆねためる色もなく、姑に孝なる事いとつゝまやかにしてゆき、の便りには、鮑蘇に音づれなしかの妻にも物おくりて情いと淺からずなしけるに大よめなりし者女宗をそのかし心うつろひたる人を頼みて甲斐あるべきかは今は去ざらめや。いつを限りになど支へければ女宗こたへて曰く、女は一度の契りをかへず、夫死しても亦嫁する事なし。たゞ衣食をいとなみて夫につかへ、舅姑を養ふことをつとめとす。心筋なるを貞といふ。よく人にしたがふを順といふ。男の愛を恣にするばかりよき事ともいはんや。其男の女をすゑおく事天子は十二人諸侯は九人、郷太夫は三人、士は二人なり。我ぬしは士なれば、二人は有べきぞや、其上女の人にしてらるゝ道七ツあり。男をすてる義は一ツもなし。とりわけ物ねたみこそ七ツのどがの始めとはする事なり。君は

年まさりぬれば嫁たるものゝ家に住む作法こそ吾には示し教へらるべきに返つて人にすてらるべき業せよと導かせたまふは何の爲にか侍るとてついに随はず、彌々姑におこたりなく事へけり。宋の君聞し召されて深く愛おぼしければ世の女のたふとぶべき者なりとて、名を女宗と號せられその里をしるしてあらはさせ給へり。

(三) 紺屋町嘉吉

紺屋町助右衛門といふ者の子嘉吉は若き頃より兩親の言葉に背く事なし。父酒を好むといへども家貧にして酒を求むる錢なき事を悲しみ外にさせる職もあらざれば、田舎にては夜番とて町内の者家竝に一夜づゝ番をなして時をふれ、火の元に心を付る法なりければ、富人は下僕を出し、又は雇人をなしてこれをつとむ。嘉吉も父の夜番に當る夜は猶更なり。餘人の雇人をする時は乞ひて是をつとめて賃を得て酒を求め父にすゝむ。父これを憐み當り前の外に夜番をつとむる事を止て家にふさしむ。嘉吉また其旨にしたがふといへども彼酒求むる錢なきが故に、日數たつにしたがひ復夜番をつとめて酒をすゝめける。これ父の言付けにそむくに似たれども、父を養ふの大なるに如ざるが故ならめ。弟妹に友愛尤厚し。此年町役人訴出るにまかせ、文化四卯年御發駕の節追手前に召出され、孝子等と共に白銀をたまひける。時は嘉吉十八歳ばかりと聞えし。其後名を嘉八と改む、同八未とし五月鳥目一貫文をたまふ。

(三) 地頭村幸七

地頭村の民嘉左右衛門といへる者子二人あり。兄を彌一郎弟を幸七といへり。嘉左右衛門隱居して家事を長子彌一郎にまかせ、材木薪等の商ひをなさしめ、田地十九石三斗餘を持てり。すべて農業は幸七引受耕し兄弟共によく働けり。幸七農事を勵む事村中にも人の目に立つほどの精力を盡し、取分け兩親兄へつかへて孝弟なり。常に親兄の氣にさからふ事なく能守り、就中母は幸七幼年の頃より難病をわづらひ手足自由ならざれば、夜中の兩便度毎に幸七連行けり。別して夜長の時節には臥して後三四度もかはやへ母の行るに幸七をあはれみ起さるも幸七一度も目のさめざる事なく晨には食をくゝめて、後己食しいか成農事忙しき作場に心せく時といへども母に食をくゝめざれば決して己食する事なし。母煙草をこのめども手の叶はざれば幸七常に煙管を持てのませ、又退屈の體を見ればやがて抱起し。疾痛^{かゆき}痒なきやと問ひいたみ所あれば蒲團を延し、又詰物をなし、かゆき所はかきて安からしめぬ。或は四方山の話しを爲して氣を慰め年月永ことなるを更にうむ様子もなく健氣の女手にも勝りし看病行き届きぬ。又見物事なども脊負行先にては抱くか又は何ぞに寄りかゝりて安樂なる様に心を付時によりては作場へも負行けり。おのれ河守などへ詣る事あらば其道筋より先にての事まで具さにかたり聞しめける。用事なければ近隣へだに行事なく暇さへあれば、母の側を離れずして事へ永き年月怠らざりしを里人舉つて賞し終に上聽に達し文化

二丑年孝子等と共に御發駕の節追手前へ召し出され、御役所において白銀を賜ひけり。或時役人試に幸七に問ふて曰く、汝作場へ急ぐ時だも母より先へ食せず。又見物事或は作場へつれ行事いかなる心得にて左はなすや。幸七畏ていへるは、食事も母と一刻に食せざれば甘からず。何事も母に見せざれば面白からずと答へけり。さて二十年來も母の病氣に孝道を盡しける故に父母兄のよろこび近隣の者賞するは愚かにて近村の人舉つて感賞し、子をもたば幸七が如くにてこそ孝子ともいひつべしと子や弟等をいましめて孝七を見ならへとさとしける者多しとなり。文化六巳年父六十六歳、母六十四歳、幸七卅二歳なり。さて猶も孝弟怠らざりければ、文化八未とし五月廿九日再び賞して白銀あまたたまひける。其近村の龜鑑ともなしぬることあだやおろそかならざる事を知るべし。

(三) 下漆原村與右衛門妻

下漆村といふ所に一石四斗の田地を耕す百姓嘉平次といふ者の女千代は、父母夫に事へて孝貞なり。嘉平次男子あらざれば、上漆村の内に長谷村といふ枝村に住む嘉左右衛門子與右衛門といふ者を婿となして、千代に娶せけるなり。母は二年前より病氣づき、ね起さへも自由ならず、夫與右衛門は三年ほどの病氣殊に稚子二人あり。手の入らざるものとは父のみにて、兩人の病者の看病稚子を育るいとまあれば千代耕作をなし、或は山へ行薪をこり、さまざまと働きて五人の着巻一人にて働きつゝ親夫の心に逆ふ事な

も孝弟怠らざりければ、文化八未とし五月廿九日再び賞して白銀あまたたまひける。其近村の龜鑑ともなしぬることあだやおろそかならざる事を知るべし。

(三) 下漆原村與右衛門妻

下漆村といふ所に一石四斗の田地を耕す百姓嘉平次といふ者の女千代は、父母夫に事へて孝貞なり。嘉平次男子あらざれば、上漆村の内に長谷村といふ枝村に住む嘉左右衛門子與右衛門といふ者を婿となして、千代に娶せけるなり。母は二年前より病氣づき、ね起さへも自由ならず、夫與右衛門は三年ほどの病氣殊に稚子二人あり。手の入らざるものとは父のみにて、兩人の病者の看病稚子を育るいとまあれば千代耕作をなし、或は山へ行薪をこり、さまざまと働きて五人の着巻一人にて働きつゝ親夫の心に逆ふ事な



く、あまつさへ夫の疝氣いたみけるを介抱なしぬるといへども、母按摩せよといへば又母を撫で其閑には子に乳をのませ、また少しも間あれば父をも按摩すること常なり。かく忙しき中なりければ父は是を不便に思ひて、我身は打捨るにも及ばざるよしをいへども、千代その遠慮なる事を察して何も心支へし給ふ事侍らすといひて更に厭ふ體もなく事へけり。夜は病人の介抱より老父子供をねさしめ、ね入をまちて翌日の食事の營みをなして誠に一夜も安く寝る事なく、長き年月孝養怠らざりけれども母の病次第に重り文化三寅年六十八歳にて身まかりける。其後は父の介抱猶更行届き、夫も少し快氣に向へばいよく父に事へて至れり。里人大に感じ高聴に達し奉れば文化六巳年その孝貞を賞して御發駕の節追手前へ召出され、御役所において孝子らと共に白銀を賜ひける。頃は千代廿七歳の時にして父七十一歳なり。同八未年五月廿四日その孝の怠らざるを再賞し給ふて鳥目五貫文下されけり。

(三) 久田美村太三郎

此村に清兵衛といふ者の子太三郎といへるものは母に事へて孝なり。父は天明六七年のころ身まかりぬれども、男女の子四人を残せり。男子は養子女子は嫁して此太三郎一家にあり、愚鈍にして人竝の應對稼とても出来ざる性質なり。元より無慾によつて少ばかり持傳へたる田地にも離れ甚だ貧にくらすといへ共邪なる事は勿論母の言葉に背くことなし。中にも里人の見受し一事をいはゞ毎朝晨に起出ては二

丁ばかり隔たりし所より水を汲みて茶を煎じ、食を調へてのち母を起して食をすゝめ、終らざれば己食する事なし、食し終りて山へ行薪を樵り蓬或は糶ともなるべき物をとり來りて賣代なし、又は村人に雇はれ少しの價を得て、母の養ひの助となす。冬の夜など母夜業をなせば側にありて火を焚て母をして温かならしめ、伽をなし母ねてのち寝ぬ。隔日ぐらゐには母の髪をゆひ、或は御城下の市中へ行て歸る時は必わづかなる品にても調へ持かへりて土産とす。もし錢乏しき時は己が中食にもち行し焼飯を残しもち歸りて母に奉る、是土産の心ならんか。母兄弟の子の方へ行て一夜も泊る事あれば翌朝疾くむかひに行て連歸る事などその母をしたふ事五六歳の童子に等し、只ひたすら母の事より外に思ふ事なき様にて大切につかふる志士たる人も及ばざる所あらん。是等君聽に達し文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され、御役所にて孝子等と共に白銀を賜ふ。其時太三郎四十八歳母八十四歳の時なり。同八未とし五月その孝の猶怠らざるを賞し給ふて又母一生涯に麥二俵づゝを賜ふと聞えし。

子等と共に白銀を賜ふ。其時太三郎四十八歳母八十四歳の時なり。同八未とし五月その孝の猶怠らざるを賞し給ふて又母一生涯に麥二俵づゝを賜ふと聞えし。

田邊孝子傳 卷之四 畢



卷之五

(四) 大川村清七妻

それ大川大明神は保命神なり。加佐郡大川に鎮座し給ふ事は人皇廿四代顯宗天皇の御時にして、由良海上より此所へ移り給ひしと言傳へり。さて狼荒る時はこの社内の駒犬を神に先供持かへり田畑におくどきは狼鹿のある事止むといひつたへ他國よりは札を乞ふて歸るもあり。近國まで其神徳を仰ぎけり。此神鎮座ありしによつて大川村といへるとかや。此村に住める清七といへる農民のつまとめ女は同國同郡下東村の民源右衛門といふものゝ女なり。舅を五良兵衛といひ、姑は十ヶ年來眼病を病ひて七八年前より盲目と成、殊に舅姑ともに年老田地とても漸く九升七合ほどばかりの者にて、必然の貧推して知るべし。夫清七は京都邊を稼ぎ、又は御家中へ奉公なせば舅姑はとめ引受けて事ふ。晝は村内にて働き、夜は舅姑を按摩し萬事行とゞきて介抱なす。夫婦かくのごとく稼ぐといへども母の長病にて貧苦重り、未進借金彌まし、今は兩親の養ひも乏しくとめ殊に懷妊と成ければ、此上に子供出生せば彌々孝養の盡なん事必定なりと夫婦ひそかに議して墮胎する所に幸なるかな、身もつゝがなく其上乳汁も出ければ兩親へねがひ、文化二丑とし御城下へ乳母奉公に出、その給銀を以つて舅姑を養ひける程の婦なりければ又主人の氣に入り

殊に子の愛に引かれてさま／＼心をつけ何くれと貰ひものあれば、とめその賜物を姑へ送り、又折ふし少しの間を乞ふて舅姑を看て介抱なす。其志の厚きを舅姑常に悦び、里人來る時は其行狀を告げ贈る所の品を見せて悦ぶ事限りなかりしとかや。凡乳母奉公をするもの何國の浦々にても竝々の奉公人とは事變り、給銀も多く定めの外に貰物ありければ、彼過分の未進借金も半すまして少しは貧苦にも堪るゆる、猶々舅姑へもよく事へける所姑文化辰とし七十四歳にて病死す。其能事へける事ども里人官に訴出高聽に達しければ、同六巳年御褒美あり。御發駕の節追手前へ召出され御役所にて孝子等と共に白銀を賜ふ。此時舅七十四歳、とめ卅二歳になりける。文化八未年五月廿四日再鳥目三貫文を賜ふ。世はおしなべて親の許さざる不義いたづらに身を持って妊身と成ては墮胎して愧る色なく人も怪しまざる者多し。國制嚴重ならずんば有べからず。とめ墮胎するといへ共是は孝養のためにして唐土郭居が類なるべし。況んや小民の事強て咎むべき事かは邦君の感賞にあづかりしも又宜ならずや。

(四) 女布村久左右衛門妻

女布村の久左右衛門といへる者は屋敷高やう／＼八升ばかりの地面にして貧民なり。父は安永八九年の頃死けり。妻は同國城屋村に住む五良左右衛門といふ民の娘にして、名をいしと呼び、篤實溫和にして頗る禮讓ある婦なり。夫久左右衛門は母ありといへども常に旅の稼ぎを専らとなして家にある事少し、孝婦い

しは人の下作をなして世渡りの便とす。此家に嫁し來りし頃初二三年は夫も稼儲へし銀子ももちて家に歸りけり。後には折々歸るといへども一錢も持歸る事なく、いよ／＼貧しかりけるゆる、いしは人に雇はれ又は手に當り次第に稼ぐといへども姑子供ひの養ひにも宛らず、女手の果々しくもあらざれば次第に未進借銀は嵩りて居屋しきを賣拂ひ、其上人々をたのみて小頼母子を企て、其助を以つて漸く借銀の譯付くるといへども、猶其日々々のくらしにも支へければ、此まゝにては行末孝養の謀盡なん事を思ひ、寛政四年の頃御家中へ出乳母奉公をなす事三年なり。其内に乳汁も揚りければ奉公を止め家に歸り、又丹波の國へ行て奉公を爲し、其給銀残らず家へ送り姑子供養育の方便となす事又五ヶ年なり。姑もおひ／＼年老夫は他國に居て歸らざれば、いし止事を得ずして主人に暇を乞ふ。主人も永く律義につとめし事を歡びて給金の外に家普請料として米三石をつかはしける。いしは其銀子をもつて家の破れを補ひ、夫よりは賃仕事を業として姑に事へ、子を守立てける所享和酉年夫旅にて病付て歸來る。其不孝不實なる夫をもうらむる心なく晝夜の看病おこたらず、姑はいまだ手足も達者なりけれども毎朝手水の湯を盥にくみて與へ、寢起に心を配り下賤にまれなる禮儀ありて常に姑の前を通る事なし。止む事を得ずしてたまに通る時は必會釋をなして通りける。夫の病も次第に癒え男子も成長なせば、奉公に出し姑夫の養の助けとなしけり。姑夫もその誠實に感じ昔の貧苦を忘れ、今の安樂にくらすもこれ全くいしが力なりと里人に告て歡びける。文化五年にいたり、夫終に病死して後はいよ／＼しうとめに大切に事へけり。その孝貞を里人感せざる者なし。此

事文化六巳年封君へ達しければ其孝順を賞して御發駕の節追手前へ召出され孝子等と共に御役所に於いて白銀を賜ふ。時はいし五十三歳なり、文化八年ふたゞび賞して白銀二枚を賜ふ。孔子といへる御人のたまへるに、今の孝ある者は能養ふ者をいふ。犬馬にいたる迄皆よく養ふ事あり。たゞ敬はずんば禽獸と何ぞ分たんと仰られし如く、いし女姑に事ふるに禮ありて怠らす。その夫に疎まるれ共怨まず、其義を守つて弛まざる操御褒美あるも宜なり。いやしき山樵も知らず習はずして自ら聖人のをしへに叶へり。今時書物をよみ口に義理をいひて父母に孝敬足らざるはふかく恥ざるべけんや。

(三) 丸田村定右衛門

丸田村定右衛門母に事へて孝なり。一石の田地を持ち、父を助右衛門といひて寛政九巳年身まかりぬ。母は十六年已來中風を病ひて手足とも叶はざれば、定右衛門耕作の外には母の傍を離るゝ事なく、母の心に背かず、家貧しくて夜具とてもあらざれば襤褸やうのものを取集めて着せ、寒夜は一緒に臥て身をもつて温め、物見遊山にはかならず脊負行て氣をなぐさめ孝養を盡しけり。妻あり既に一子をまうくといへども母への事へ行届かざれば度々教諭すといへども、己が留守中には届かざる事ありければ、五年前三歳の小兒を残しおき離別す。そのち再縁も求めず、只母の看病の片手に小兒を育て、閑あれば耕作をなし貧苦をしのぎ孝養する事餘人より見る時はよくも堪忍びつとめけるものかなと感賞せざる者もなし。定右衛

門四十二歳の時文化六巳年その行狀上へ聽へ奉り則御發駕の節追手前へ召出され御賞美あつて、孝子等と共に御役所において白銀を賜ひ、同八未年の五月又鳥目三貫匁を下され其孝を勵ましたまふ。凡孝は妻子に衰ふといふ古語あれども定右衛門が行狀賞すべし。

(三) 富室村幾五郎

この幾五郎母に仕へて至孝なり。畢竟水呑百姓にて家貧し、父を武右衛門といひて十ヶ年前寛政八年の頃身まかり獨母と居たりしが、壯年の頃よりてんかんの類の病ありしに十三年前巳年より症變じて亂心し農業の勤はなほ更なり。譯もなき事のみいひ歩行つゝ人事を覺ざる體なり。されども母の言葉に背く事露ばかりもなし。正體もなき事のみ聲高にのたしり、悪業なしある時だにも母の叱るといへば速にやめ又母山へ連行薪をこり來るべしといひ付ければ、則ちこり來るを見れば、氣のふれし様にもあらず。母御城下の町などへ行ば遠き路まで出むかへ母の顔を見るや否母のもてる荷を己肩げもちて其勞を助け、川あれば脊負て渡し連歸りけり。四ヶ年前文化三寅年母病にふしける時、氣ちがひの幾五郎のみにては看病も届まじと近所の者ども心をつけ世話をなし助けんと行て見れば、案の外にて幾五郎側に付添ひるて兩便の世話も一通りならず心を用ひ、凡て看病の屈さぬる事平人に勝れり。もとより貧窮なりければ、母ふす時は食物の手當もあらざれば、米を貰ひて煮ぬきとなし、母にすゝめ醫者を頼み藥を貰ひ來りて煎じるまでも

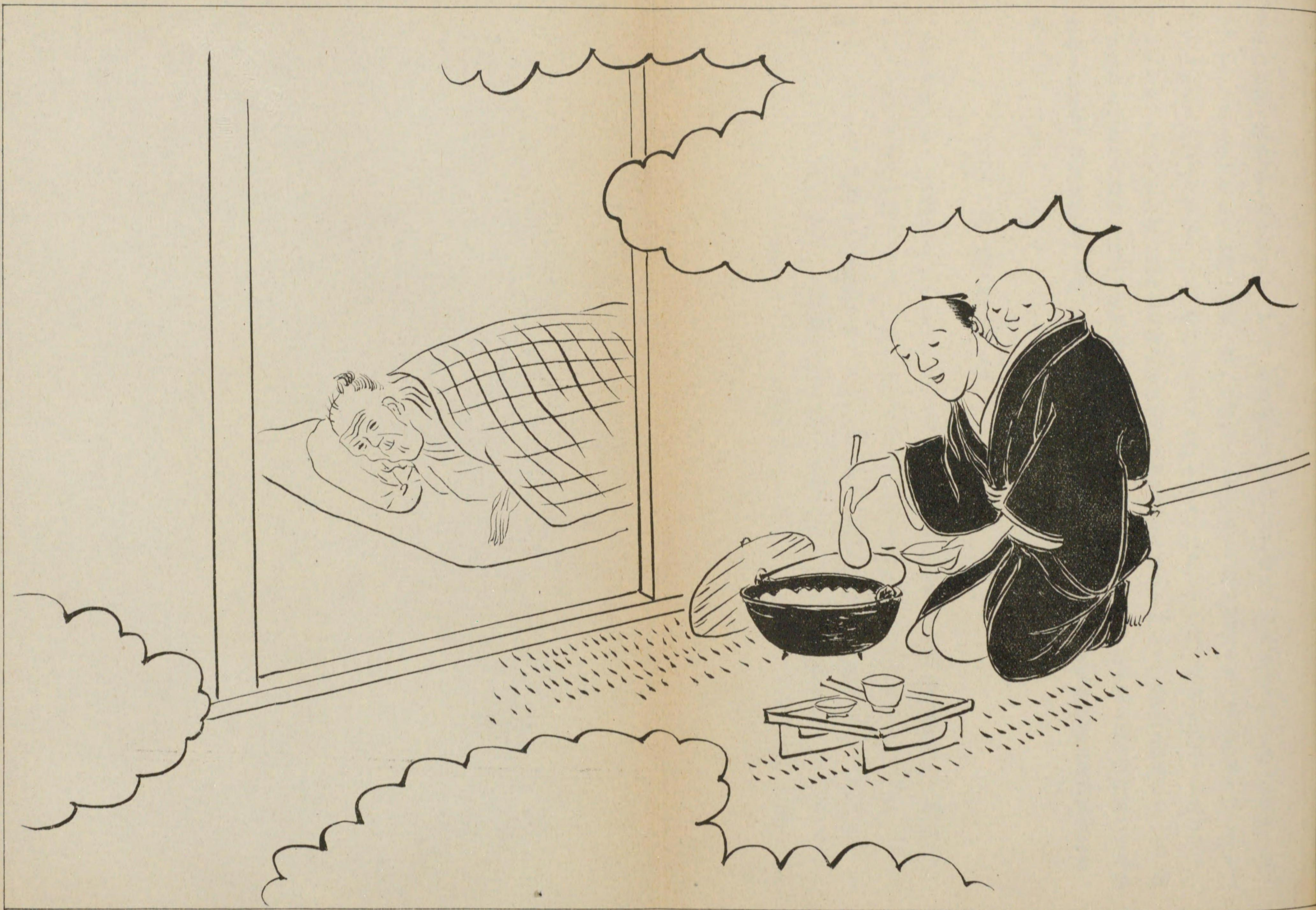
一人して行届看病なす事更に亂心者の所作にあらず。天性のなす所と里人擧つて感涙を流し賞歎せざる者なし。扱又幾五郎亂心の上にも一途に母の看病のみに心あつて己が食を忘れ空腹になりても食を求むる事もなく、其時は猶更顔色もあしく常ならざれば親類のもの心を付て幾五郎を呼びて食を與ふといへども、決して他にては食を受けず、ゆるに紙に包みし品を授くる時は殊の外悦び持歸りて母に進めける至孝己が病苦を忘れていゆるに似たり。これ又天の感ずる所ならんか。すべて彼が行狀行末ははかられざれども今の形勢感ずるのあまり君聽に達し奉り、文化六年巳五月御發駕の節追手前に召出され孝子等とともに白銀を下されしは幾五郎四十二歳の時にして同八未年夏尙賞し給ふて生涯大麥二俵づゝを賜ひけり。性本善なりといへ共氣の狂ひよりさまゝの變あり、病また氣の變なる事幾五郎を以つて知るべし。

(四) 河原村彌助

河原村の民忠右衛門子に彌助といふものあり。五斗ほどの田地を持し小百姓にて元來貧しければ奉公をなして兩親を養ふ。たとへば遠方につとむるといへども、晝は休の間には半日の中にも二三度は親をかへりみ、夜はかへつて事ふることを怠らす。極暑の節は誰とても暮に及び業を仕舞行水をなし終れば晝の草臥れにて少し涼みてぬるなるに、彌助は業をわり食し終るや否や其まゝ己が家に歸り、兩親に付そひ居て蚊を拂ひ立冬は火を焚て寒風をしのがせ、萬事に心を用ひ事ふるを村人感じ、且つ五十歳に及び無妻なる

(四) 河原村 彌助

河原村の民忠右衛門子に彌助といふものあり。五斗ほどの田地を持し小百姓にて元來貧しければ奉公をなして兩親を養ふ。たどへば遠方につとむるといへども、晝は休の間には半日の中にも二三度は親をかへりみ、夜はかへつて事ふることを怠らす。極暑の節は誰とても暮に及び業を仕舞行水をなし終れば晝の草臥れて少し涼みてねるなるに、彌助は業をわり食し終るや否や其まゝ己が家に歸り、兩親に付そひ居て蚊を拂ひ玄冬は火を焚て寒風をしのがせ、萬事に心を用ひ事ふるを村人感じ、且つ五十歳に及び無妻なる



を憐れみ村人等新迎を進むるといへども、彌助承知せずしていふ様は、世間のあり様を見るに家貧しき中へ妻をとり其上子出生しては終には親へ事への疎略になる者多し。我が兩親ともに年老餘命も少しこの上になんぎをさせなば不孝なるべし。皆様のおすゝめにもるゝにはあらざれ共、兩親を見送りし上は養子にでもするか、又は六十六部に出るとも跡の事は兄弟共如何様とも計ひくれんとて決して肯はざりけり。彼が行狀つまびらかに訴出ければ、文化六巳年御發駕の節追手前に召出され、孝子等と共に御役所にて白銀をたまひける。其年父齡七十七歳、母七十三歳、彌助五十二歳のときなり。同八末年また鳥目五貫文をたまふ。

(望) 河原村傳次

この傳次といへるは磯平といひしものゝ子なり、磯平は六七年前身まかりぬる後は傳次八斗の田面もつといへども、出水にて砂入りとなり、渡世殆んどむつかしかりしかば母には妹を付おきて己は御中間奉公に出て勤めける。御城下より河原村までは道法二里ばかりを隔れば度々母を見舞に行事ならざれども、妹の方へ文にて母の安否をとひ、また母を大切に事へよと教へ示し菓子など送る事度々なり。折節には頭へ告て母の見舞にかへることありといへども、近隣だに行くことなく、母に附添ひ居て介抱なし翌朝早くやしきへ歸りける。近處の者その各々が方へおとづる事なきをいはずして却つて彼が志を稱し訴出れば、文

化六巳年御發駕の節追手前へ召出され孝子等と共に白銀を賜ふ。此時母齡六十五歳、傳次卅六歳なり。文化八未年夏又鳥目一貫文をたまふ。妹の行狀もあらんが子聞かず。

(四) 河原村傳七

この傳七は水呑百姓にて貧し。され共よく母に仕へけり。父を平次郎といひて享和元酉年歳八十三歳にて死けり。母三ヶ年前より病に臥しける所其日々々の食さへもあらざれば様々と心をくだき母の病かりそめなるころも日々の食物をこしらへ置て本家の次兵衛といふもの、女房にたのみて母に食さし貰ひ、己は日雇に出で稼ぎける。その雇れ先にて少しも食し易き菜ある時は、持歸りて母に食さしめたき由をいひて箸をも付けず、荒きものを乞ふて己は食し其菜を持かへりて母にすゝむ。夜は家にかへり母の側を離れず介抱なす。斯貧にして夏至れども蚊帳もあらねば蓬なんごをいふし夜によりては蚊を追ふて眠る事なし。冬の日に成ても夜具は不自由なりければ、木を拾ふて焚火にあたらし、極寒の夜は猶更夜もすがら焚火にて凌ぎけり。憐むべし、實に乞食同様の身の上にて心苦することを里人賞すれば、傳七答へて曰、親獨り子一人なれば如何様にかんなんすとても介抱なさで叶はじとて、苦勞と思ふ體も見えざりしに、母二ヶ年の病にて死しける。其後高聽に達し文化六巳年御發駕の節追手前に召出され、孝子等と共に褒美として白銀をたまふ。時は傳七卅一歳なり。同八未年五月また鳥目三貫文たまふと聞きけり。

(四) 上安久村五左右衛門夫婦

上安久村の水呑百姓清助といふ者の子五左右衛門は柔弱なる生質ことに貧乏なり。されども夫婦とも能く父母に事へて孝なり。妻は同國田井村の藤治郎といふもの、女にして名を政と稱す。五左右衛門へ嫁てよりのち病身に成ぬれ共又舅姑に仕へてよし。扱五左右衛門兩親年老家はいよく貧しく晝は日傭を稼ぎて家内五人の食餌となす。子あり初生より乳汁出ざれば甘物をもつて育てけり。父酒を嗜むといへどもかゝる貧故日々進る事能はざれども、夜は草履草鞋を造りて賣代なし、其價をもつて折々酒をととのふまで力を盡して漸その日を送りける。己も酒を好めば他に酒ふるまはるゝ事あれば初献は人の志を受け二盃目はのますして必ず持歸りて父に進む。其餘食物を得るとも又しかり。兩親は夫婦の者の心を盡し稼ぐを見て甚歡び且つ憂ひ我々永生して悴夫婦に世話をかくる事のなきかくる由を里人に語るを夫婦のもの聞いて悲しみさまんいひ慰めて親切に事へける。兩親次第に老て猶更寒夜にはたびく小用に行けるを夫婦のもの互に手をひきてつれ行きぬ。時には終夜ねもやらで介抱なしける事も度々なり。少し暇ある時は晝夜を分たす稼といへども一旦は煙さへ立かねるばかり艱難に及びぬれ共今にては一子も漸く六歳といふまで育ぬれば少しは艱難にもこたへけり。其行狀高聽に達しければ文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され夫婦を賞し孝子等と共に白銀をたまふ。此時齡九十歳母八十歳五左右衛門四十歳妻のまさ卅四歳な

りける。同八未年五月夫婦とも其怠らざるを再び賞して鳥目二貫文女房まさへも鳥目若干下されけるとなり。

(四) 魚屋町清左右衛門女

この魚屋町に住む清左右衛門は家至つて貧なり。娘をしげといひて律義なる生質にて常に兩親の氣に逆ふ事なく、弟太七といひしは痲病を病みて終に死しける所兩親大いに歎き悲しみけるをさま／＼云なくさめ事へ其暇には紡績を業とし、又前方奉公なせし主家へ出入して雇人となり、其賃を取て兩親を養ふ。母は亨和三亥ごしの春より病つきぬれば貧窮の中にもよく看病なし、醫を迎へ力の及ぶ限りは療治を加へ介抱なすといへども同年四月七十一歳にて死しける。後は老父の心を慰めて彌々大切に事へ雇れ先の用事は格別夜中他へ出る事なく、別して風雨の夜は父の側をはなれず。平生とても萬一變義あらんも計りがたしと常に三尺帯の類を己が枕元に置いてふしぬ。これ變あらん時は脊負出んの心がけなり。父次第に年老寒夜に至れば小水の近けれど、其度ごとに目の覺めざる事なく、常とても介抱し連行きぬ。或は雇れ先にて己が膳に付出る所の菜は一箸も食せずして三度とも持かへりて必父に進む。父難煮などを喰ふときは若しや喉につまることもあらんと猶更氣づかひて食し終る迄口を守り側を去ることなく心をくばりて事ふ。女の身一つにて萬事不都合なるらんとて心易きものより婿を入れんことを勸む、しげ答へて思召の

程忝くははべれ共、婿を入るゝ共其人の心得によりては却て父へ不孝に成なん、此義は先づ見合給はるべし。末々は養子を貰ひわが身一生は人に連合はざる存念なりと答へり。さて年の始吉凶に付町内のつとめをば介抱のひまを見合父の代と稱しつとめける。或時家主より隣家と一ツ家に普請をなさんと思へば外々へ家替せよといふ。然れ共父老年に及び年頃住なれし町内を離るゝ事を難儀にいひけるゆへ、しげは同町の内にて借家せんとたづね求むれども空家なく當惑せし事を家主つたへ聞き不便に思ひ清左右衛門存生の間は彼家普請を延しけるとかや。是しげが孝心の感動する所ならんか。殊に身持もよき者なりと町役人訴出るにまかせ、文化二丑ごし高聽に達し御發駕の節追手前へ召出され孝子等と共に白銀を給ふ。同年父齡八十二歳にて死す。しげ三十九歳の時なり。父死して後しげ他町へ移るといへども家主先主人へも替らず出入して舊恩を忘れざりけり。同八未年五月また鳥目五貫文を賜ふとかや。彼家主聞き傳へ普請を延せしも又奇特といふべし。

(四) 平野屋町重太郎

平野屋町重太郎が父庄兵衛といひしは重太郎いとけなき時身まかりければ獨母と住ける。家貧しくことに母の教もあらざる賤民なるに天性柔和にしてよく母に事ふ。出入する殊に必ず告その告るに只一通り夫々の所へ行今歸りしと告るにあらず。いつとても手を突き恭敬しくして禮あり。又世の惡風に染されば博

奕など楽しむことなく近隣の交りむつまじく丁寧にして若きものに似合ざる風儀能ものなる事を町役人見出し訴出るにまかせ、文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され孝子等と共に白銀を賜ふて賞せらる。其時重太郎廿二歳と聞えし、同八未年夏また鳥目を賜ひり。

(五〇) 魚屋町儀左右衛門妻

御城下魚屋町に住み桶屋を業とする儀左右衛門といふ者あり。妻はしげといひて丹波町に住む藤左右衛門が娘なり。しげ柔和な生質にて舅姑の心に逆ふ事なくよく仕ふる所に舅善左右衛門は七八年前より中風を病ひけるに夫儀左右衛門貧しければ日々近在へ桶の輪がへに出ればしげは舅の介抱を引うけ心を配り事ふ。夜更たりとも病人足ほめきてね兼ね苦しむ時は色々とすしき様になして眠を催ふさしめ、或は近隣へ行かんといへば手をひき又は脊負行て氣を慰め、己は終夜寝もやらず介抱する事數年怠らざりけるを町役人訴出にまかせ、文化六巳年その奇特の事へ方を賞し御發駕の節追手前に召出れ孝子等と共に白銀をたまふ。是しげ廿七歳の時にして後同八未年にも又鳥目をたまひけり。

(五一) 紺屋町喜太郎

紺屋町といへる所に住む惣兵衛といへる者二男一女あり。兄喜太郎幼少より兩親の言葉に背く事なく殊に家貧しく父は覺えたる家職もなければ常に駄賃持をなして稼ぎける所に、母五年まへ丑年の春よりふと病に臥す。貧なれば是非なく稼に出る。此時喜太郎やうやく十二歳なり。然れ共幼少の弟妹を將食事の營より母の介抱を爲ぬる體見るも憐れなり。幼年といへども其介抱なす所に早くも三年め卯ごしの秋より母の病次第に重りければ喜太郎晝夜をわかたすよく看病なすといへども、母翌年辰正月終に病死なしけり。其三ヶ年の間日夜の看病ことに神妙にして行届けり。行狀御上へ聽え、文化六巳年御發駕の節追手前へ召出され、其年幼少にして孝をなせしを賞し、孝子等と共に白銀を下され、同八未年の五月廿四日再び鳥目二貫文たまふて其孝を怠る事なからしむ。

(五二) 西吉原町長七

此町に漁を業として世を渡る惣兵衛といふ者實子あらざれば、東吉原町の兵助といふ者の子を當歳より養子として養育す。これ則ち長七なり。惣兵衛は漁師をなすほどの賤民にて何の教もなし。しかるに長七幼より養父母のいひ付に背かず。長となるに及んでいよく實體にして養父病ひし時も其業を休み家に在つて大切に事へ看病なす事並々の者の實父母に事ふるよりも勝れり。家に在て孝なれば兄弟に友あり、外に出ては親類にむつまじく同町の者へ親しみければ賞せざるものなし。文化六巳年町役の者訴出るにまかせ御發駕の節追手前に召出され孝子等と共に白銀を賜けるは長七廿九歳の時にして、同未年鳥目五百文を

賜る。今は惣兵衛と名を改めけるとなり。

(五) 布敷村清三郎

此村なる定右衛門妻は同村某の娘にして子なし、よつて同國宮津御領の内與謝郡栗田脇村といふ所の百姓次兵衛が子清三郎十二歳の時定右衛門養子となる。此養母の姉にして清三郎がためには叔母の養となりしなり。其後定右衛門實子出生しけり。此清三郎平生律義柔和なる者にして物事丁寧なる事を好む生質なりける故養父母の事へは猶更なり。他人の交りも亦よし。よつて里の童とけんくわ口論なす事もなく能交りけり。養母ふと病に臥しければ清三郎甚だ憂ひ、同村の者に語つて曰く、弟も次第に成長なす上は我身は養子の事にて有ても無てもよき者なりと思へども兩親のうち萬一異變あらば如何せんやといひし事もありけり。其のち文化六巳年清三郎廿四歳の時養母の病次第に重り既に十死一生に及びぬる。夜は清三郎猶更悲しみの顔色見るも憐れなりけり。かゝる所に清三郎いづ方へ行しや、家にあらざれども病人の取込にて誰も心付ざりける。爰に又同國加佐郡のうち塚谷村に仁壽寺といへる觀音を安座せし小庵あり、水清といへり。此所へは布敷村より一里ばかりを隔てり。此親音に惱む人あるを寺僧村人怪しみ行て見るに、年若き稚子の鉈をもつて左の腕を中ば打切りし體なり。皆々驚き介抱なし能々見るに布敷村の清三郎といふ者なりといふ人ありて其故を問ふに、養母の病危し、よつて觀音へ養母の命乞のためかくの仕合なりと答ふ。

然るに養家へ知らず其大病人の中なりとて、態々養母の親許へ知らせければ、人々迎に來り連かへり外科をまねき疵の療治を加へてかなりにいゆといへども、其手自由は叶はざりけり。或日里人のいふ父母の大切に及ぶ時神佛へ祈誓をかけゝるは理なり。され共養母の大切の夜といひ傍にあつて看病も爲べきに、未明に出て命をなげうち腕を切りて人々へ世話をかけ却つて不孝にもあたるべきかといふ。清三郎きゝてされば兼々いひし通り我身は有ても無てもよし、只兩親のうちに變あらばいかゞせんや。何卒養母の病今一度快氣させたくて一心に思ひつめしのみにて左程迄前後の辨へなし。身にかへ祈誓せし事よと答へける。其のち養母終に病死せり。此一條文化六年の事にして程へて高聽に達し、同八末年五月廿四日其孝志を賞し鳥目五貫文たまはりける。其餘の詳かなる行狀は予未だきかず。

(五) 桑飼上村善五郎妻

桑飼上村長右衛門女さんといへる者は母に孝なり。父長右衛門天明五巳年死て後は母子わづか九斗餘の田地によつて世を渡る貧女なり。九歳の時より奉公をつとめ母を養ふ。寛政八辰の春善五郎といふ者を入婿となし、夫婦又奉公に出て稼ぎける所母同年十月のころより病發り手足ひきつけつひに手足の自由ならざれば、さんは看病の爲に奉公を引て家に歸り、晝は近所へ雇れ先方業の暇には家に歸り母の食事など介抱して又主家の業をつとめ黄昏にいたりて歸り看病を爲す。家至つて貧しき故に終夜有明をともすとも古

き衣類などを行燈にうちかけ置て油の費を省き、夏は母の床の許へたらひを持行て浴させ、冬は焚落又は近所にて炭を貰ひてこたつに埋みて寒氣を凌がせ三人の小兒を抱乍ら漸く取つゞき、介抱のかなんいふばかりなし。母病付てより横ねもなさで看病なす事すべて九ヶ年の間三度の食事を初め、兩便の世話まで残る所なくあまつさへ小兒も一人は失ひぬれども其孝養怠らず、其ゆるにや母の病少しいゆるを得たり。これ孝の致す所ならんかと里人賞しあへり。終に訴出封君へ達し奉り、文化二丑年御發駕の節追手前に召出しその孝を賞し、孝子等と共に白銀を賜はる。この時さん卅歳なり。同四寅年母病死なしける後は、何ぞ外より貰ふ事あればまづ母の靈前へ供へ、存命のごとく挨拶し涙を流しことに愁傷しけり。年月ふるといへども今以つて他へ行何にても食よき者あれば母存生なりせば土産となさんものよと歎きけるを、聞人哀れを催さる者なし。母死後にさん里人へ語りけるは、母の病中に誰々宜ふはかく孝行盡し貰ふ上は末々能事あるべし。随分大切に事へよと勵ましくれられしかども假令末々は乞食非人となるども、母存生のうち善き事あれかし何卒不自由なき様にいたし度と思ふ許りにて、心に任せざる事のみ多からん事今更悲しく思ひ侍る。今日と成ては日々佛壇の内ばかり幾度かのぞき泣のみなりけり。又病身の母滞りなく見届安堵なるべしといへる人あり。さん答へて仰の通り病身者故私先へ死する時は母もなんざ致すべし、然るを我等介抱なして見届し晩は本意とはいひ乍ら親子の因果にや今にても思ひ出し、子供兩人も失ひし事共母存命に居て呉られれば共々に咄しをもなさんものと毎度存じ出しぬといひて歎きける事もありけりと、里人

賞して語りけるとなり。彼行狀君に聽え奉り、文化八未年五月御藏米七俵たまはりて其孝心を賞せられける。さん四十六歳の時なり。同十一戌年六月の頃重臣内海某巡在の時鳥目一貫文たまひけり。それ孝は生けるに事ふるに愛敬し死するに事ふるに哀戚す。生民の本盡せるとは此婦の如きものならんか。

(五) 常津村彌左右衛門

御城下より五里あまり離れたる常津村といへる所の百姓彌左右衛門母に事へて至孝なり。父は甚六といひて一石餘の田地をもてり。男女の子五人あり。父は彌左右衛門八歳の時身まかりし後は、母一人の稼にて五人の子を養育なしぬ。彌左右衛門成人にしたがひ姉妹共三人はそれ〴〵に嫁せしめ、今は母と季妹と三人むつまじくくらしける所、七ヶ年前享和三亥年より母中症になやみ、終に手足叶はざれば彌左右衛門日頃に倍して看病なしける中にも里人の賞する一ツふたつを擧ていは、常に母の意に逆ふ事なくして事ふ。病付しより後は夏の日は陽をもつて蒲團を暖めて着せ、寒夜には母の手足を己が懐にいだきて温めなご様々心を盡し、季妹と共につかへけり。彌左右衛門二番目の妹わさといひしは丹波國福知山御領新庄村の民太四郎といふ者へ嫁し、姉妹も同國へ嫁し、相應にくらしける。就中太四郎は實意なる者にて彼彌左右衛門母に事へて、心苦なしけるを憐み合力のため彌左右衛門が末の妹を引とり、片付ければ去年よりは彌左右衛門一人にて母の看病さぞかし難儀ならんと里人彌左右衛門に妻を迎ん事を勸む。彌左右衛門答へ

ていふ。若妻る所の婦母の介抱行どいかさる時は却て無にしかすといひて無妻にてくらしける。さて彌左
右衛門常に近所へ出るにも行先を具に告げ、母の許しを請ざれば出る事なく、畑作または蠶の桑くきに行
時だも留守にて退屈ならんと察し、母を脊負筵茶瓶を携へ作場の邊に筵をしき母をして座さしめ、茶を煎
じ進め置て其働く内にも折々かたはらへ行て小唄をうたひなどして、退屈なからしめ、常に母の氣を勇ま
しめ長命を祈りけり。是兄弟の者幼ふして父に離れ我等五人の兄弟を母一人の養いくいか許りありつら
と思ひやり、せめては力の及ぶ限り氣をいため一日成とも長生させ度のみと聞えけり。さるによつて神佛の
參詣其外見物事には脊負行何程困窮にてもかゝ饅頭の類をとゝのへ持行て先にての慰みとなす。春の頃萬
歳など來る時は、毎年近き村までも脊負行て見物させぬ。既に此春も同國加佐郡河守といへる所の内宮御遷
宮の時だも一里あまりの道を脊負行て拜ませける。過し年かの新庄村太四郎がむすめ西國巡禮に出るを聞
きければ母は孫の事なり。暇乞のため逢度よしをいふ。彌左右衛門方には折柄佛事ありて尤も忙しき時な
りけれ共、母の望みもだしがたく思ひてや彼國より出る巡禮の通る道は必同國公庄村なりとて、其公庄村
まで餘程の道を負行きて其所に待に果して孫女通りかゝりて對面させければ、母のよろこぶ事大方ならず、
又母の里は一里餘を隔つる所なり。其所へ負行事は常なり一ツとして母の望みを達せざる事なし。近年
は母難病の上に老耄して親類近隣の者のかほは忘れざる故咄應對に替る事なしけれども名を忘れ誰を見て
も伯父々々と呼びぬるばかりの老耄ゆる、髪を結び沐浴させ帯をめて是にてこそ嫁入は出來ますと戯れに

歳など来る時は、毎年近き村までも脊負行て見物させぬ。既に此春も同國加佐郡河守といへる所の内宮御遷宮の時だも一里あまりの道を脊負行て拜ませける。過し年かの新庄村太四郎がむすめ西國巡禮に出るを聞きければ母は孫の事なり。暇乞のため逢度よしをいふ。彌左右衛門方には折柄佛事ありて尤も忙しき時なりけれ共、母の望みもだしがたく思ひてや彼國より出る巡禮の通る道は必同國公庄村なりとて、其公庄村まで餘程の道を負行きて其所に待に果して孫女通りかゝりて對面させければ、母のよろこぶ事大方ならず、又母の里は一里餘を隔つる所なり。其所へ負行事は常なり一ツとして母の望みを達せざる事なし。近年は母難病の上に老耄して親類近隣の者のかほは忘れざる故咄應對に替る事なしけれども名を忘れ誰を見ても伯父々と呼びぬるばかりの老耄ゆる、髪を結び沐浴させ帯をめて是にてこそ嫁入は出來ますと戯れに



いへば、母も悦びける程に老衰しても、萬に退屈せずとなり。餘儀なく御城下の町へ行ん時は其よしを母に告げ、隣家へ母を頼みおき出行といへども、母は其かへるをましかね入口までもはひ出、彌左右衛門歸るを見れば伯父々々といひて悦ぶ事小兒の母をまちはぶるがごとし。よつて彌左右衛門心を配り事ふるも亦その如し。たどへ手の離れしがたき業に取かゝり居る共母の退屈の體を見れば其業をすて置側へ行て小唄淨るり或は昔咄し、物まねをなし又は脊負出氣を慰むる事唐土の老萊子に彷彿たり。年のくれば何國の浦迄もいそがしきものにして貧民は猶更不手廻り、心支なる時節なりといへども母の慰をなし、伽をなす事平生に變る事なく只母の心を以つて己が心となせば元朝より大晦日まで晝夜の別もなく、元より他の聞にも何の思ひやりもなく、聲高に唄笑ふを他より聞く時は氣の狂ひし様におもはれけり。全體彌左右衛門酒を嗜むといへ共絶てのまざる故をとへば、酒をのむ時は座の長くなり易きものなり。餘儀なく町方へ出る時とにかくも難病の母を隣家へ頼み置行ことなり。よつて我歸りを母の待ん事必定なり。我酒をのめば一寸酒店へ立寄りても手間とれ易く萬一歸りおそなはりし時母その故をとほりまさか酒屋に酒のみ居たりともいひがたし。其時は彼此用向多かりしとか、何とかにておそなはりしと僞はらん心の萬一起りてはよからずと思ふ故にのまざるなりと答へける。又何ゆる親を大切にするやどその心入を問へば、親は大切になさで叶はざる事に思へども、身不自由にくらせば何一ツ孝行らしき事も得こそせずといへども、幼少より養育の恩を思へば心の及ぶ丈は力を盡すこそ我が心すまじと存じて老年のうへ長病の母ゆるせめては退

屈なからんやうに心を用るのみと答へける。かゝる心ばえなる故に無妻にして母の介抱のみに身をゆだね
 いかほごかんなんにくらすといへども母へは其體も見せざりける。畢竟姉妹皆律義なる者にして丹波邊に
 ては相應に暮せし方へ嫁といへども母の事心に忘れざればとひ訪づるゝ中にも新庄村のわさは殊に母をし
 たふ事ふかし。其夫太四郎とり分心をつけ、三人の婿へはかりて彌左右衛門が孝養を助ける故に彌左右衛
 門も亦母の介抱のみにかゝり居て、孝養を盡す事を得たり。彼婿共常にいひけるは如何なる故にや、彌左
 右衛門へ送る所の物は惜からずとなり。是みな彌左右衛門が孝を天憐み給ふ者なりと聞人擧つて感歎せざ
 る者なし。既に其孝狀文化六巳年君の御聽に達し奉りければ、御發駕の節追手前に召出され其孝なるを厚
 く賞し、孝子等と共に白銀をたまふ。此時母の齡七十七歳、彌左右衛門四十歳の時にして、翌未年その孝
 の怠らざるを聞召し、御藏米七俵賜ひ同十一戌年重臣内海某巡在の節また鳥目を若干たまひて厚く御賞あ
 りけるとかや。

附 録

小橋村源左右衛門子

五 郎 兵 衛

年數を歴孝の行狀記録失せさだかならざれ共元祿四辛未年八月二十二日御城において親孝行を御賞美遊
 され鳥目三貫文親源左右衛門へ御藏米二俵被下其砌御能拜見被仰付。

元 大 庄 屋

安 久 兵 左 右 衛 門

寛政七年の頃十八歳心學に志し、上河淇水翁の教を受其後大庄屋被仰付。猶また文化十癸酉正月二十二
 日被召出被仰渡候。

其方儀親代々相應之身柄に有之候處身分を高ぶらず相働き御田地大切に耕作仕其上村方並身内家内和
 順にくらし竝に村方に於いて囚人小屋へ入牢被仰付者いまだ無之全く居村其方の諭方宜敷故迎御褒詞
 被下置。

弘化二年六十八歳宗門御改のせつ兼て家業出精に付御褒美被下置。

此末の者共親親に舅姑へ事へ方よく風儀よき者共にて廉立ち書とる程の行狀は無くとも、御褒美被下候
 まゝを記す。

大 内 町

市 右 衛 門

女 房 ぶ り

常に母の命に逆ふ事なく事毎に母にとふて行ふ。家まづしく屋の後に樹あり、實を結ぶ是を賣代なして
 日用の助となさばやと母に乞ふ。母許さず再びあふ事なし。常に荒き食を夫婦食し母へよき食を進ける類
 ひ奇特なりと寛政元年酉五月十日賞して鳥目を賜ふ。

八 田 村

德 右 衛 門
女 房 　　き 　　は

九〇

九十二歳に相なる母長病にて存生中母の申にしたがひ、夫婦ともよく事へけるを享和二年十月十七日奇特と賞し、鳥目を賜ひなほ實體にて心得方よろしきに付文化六年白銀を下さる。

野 村 路 村

六 次 郎

次兵衛といふ百姓の弟にて若き時より奉公をいたし、生質實體にて主家のつとめいさゝかも如才なく勤むるに依り、田地も求め母を我方へ引とりやしなひ、母の意に任せよく事へ農業油断なく働きけるゆゑ、追々田地を買、母にも安堵させける。文化二丑年御賞美被下しとき母九十四歳、六次郎六十歳になりける。後村中いよく孝を稱し文化八年再賞して又鳥目を被下ける。

魚 屋 町

孫 七

家業出精母へ事へ能に付。

同 町

三 四 郎 悴 忠 四 郎

兩親へ仕へよく家業大切に稼に付。

堀 上 町

善 太 郎 母 　　か 　　な

西町佐市女にて六左右衛門へ嫁舅姑へよく事へ夫死後九十一となる姑に孝養能に付。

西 町

兵 七

兵七は上東村兵次郎といへる百姓の弟にて養父佐市養子となり、養母の心に背かずよく事へ母五ヶ年前より中風を病ふ。貧窮の中にてよく心をくばり九十一歳の老母を大切に介抱なす事奇特に付。

朝 代 町

七 右 衛 門 養 子 安 三 郎

實父は京都堀川通松原下る町萬屋文治子にして安三郎二歳のとき相果母は七右衛門姉にて七右衛門方へ連歸り後七右衛門養子となす。至つて貧窮の所養父を大切に仕り家内むつまじく奇特なるに付。

大 内 町

政 右 衛 門 母

此女は大君村百姓太左右衛門女にて政太郎父利八へ嫁し、政太郎七歳の時夫相果て二十八歳にてやもめとなり、家業も無之といへども政太郎二歳の女子をそだてつゝ老年の舅姑を大切に介抱せしを舅姑とも餘人に語りよろこびける。此年舅は八十一歳にて死、後いよく姑を勞り孝養をなすに付。

丹 波 町

德 治 郎 弟 彌 兵 衛

彌兵衛孝友の聞えあり。父五郎兵衛寛政六年相果兄兩人は他所へ出弟一人妹兩人引つれ、母を大切に事へすべて母の意に背かず。もとより貧窮故日雇稼ぎにて榮るい又は振舞にゆく共味よき品は皆持歸り母に食させ、其上兄弟の間甚だ睦じきに付。

寺 内 町

久 七

女房 かん

久七は北有路村なる善四郎子にて四歳のとき久右衛門養子と成、のち養母は離縁同御城下新町に長兵衛女かんを久七に嫁す。家貧にして魚荷持を渡世とす。養父年老いぬれ共久七夫婦よく事へ、雇はれ先の暇には見舞に歸る久七かん別して心をくばり事ふる故。貧しき中にも何不足とも思ふ事なしと久右衛門人々に告げよろこびぬ。久右衛門其年八十九歳にて相果しのち御褒美下されける。

西 町

久右衛門女房

と

め

此ごめは福井村嘉平といふもの、妹にて、久右衛門へ嫁す。久右衛門は京へ通ひ賃持などなして渡世とせし故、多分宿に居らざればごめ舅姑に能く事へぬ。舅長助寛政十年年死す。後は姑長く中風をわすらしを夫留守中引うけ別して大切に介抱なせしに付。

本 町

嘉右衛門子

孫

三

郎

奇特なる者にて親を大切に事へ風儀よろしきに付。

下 漆 村

惣

七

父は惣兵衛と云ひしが惣七三歳のとき死す。母は氣まゝなる生質なれども惣七少しも逆ひし事なく、貧窮故日雇となりて稼なかにも母他村へ出さず。居村にても日雇先を母撰きらひして出さざれば村方へは不實となりさしつかへとは思へども、母の心に随ひ母の言葉に逆はず他人え申分などなきに付。

竹 屋 町

伊

八

奇特なる者にて父病氣の介抱行とゞき兄吉左右衛門へ大切に事へ家業を相助け實體なる者に付。

同 町

三

次

奇特なる者にて老母を大切に事へ主家の奉公倦怠なく出精相勤め風儀實體に付。

田邊孝子傳跋

此書は文化九年の頃京都に勤に書初めそれ、江府へ家族共引越しなほも孝子等の實狀をさぐり求め漸く文政六年筆を止めて若州侯の御内菅山山口先生の訂正を乞ひ、又其頃江戸にて心學に名高き堀内藏頭様。御藩中に藤田東山といへる老翁あり予其徳をしたひ折々予が小屋へも招き道話を乞ひける折柄此草稿を見て何ぞ上梓をせざるやと有しに、予其力なしと答ふ翁の曰く我も其力なしされ共心學社中の豪富の人々に謀らばとみに成就せんとて持歸られぬ。其翌年卯月の末翁來りて曰く、われは去秋より武州忍鹿御頼みにより其國中を道話なして此ごろ歸府せり、よつて豫てうけ合し版行の事いまだ社中へ計るいとまなく延引の斷りに來りぬ。近日にはからんと聞えける。予答へていふ翁の厚志謝するに餘れり幸なるかな予宿願により此秋は故郷へ復家族引連れ歸るべきと主命あれば、國の善事を海山隔つる人々の力をからんも國の恥なるぞかしといへば翁げにもとてかの草稿を返されける。其文月の始め國に歸り見れば二十とせ餘

りの年を経ぬれば、知己の人稀なる中に其昔大庄屋役を勤めける森脇源三郎といへるが隠居して後は源太夫とよぶ、此人元より心學に志あるまゝ、予が年來の志願を語れば彼又社中に謀らんと請かひしにこの人も亦、過行ぬればこれ予が志を天の許し給はざるならんと夫よりは打捨置ぬ。却説去る年の夏書器の虫拂ひせし時、此草稿を見て本意なくせめては寫本となし一二部世に残しおかんと思ひかへし、予が兄林六三郎が孫なる林文吾正之は書くことを好みて五峯といへるにさしるをかゝせなといとはん折節藩中なる古河某來訪し此體を見て其故を問ひ、一見して歸られけるが翌日又きたりて曰く、此節京師心學の講師柴田叟軒御郡中を教諭の道話の折からにて彼書の物語せしに、柴田氏曰く來るといへどもたせる善門の書あるを知らず。願はくば草稿の事早く一見を望まるゝにや何と暫時我にかしくれよと乞るゝに任せとり出しぬれば即携へ行れ、しばしも引土村なる源三郎其席にありて此話を聞我祖父の志をつぎて梓に携んとあるに固く柴田氏の厚志徳作により、此國兩社中の有志の人々の助力によりてはからずも拙き筆の忽に彫刻となりぬること歡喜にたへず喋々敷も事の始末を。

嘉永四年の中秋吉旦

七十八翁 源 むねよし誌

屋みよのしるしをよみしるす
 とけいからしめしるす梅の香を古人の
 ともあつしるす思ひ人志す周心乃
 若のそちを思ひしるすはさるる
 ちせしるす母後田を
 志らしるす國のふり招きせしるす海
 せしるす先師より傳くしるす

めいさるかひくぬけあのまう求心ま敬の
あ合せは免 侍封内の始く海を
くまのうく出りく拙きさうくを速侍よ
まなをま國のゆいなる民はさるぬあ
おのほのう改交は海もあはれきま
あまのまはまうされま名孝子昭録あつ
出ぬるをすま 邦君より海をくふ

褒賞阿らまらまねくくをせまの
かまのこのまらま人まをうまはま推ひ
まはま是なん聖代の餘風ま子及し
こまはま海を以て後廣瀬の大人か
屋まあま志ぬく我 名門のまを
まくもまのま後まをま海ま
この 御領内の孝子をせま弘くあ

はしと満きし政をぬる等ひと助け
せむるよと誠を以て幾と一月
思ひをいふ事の秋つひも若き時を
何と様よ錦のよのめをききればは志
あつひも阿まそかく成ぬるゆゑよ
何らますと一筆かいたよと志ひと情をせ
とももなきは漢字あるよと志ひと情を

癒はるの難されにふとく群一めを
たしと成るよとせらふといふよ
あはれにふにふとく群の成るよ
大人のを誠のよとせらふといふよ
まふは人かよとせらふといふよ
拙きしよとせらふといふよ
ふとくはふとくよとせらふといふよ

きんぎょのしるし

嘉永四年の仲秋

平安

柴田武修識



田邊藩善行を表彰し貧窮を賑恤して芳を竹帛に垂る。後世學ぶべきこと尠からず、いま史料叢書編纂せんとするに際り收めて以て遺徳を欣迎せんとす。

大正十二年六月

永濱宇平



田邊藩善行を表彰し貧窮を賑恤して芳を竹帛に垂る。後世學ぶべきこと尠からず、いま史料叢書編纂せんとするに際り收めて以て遺徳を欣迎せんとす。

宮津事蹟記

五册

文久二年春

宮津 山形屋與十郎錄